

神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

幼子の持つ「語らせる力」に気付こう

皆さん、新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。今年、私の決意は、「片付ける。先送りしない。」としました。昨年、教会の改修工事をずっと先延ばししたことを大変申し訳ないなあと思っておりまして。今年、何か動かなければならなくなったら、もっと素早く動いていきたいと思います。

さて、1月1日、神の母聖マリアの祭日に与えられた福音朗読の箇所は、羊飼いが誕生した幼子を探し当て、幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせたという場面になっています。その後の展開は、「聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2:18-19) となっていく

ます。そこで、毎年のことですが、この中にあるマリアの態度、「出来事をすべて心に納めて、思い巡らす」という部分から、今週の糧、また今年一年の計を探してみましょう。まず、羊飼いの態度から取り上げてみたいと思います。

天使から、羊飼いに告げられた言葉は次のようなものでした。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」(2:11-12)。

この言葉に従って、羊飼いたちはベツレヘムに行き、マリアとヨセフ、また飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てます。そこまでは当然の流れですが、幼子を探し当てた羊飼いたちは、さっそく出来事を人々に知らせに行くのです。「知らせに行く」という行動は、天使に命じられたことでもなく、羊飼いたちが自発的に取った行動です。

この場合、2つの可能性が考えられます。1つは、羊飼いたちが活動的であったので、出来事を人々に積極的に知らせに行ったというケースです。もう1つは、出来事そのものが、語らせる力を内に持っていて、それを見た人は、どうしても語らずにはいられないと考えるかです。皆さんは、どちらだと思うのでしょうか。

私は、後の可能性が高いと思っています。羊飼いたちは大変喜ばしい出来事を目撃したのですが、だからと言って人々に知らせに行くことまで求められてはいないと思います。たとえば、この喜ばしい出来事にすっかり有頂天になって、知らせに行かないで終わることもあり得るわけです。

例を挙げると、重い皮膚病を患っている10人をイエスがいやしてあげた時、感謝しに戻ってきたのは1人のサマリア人だけでした。あまりの嬉しさに、我を忘れるということはありません。救い主誕生の出来事を、人間の知恵によって知らせに行くというのであれば、必ず知らせに行くとは限らないわけです。

私が、後者ではないかと思った、つまり、出来事の中に「語らせる力」が秘められていて、見た人はそれを言わずにいられなくなると考えた理由は、そういう体験が身近な所にいくらかでもあるからです。ついでに言う、出来事によっては、うっかり口を滑らせたくないようなすばらしい出来事でも、人間が語ろうとしないという場合もあります。

出来事の中に、「語らせる力」が秘められている例を挙げてみましょう。このたぐいの例を挙げるのは簡単です。私自身の体験で言いますと、昨年末最後の魚釣りは12月29日でした。「1年の締めくくりに、行ってくるか」ということで出かけました。この日は久しぶりに島の裏側に回りまして、伊王島と高島の間あたりでイトヨリ釣りをしたのでした。幸いに、まともな魚が1匹だけ釣れました。合計では5匹釣りましたが、そのまともな1匹のイトヨリは、30センチを超える、まあまあの型だったわけです。このイトヨリことは、どこかでぜひ話しておきたいなあと思っていたわけですが、今日やっと、チャンスが回ってきました。私はたいして釣れてない時にホラを吹いてまで「たくさん釣ったよ」と触れ回るたちの人間ではありません。でも、大きな魚が釣れると、誰でもそうでしょうけど話したくなるんですね。それは、私が話したがやだからではなくて、魚に、言わせるだけの力を内に秘めているのではないのでしょうか。見せびらかしたくてたまらなくなるのは、魚そのものがそれだけ立派だからだと思います。

救い主誕生の出来事も、羊飼いが話したがやだったから人々に知らせたというよりも、やはり、出来事そのものに、「語らせる力」があったのではないのでしょうか。幼子のもとには、しばらくすると占星術の学者たちもやってきます。私たちの教会でも、星の導きを頼りに学者たちは今旅をして、幼子のいる場所を目指しているところです。

どんなに小さなしるしであっても、そこに「語らせる力」がある出来事は、見た人を動かし、「語る人」に変えるのだと思います。マリアは、羊飼いが幼子を探し当て、見つけた後に人々に知らせる人になったのを見ました。宿屋もなく、救い主としての飾りもない、体一つの幼子を見た羊飼いが、人々に知らせる者となった。この幼子の中に、「語らせる力」があるに違いないと、思い巡らしたのです。

マリアの姿は、私たちに取るべき態度を示していると思います。私たちも、今は小さなしるしで現れてくださった救い主を目に焼き付けて、思い巡らしてみましょ。私が、信仰のことを人に知らせるとしたら、幼子としてお生まれになったイエス・キリストを伝えるべきではないだろうか。

何も身構えなくても近づくことのできる姿で、神はおいでになったのですよと、私たちは知らせるべきではないか。マリアのように思い巡らすことで、お生まれになった幼子から、私たちのなすべきことを教えてもらえるのではないのでしょうか。

2009年、新しい年が巡ってきました。これからの歩みの中で、何度か、信仰を言い表すような場面が生活の中に現れるかも知れません。私はその時、尻込みしないで何かを言い表すことができるだろうか。今マリアのように思い巡らすことにしましょう。今日からの1年、私たちがマリアの取り次ぎによって救いの出来事を人々に語る者に変えていただける

よう願いましょう。

主の公現(マタイ 2:1-12)

主の公現(マタイ 2:1-12)

贈り物を献げた学者は、自分の国に帰ります

主の公現を迎えました。東の国からやって来た占星術の学者たちも、ようやく幼子イエスのもとにたどり着きました。彼らはここに来る前にこの国の支配者であるヘロデ王にあいさつに行き、自分たちがユダヤに来た目的をはっきり伝えます。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです」(2:2)。

占星術の学者たちの態度を、今週私たちもしっかり心に刻みましょう。「わたしたちはユダヤ人の王としてお生まれになった方を拝みに来ました」。学者たちは、ヘロデへの挨拶もそこそこにユダヤ人の王を探し当て、礼拝をささげたのです。

目的がはっきりしている人の足、目的を持っている人の目は誰の目にも明らかです。脇目もふらず、その人の足は目的地に向かいます。彼らの姿と、私の姿を比べてみましょう。私は、占星術の学者のように、目的を持ってこの神の家に集まっているのでしょうか。

もっとはっきり言うと、「王としてお生まれになったお方を拝みに」やって来たのでしょうか。もし、幼子を拝みに来ているなら、私の足はしっかり目的地に向かっている足と言えるはずですし、私の目は何をすべきかはっきり捉えている目をしているはずです。

次に、学者たちはひれ伏して幼子を拝み、「宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」(2:11)とあります。彼らは幼子を王として拝みに来たのでした。学者たちにとって、王である幼子にふさわしい接し方というのは、贈り物を献げることだと考えたのでしょうか。まだ言葉も話しませんし、何かの意思表示をするわけでもありません。それでも、占星術の学者たちは幼子を王として扱ったのです。

私たちも占星術の学者たちに見倣いましょう。幼子イエスを王として受け入れる態度を考えてみましょう。私が、どんな態度を取れば、幼子を王であり救い主であると認める態度になるのでしょうか。

いちばん身近なことは、贈り物を献げることです。占星術の学者たちは黄金と、乳香と、持つ薬を献げました。これら3つの贈り物が意味するものを、私たちが献げるなら、私たちは立派に幼子イエスを王として、救い主として受け入れていることになります。

この3つの献げ物が意味しているものは何でしょうか。黄金は、この世でもっとも高価な金属です。この世でもっとも高価なものは、もっとも尊い相手にふさわしい贈り物です。つまり、黄金を献げることで、その人はイエスを神として認めることになるのです。

乳香は、お手元の聖書と典礼の第1朗読解説にあるように、アラビアから輸入される香料で、古くから神殿への供え物にも用いられたとあります。神殿とは、神がおられる場所です。学者たちがイエスに乳香を供えたことで、イエスは神殿であり、神殿におられる祭司であることを認めて献げ物をしたということになります。

没薬は、聖書と典礼の福音解説によれば、結婚式や埋葬の際に用いられた香料とあります。表敬を表す贈り物として用いたのです。こうしてイエスが王であることを学者たちが認めたことを表しています。

3つの献げ物をよく学ぶ時、私たちも幼子に王として、救い主として接する道が理解できるようになります。私たちもまた、3つの献げ物を用意することで、幼子イエスにふさわしい態度を取ることができるのです。

では3つの献げ物を自分自身に当てはめてみましょう。黄金とは、この世でもっとも高価なものです。私にとってこの世でもっとも高価なものはなんでしょうか。もしそれを、幼子イエスに贈り物として差し出すなら、私たちは幼子を神として認めることになると思います。あなたにとって、もっとも高価なものが何か、私には分かりませんが、それを惜しいと思わずに、幼子の前に差し出しましょう。

乳香とは、神殿に対する供え物です。もっとも高価なものとはまた少し違う意味合いがあります。私の持っているもので、神殿への供え物は何でしょうか。神殿におられるイエス・キリストに、すぐに役立つものです。例えばそれは、婦人会が土曜日に実行している教会掃除かも知れません。花飾りかも知れません。お父さんたちの土日の守衛さんの仕事も、神殿へのりっぱな供え物です。ぜひ続けてくださって、供え物を絶やさないようにしていただきたいと思います。

結婚式や埋葬の際に用いられた没薬は、歌であり、祈りだと思っています。幼子の前で聖歌と祈りを私たちが献げるなら、私たちは幼子を王と認めることになります。まとめると、今集っているこのミサこそ、幼子イエスへのいちばんふさわしい贈り物になるのではないのでしょうか。

しかしながら私たちは、いつまでもこの聖堂の中に留まっているわけではありません。聖堂の中で私たちは生活しているわけではありません。実際の生活の場所に戻っていきます。戻っていく時に、私たちはここで学び、目で見えて確かめたことを置いて帰るのでしょうか。

そうではありません。私たちが何かを見、学んだのであれば、それを生活の場に持ち帰るべきです。今週であれば、「東の国からやって来た占星術の学者たちの前に、幼子イエスは王として、救い主として示された」そのことを私たちは持ち帰るのです。見て、確かめたことを持ち帰り、羊飼いのように、また東の国に帰っていく学者たちのように、人々に告げ知らせましょう。私たちが幼子イエスに贈り物を献げてきたことを、この一週間、人々に知らせる者となれるように、ミサの中で照らしを願いましょう。

主の洗礼(マルコ 1:7-11)

主の洗礼 (マルコ 1:7-11)

洗礼によってイエスは最後の水まで清めた

「主の洗礼」の説教を、うんうん唸って、もだえながら考えていたのですが、あーこれはいいかもしれないなあと思ったことを眺めてみたいと思います。洗礼に水が用いられているという点にもう一度じっくり目を向けた時、何かしら響いてくるものがありました。

「水」の基本的な性質は、「高い所から低い所へ流れる」ということです。この原則は、人が無理矢理に何かの細工をしない限り変わることはありません。今日馬小屋に、1つの絵を掲げてみました。本当は、ここに1メートルちょっとの大きさの御像を置く予定でしたが、今年の「主の洗礼の祭日」に完成できませんで、来年の同じ祭日にはお見せできると思います。この御像の写真はまさに、イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けている場面ですが、イエスの頭に水が注がれています。ここにも、私たちがよく知っている水の姿、「高い所から低い所に流れる」その特徴が現れています。また、水はものを洗い清めますが、私たちの経験によれば、ものを洗う時はよごれの少ないものから洗い始めて、だんだんよごれのひどいものへと使われていきます。川が流れる土地では、水はまず飲み水に使われ、それからちょっとした洗い物に使い、いろいろ使い回された最後の水を、洗濯に使っていました。洗濯は、最後の最後に、水を使い切る手段だったわけです。

イエスは洗礼者ヨハネから、水による洗いを受けました。洗う必要のあるよごれなど、これっぽっちもなかったのに、水による清めを受けました。何も清めが必要でなかったのに、イエスはヨハネから洗礼をお受けになりました。私はここで、イエスが水のどの部分にいたのだろうかと考えたのです。

先に話したように、水で何かを洗い清めるには、順番があります。よごれの少ないものから始まって、最後の最後、いちばんひどいよごれ物を洗い流すのです。では、イエスの思いの中で、ヨハネから受けた水は、どのあたりを意識して受けたのでしょうか。

私はこう考えます。イエスは、最後の最後、いちばんひどいよごれの物を洗い流す水を意識して、洗礼をお受けになったのではないかと考えたのです。つまり、イエス自身は一切清めが必要なかったのであり、清めが必要だったのは、むしろ水のほうだったということです。

これから水と聖霊によって多くの人々が洗礼を受ける。その水を、全世界の水を、今ヨルダン川の水に代表して、清めるためにこの洗礼の場においてになった。聖霊と水による新しい洗礼によって、もともと心の清い、ほとんどけがれに染まっていない赤ん坊に始まって、社会のドロドロした場所に浸かってその後に導かれて洗礼を受ける人々に至るまで、すべての人を洗い清める洗礼の水となるように、イエスが洗礼を受けることで全世界の水を清めた。私はそう考えたいのです。

そのように考える時、イエスがヨハネから受けたその水は、けがれに染まっていない赤ん坊を清めるきれいな水だけではなく、ドロドロによごれき

った人間関係の中にあった人を清める最後の最後の水でもあったと考えることもできます。イエスは、この水は最初の頃に使う水だけではなく、最後の最後の水としても、人々を洗い清めるのだと、そういう意識で洗礼をお受けになったのではないか。そんなことを考えたのです。

イエスは、洗礼を受け、水の中から上がる動作をなさいます。最後の最後に使う水まで降りていって、そのいちばんよごれたものを洗う水の所まで行って、そこから上がってきて、いっさいの水を清めた。最後の最後、その場所にも罪の闇にある人間がいることでしょう。そこへもイエスは降りていって、人間を救うために、聖霊と水による洗礼を用意してくださるのです。

水から上がってくる時、すべての水、いちばんひどいよごれを洗う水さえも意識して、すべての水から上がってきた。そこへ天からの声が響きます。

「あなたはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」(1・11)。

イエスは、水が流れていってたどり着く最後の最後まで沈められてそこから上がってきたので、御父に愛される子であると思います。すすぎも要らない、軽く流すだけできれいになる場所だけを見てきたのではなく、もはや清められることなど不可能と思われるような場所まで、イエスは降りていって救いの手を差し伸べ、上がってこられたのです。それはつまり全人類を救う場所まで降りていったのです。だから、御父に愛されるのだと思います。

イエスが洗礼者ヨハネから受けた水は、「上から下に流れる水」でした。当たり前ようですが、実は当たり前ではありません。いちばん最後の、最後に流れ着く先まで降りていって、その水を清めてから上がってこられたのです。ですから、イエスが残してくださった聖霊と水による洗礼を受けた人は、どんな人であれ、どんな過去があったとしても、必ず救われるのだと思います。

年間第2主日(ヨハネ 1:35-42)

年間第2主日(ヨハネ 1:35-42)

本当につながるべき相手はイエス・キリストです

今週はまず第1朗読から話を始めたいと思います。サムエル記の主人公である少年サムエルは、神殿で寝起きして祭司エリに仕えていました。その少年サムエルが、眠っている間に主に呼ばれます。主に呼ばれ、将来の預言者に向けた導きが始まっていく、その最初の出来事が今日の第1朗読でした。

少年サムエルははっきりと自分に呼び掛ける声を聞いたので、祭司エリのもとに行って、「お呼びになったので参りました」と祭司に答えます。もちろん祭司エリは少年を呼んでないのですが、おもしろいなあと思ったのは、ひと晩で3回も、「お呼びになったので参りました」と祭司のもとに行くわけです。私が祭司だったら、「いい加減にしてくれ。寝られないじゃないか」と言いたくなります。

それに、ひと晩で3度ぐっすり眠って、声を感じてその度に祭司のもとに出向いたわけですね。起こされてまたぐっすり眠って、起こされてまたぐっすり眠ってと、そんなに切り替えができるものなのかなあと思変な所で感心しました。あまり妙なことが起これば、眠れなくなるのではないかと私などは心配するのですが、少年はすぐに眠りにつくのだなあ、羨ましいなあと思ってしまいました。

さてサムエルが、主の声を聞いて祭司エリのもとに行ったのは、ただの勘違いとも言えないと思います。少年サムエルは、神殿で祭司エリにお仕えして暮らしていました。祭司エリは、言わば親代わりであり、サムエルにとって離れてはならない相手だったのです。いつも祭司のそば近くで仕えて、祭司エリとの深い絆を感じていたわけです。

もちろん祭司エリも、そんなサムエルの気持ちを知っていたでしょう。少年の心が祭司に固く結ばれていることを再確認したと思います。けれども最終的には、祭司エリは少年サムエルをお呼びになったのは主だと理解しました。そこで彼は、人間である自分との絆よりも、主との絆を理解させ、主に固く結ばれるよう優しく導いたのです。「戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話しください。僕は聞いております』と言いなさい」(サムエル上 3:9)。

私はここに、祭司エリの優れた素質を感じました。起こっている出来事を正確に読み取り、目の前にいる少年にいちばん必要な指示を的確に与える。これは優れた指導者、賢者でなければできないことです。もっと言うと、祭司エリを優れた指導者となるよう導いた主である神の働きに、圧倒されてしまいます。

優れた人というのは、たまに優れているのではなくて、やはりその人全体が優れているのだと思います。たまたま人の心の中にあるものを言い当てたとして、その人が優れているかどうかはまだ分かりません。すぐに化けの皮がはがれることもあるでしょう。その全体が優れているという指導者に少年サムエルは巡り会い、彼から全宇宙の指導者である主へと導かれていったのでした。祭司エリに固く結ばれた少年を、さらに大きな方との絆

に入るように促したことで、祭司エリは真の賢者だったのです。

この第1朗読の流れは福音書につながっています。洗礼者ヨハネは自分の弟子であった2人を、イエスへと向かわせました。ヨハネの2人の弟子は、ヨハネに固く結ばれていたはずです。もしヨハネが頑なな人であったなら、「お前たちはまさかわたしを捨てないだろうな」と言って脅したかも知れません。

けれどもヨハネは、真に偉大な預言者でした。自分に固く結ばれていた弟子を、イエスに向けさせるのです。「見よ、神の子羊だ」(ヨハネ 1:35)。2人の弟子は戸惑ったことでしょう。「自分たちがイエスという人のもとに行けば、先生のもとを去ることになる。本当にそんなことをしていいのだろうか」そんな迷いがあったのではないのでしょうか。

2人はヨハネへの未練を残しつつ、イエスのもとを訪ねます。そしてイエスの魅力をすぐに理解し、イエスのもとに泊まるのです。2人はイエスの偉大さに惹きつけられると同時に、自分たちをイエスのもとに向かわせた洗礼者ヨハネが真に偉大な預言者であったことをあらためて知ったことでしょう。

イエスという、本当に結ばれるべき相手を知りながら、その邪魔をするなら、その人は真に偉大な人物とは言えません。真に偉大な人は、「花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている」(ヨハネ 3:29)ときっぱり言える人なのです。

祭司エリ、洗礼者ヨハネという偉大な指導者のことを話しながら、私は1つのことを思い出しました。滑石教会から転勤となって太田尾教会に異動になった時のことです。私が教会の役員たちと一緒に苦労した時間を思い出してくれて、自分と離れなければならないことを思っ婦人会の方が涙してくれました。その時私はこう言ったのです。

「ありがとうございます。わたしのことをそんなに思ってくれるのだったら、次にやってくる神父さまに、わたし以上にお仕えしてくださいね」。その婦人会の方は、わたしが転勤した後に婦人会長になって、あとでこんなに言ってくれました。

「神父さま、神父さまに言われたことはちゃんと守っていますよ。今の神父さまに、今まで以上に協力していますから、安心してくださいね」。その言葉を聞いて、私はほんのちょっとだけ、洗礼者ヨハネと同じような使命を果たせたのかなと思いました。

本当に結ばれるべき相手がイエス・キリストであると知っている人は幸せです。祭司エリの中にその種が見られますし、洗礼者ヨハネは明らかにイエス・キリストこそ栄えるべきであり、自分は衰えねばならないと知っていました(ヨハネ 3:30)。イエスの弟子となっていく2人も、イエスを知れば知るほどヨハネの偉大さが分かり、自分たちはイエスに結ばれるべきであると確認します。

それぞれの生活で、だれもがイエスこそ自分が結ばれるべき相手なのだと知る必要があります。自分自身をイエスに結び付けなければなりませんし、それと同時に、身近な人が、イエスに結ばれるようにお世話する必要があるのだと思います。

人をイエス・キリストに結び合わせるということについて、私は1つの機

械作業を見て、はっとさせられたことがありました。その場面を紹介して、今週の説教の結びとしたいと思います。それは、金属の水道管をつないでいる作業を見た時でした。ステンレスの水道管だったかなあと思うのですが、最初はまったくつなぐ部分のない水道管に、ねじ切りの機会を当てて溝を切っていくわけです。そうやって2本の金属管を、小さな継ぎ手をつないでいました。

一見なんでもない作業のようですが、私はその一連の作業を見てほとほと感心しました。まったくつながるはずのない2本のステンレス管が、機械で溝を切って、小さな継ぎ手でつながっていくのです。そして私は知らないおじさんがそういう作業をしているのを見て、心の底からこう思いました。「わたしは、ステンレス管をつないでいる継ぎ手になりたい」。

ステンレス管は、普通であればどんな接着剤を使っても簡単につながるものではありません。溝を切って、その溝にピッタリ合った継ぎ手を用意しなければ、つながらないのです。また、完全に適合した継ぎ手でなければ、水が漏ってしてしまうでしょう。

あんなに簡単に、溝を切って継ぎ手でステンレス管をつないでいる様子を見て、私は感動しました。私もあの継ぎ手になりたいと思います。小さな道具ですが、それがなければ絶対に2本のステンレス管はつながらないのですから、かけがえのない物のはずです。そのように、私は信者のみなさんと神さまとをつなぐ継ぎ手でありたいと思いました。

自分は、信者のみなさんに、どこにつながるべきかをはっきり示す役割がある。その役割に徹しなければならない。そう思ったのです。特に、信者のみなさんと神さまとの間に溝を切って継ぎ手でつなぐ部分は、この建物としての教会であり、ミサだと思えます。教会でのミサを通して、私はみなさんを神さまとつなぐ。そのために自分は小さな継ぎ手でありたいと、心から願いました。

だれもが、本当につながるべき相手はイエスであると知る必要があります。自分自身が、イエスにつながろうと懸命に努力して生きるべきですが、あわせて、周りの人を、イエスにつながるように手を貸してあげましょう。あなたが、だれかの継ぎ手になって、周りの人を神さまに堅く結び付ける人となれるように。今日そのためにミサの中でお一人おひとりのために祈りたいと思います。

(本年に限り) 聖パウロの回心(マルコ 16:15-18)

(本年に限り) 聖パウロの回心 (マルコ 16:15-18)

パウロの回心は、実は私たちの刷新に直結します

今日 1 月 25 日は、日曜日と重なってしまいましたが、「聖パウロの回心」を祝う日です。今年は教皇さまが特別に「聖パウロ年」を制定されましたので、日曜日のミサのうち 1 度だけ、「聖パウロの回心」の典礼でミサをささげることができると指示されています。

私たちの小教区では、大明寺教会が聖パウロにささげられた教会なので、大明寺教会で聖パウロの回心の典礼でミサをささげました。そして説教も、本来のように福音書に沿って説教するのではなく、聖パウロについて説教をしました。私は怠け者なので、馬込教会でも高島教会でも、説教だけは大明寺で説教したものをそのまま繰り返しさせていただきます。

さて、皆さんは聖パウロについてどのようなことを理解しておられるでしょうか。今年は聖パウロ年ですから、聖パウロについてできるだけ学ぶというのはすばらしい心がけです。ただし、皆さん一人ひとりが十分に材料を持っているわけでもありませんし、探せば材料はいくらでもあると言っても、それを探す手段も限られていると思いますので、できる限り、私が聖パウロについて学ぶ機会を提供したいと思っております。少なくとも 3 つ、聖パウロについて学ぶ機会を提供できると思います。

3 つの材料を並べておきましょう。1 つめは、今日の説教で聖パウロについて大まかな所を押さえてもらおうと思います。今年、聖パウロ年ですが、「聖パウロってどんな人ですか」と聞かれた時に、だれもがためらわずに「パウロという人は、こんな人でした」と言えるくらいの内容は持って帰ってもらいたいと思っています。

2 つめは、土曜日から始まる「聖パウロの手紙を学ぶ会」がパウロについて私たちが知るための良い機会となるでしょう。パウロはイエスの 12 使徒ではありませんでしたが、ある意味彼ら以上に活動的に、イエス・キリストを地中海世界に告げ知らせたのです。パウロの宣教旅行の様子を、今回の聖書朗読会で十分味わうことができるでしょう。

3 つめですが、これはもしかしたらばらさない方がいいのかも知れませんが、今年の黙想会は聖パウロについてじっくり学びたいと思っています。全体で 5 回くらい説教があるでしょうから、聖パウロについて集中的に話を聞けば、私たちは聖パウロの生き方を深く掘り下げることができるようになると思います。

それでは、今日は日曜日の説教として、聖パウロの回心について耳を傾けることにいたしましょう。パウロは、回心するまではサウロと呼ばれていた若者でした。この若者サウロが登場するのは、イエスへの信仰を受けた人々のお世話のために使徒たちによって選び出された 7 人のうちの 1 人、ステファノが殉教する場面です。

ステファノはイエス・キリストについて大胆な説教をし、それを憎んでいた人々がステファノを殺害しようとし、石投げの刑にして迫害するにあたり、人々が着物を若者サウロのもとに預けるのです。使徒言行録にそのあたりの事情が描かれています。

「ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、『天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える』と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、『主イエスよ、わたしの霊をお受けください』と言った。それから、ひざまずいて、『主よ、この罪を彼らに負わせないでください』と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。サウロは、ステファノの殺害に賛成していた」（使徒言行録 7:55-8:1）。

この若者サウロが、ダマスコという町にイエス・キリストを信じる人々を捕らえて牢に入れるために出かけている時に、不思議な体験をしてイエス・キリストを信じるようになります。ステファノの殺害に賛成していた若者ですから、イエス・キリストを信じる者はけしからん人々だと本気で思い込んでいたのです。

それほど強い偏見を持っていた人が、ダマスコの途上でイエス・キリストと出会う体験をし、すっかり人が変わってしまいます。彼の回心の出来事は、使徒言行録第 22 章に詳しく書かれています。大まか紹介すると、天から強い光がサウロの周りを照らし、彼は地面に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」という声を聞きます。

「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねると、「わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである」と答えがありました。さらに「主よ、どうしたらよいのでしょうか」と尋ねると、「立ち上がってダマスコへ行け。しなければならぬことは、すべてそこで知らされる」と返事がありました。この時、サウロはその光の輝きのために目が見えなくなり、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入ります。ダマスコにはアナニアという人がいました。アナニアにも主が現れて、アナニアに導かれたサウロは目が見えるようになり、アナニアの勧めに従ってイエス・キリストを信じる洗礼を受けたのです。こうしてサウロは、かつてけしからん人々だと思い込んで牢屋に入れることすらためらわなかった人々と同じ仲間になり、大胆にイエス・キリストを知らせる者となったのです。ここまでが、聖パウロの回心と言われる出来事です。

ここには、なかなか簡単には理解できない出来事がいくつも出てきます。第一は、のちにパウロとなる彼が、イエス・キリストと出会ったということです。強い光に照らされ、地面に倒れるほどの経験とは、いったいどのような出来事だったのでしょうか。これは、パウロだけが味わった特殊な体験で、ほかの人には決して理解できないものなのではないでしょうか。

第二の理解困難な出来事は、光の輝きのために目が見えなくなり、アナニアが「兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい」と言うと、見えるようになったというのですが、この「目が見えなくなったこと」とか「元どおりに見えるようになった」という体験は、イエスが生まれつき目が見えない人をいやした時の奇跡と、同じように考えるべき

なのでしょうか。それとも、何か別の説明が可能なのでしょうか。
ほかにも、パウロのダマスコでの出来事には、興味を持って深く分け
入ることのできる点があるようです。それらも含め、ぜひ今年の黙想
に参加して、聖パウロについての学びを得ることにしましょう。今年
6月いっぱいまで設定されている聖パウロ年を大きな実りの期間にす
るために、ぜひ「聖パウロの手紙を学ぶ会」と、「今年の黙想会」に
参加することをお勧めいたします。

年間第4主日(マルコ 1:21-28)

年間第 4 主日 (マルコ 1:21-28)

わたしたちはいつ、毅然とした態度を取るのでしょうか

昨日始まった「聖パウロの手紙を学ぶ会」は、予想を大きく上回る参加者で、ひとまず安心しました。25 人以上の参加は、正直、驚いています。大明寺教会も馬込教会も 25 人以上来ていました。大きい声では言えませんが、皆勤賞の人には大型聖書にサインをしてプレゼントしますって言いましたよね。この調子でずっと参加して、みんなが皆勤賞だったらわたしの財布は・・・とったりもしました。まあ、その日が来てないので、今からそんな心配はしないでおうと思います。

また、直接「聖パウロの手紙を学ぶ会」に参加できなくても、聖パウロ年のこの機会に、家庭で新約聖書を読んでみるということも大変すばらしい取り組みです。ざっと数えると 480 頁のようですので、1 日 3 頁ずつ読むと、6 月 29 日の聖ペトロ聖パウロの祭日までには確実に読み終えることができると思います。それぞれ、目標を持って聖パウロ年を過ごしていきましょう。

さて今週の福音朗読は、イエスが会堂で汚れた霊に取りつかれた人に命令して、汚れた霊を追放するという場面でした。まず、イエスが「黙れ。この人から出て行け」と厳しい口調で命令する様子が目を引きまします。イエスが「黙れ」というようなきつい言葉を使うのは、汚れた霊を追い出す今日の場面と、湖で嵐を沈める時に言う「黙れ、静まれ」(マルコ 4・39) という場面だけです。

このイエスの態度には、汚れた霊が人間を支配することを決してゆるさないという毅然とした態度を読み取ることができます。わたしたちもある場面では厳しい態度、毅然とした態度を取ることがあるでしょう。

例えば子どもが自分のわがままを通そうとして親を困らせる時、それが決してゆるしてはいけない身勝手な態度だと感じたら、親は毅然とした態度で臨むと思います。それを見た子どもは、これは絶対にゆるされないことなのだなと感じるわけです。わたしも、信念を曲げたくない場面では毅然とした態度を取ります。それは相手にはっきり自分の意志を伝えるためです。

イエスによって追い出される汚れた霊は、人間の中に入り込んでこの世を支配しようと企んでいます。人間がこの世の支配者であれば、人間を支配すればこの世を支配できるからです。けれどもイエスは、その企みを決してゆるしませんでした。

人間は、神に心を開き、神の教えに耳を傾ける時、初めて人間らしく生きることができます。汚れた霊はそれを邪魔しようとしていたのです。ただ単に人間に入り込んだだけではなく、神に従うべき人間の本来の姿を混乱させようとしていたのです。

イエスはそれを決してゆるしません。だからこそ、「黙れ。この人から出て行け」と厳しい態度に出るのです。そうしなければ、悪霊はこの世界の支配をあきらめないからです。イエスの毅然とした態度は、悪霊の望みを完全に打ち砕き、あきらめさせるものでした。最後のあがきで取りついて

いた人にけいれんを起こさせますが、まったく無駄なことでした。
今日の出来事でわたしたちが学べることは何でしょうか。それは、「わたしたちも、イエスを信じる者として、毅然とした態度を取らなければならない」ということです。ではそれはいつしなければならないのでしょうか。3つの場面を考えてみました。1つめは、公の場所です。2つめは、個人的な場所です。3つめは、自分の内面においてです。それぞれ、考えてみましょう。

イエスが汚れた霊に取りつかれた人と出会って、霊を追い払ったのはカファルナウムの会堂においてでした。会堂、それは大人のユダヤ人だれもが集う公の場所です。わたしたちにとってそれは、信徒会館であったり、日曜日に集まっている教会と考えてよいでしょう。または仕事先や、外出先でも構いません。

こんな場所で、毅然と、イエスを信じる者として振る舞います。イエスに反対する力に負けてはいけません。ここで毅然とした態度を取ることで、イエスの力を行き渡らせます。汚れた霊の支配に流されるのではなく、イエスの支配を行き渡らせるのです。

また、わたしたちの生活には個人的な場所があります。家庭であったり、自分一人になれる時間や場所です。個人的な時間は特に、自分の思い通りにしたいと思っているはずですが、けれどもその思いが隙を生じさせ、イエスに反対する考えや思いを招き入れる危険につながります。

わたしたちはこうした誘惑に対して、毅然とした態度を取らなければなりません。個人的な時間、プライベートな場所で、自分が自分の支配者だと思ってしまうこと。それこそが、イエスに反対する勢力の思うつぼなのです。むしろ、個人的な時間にイエスの支配を行き渡らせるほうが、平和と自由を味わえると知りましょう。

最後に、わたしの心の中、内面を考えてみましょう。わたしの心の中での戦いは、公の場でも、個人的な場所でも生じることがあります。だれにも見られることのない場所ですが、自分だけは、わたしの心の中を何が支配しているかを知っています。そしてその状態を、他人に対して偽ることもできます。

例えば、心の中に争いや怒り、ねたみや傲慢を抱えているとしましょう。それはまさに、汚れた霊に支配されている状態です。それなのに、人に対しては親切にしたり、忍耐強くいることもできます。心の中はイエスに反対する思いでいっぱいなのに、まるで落ち着きを保ち、平和であるかのように振る舞うこともあります。

そんな時、わたしは自分の心と向き合って、はっきり言わなければなりません。「黙れ。出て行け」。わたしの中に不満や怒り、いらだちが満ちているなら、そのような感情に自分を支配させてはなりません。本当の平和を保ち、柔和で落ち着いた心でいられるために、わたしはイエスの支配を待ち望む必要があるのです。

まとめると、わたしは今日イエスが汚れた霊を追い出したように、自分の生活のあらゆる場面でイエスに反対する力を追い出す必要があるということです。どこかで、「これくらいはいいだろう」とか「これはイエスに逆らっているとまでは言えないから」と妥協すると、いつの間にかわたしの生活にイエスの支配でないものが入り込み、問題を起こすことになります。

そうではなく、いつでも「黙れ、出て行け」と、毅然とした態度でいたいものです。この毅然とした態度が、周りの人と社会にイエスの支配を、神の国の完成を広げていきます。イエスが発した「黙れ。この人から出て行け」を、わたしたちも今の時代に受け継いで生きていきましょう。

年間第5主日(マルコ 1:29-39)

年間第5主日 (マルコ 1:29-39)

「隠れた祈り」をたやさないように

昨日土曜日は高島教会の信者さんの葬儀ミサ、また大明寺教会の信者さんの通夜が入りました。高島教会の信者さんの通夜と葬儀は高島教会出身の神父さまが引き受けて下さり、わたしとしては本当に助かりました。

土曜日にこうした務めを果たすことになるのと、説教の準備は困難を極めます。何を話そうか、少しは考えがあるとしても実際に原稿を準備するのはほとんどが土曜日です。その土曜日に何かが重なると、当然時間が少なくなるわけです。

どうしても書き始めることができずに1時間2時間と時計が進むものですから、気持ちを切り替えようと思ってお風呂のお湯をため、ゆっくり浸かってみました。すると不思議なことに、昔五右衛門風呂に入っていた30年くらい前のことを思い出しました。

わたしにとっての五右衛門風呂の経験は2通りあります。1つは、実家での体験で、これは親子で入ったり兄弟で入ったりといった楽しい思い出なのですが、わたしにはもう1つの思い出があって、母方の祖父母の家に泊まった時の五右衛門風呂の経験です。ここでは、一定の時間入るための工夫として、祈りをさせられたのでした。わたしが当時唱えた祈りは、「天使祝詞」つまり「めでたしの祈り」です。

実際に「めでたしの祈り」を何遍唱えながら風呂に入らされたのかは思い出せないのですが、外では祖母が薪をくべながら、「聞こえるようにお祈りしなさい」と言っていたような気がします。幼い頃の記憶なので詳しいことは思い出せませんが、風呂に入りながらの祈りは相当堪えました。昨日はその当時の様子を懐かしく思い出しながら、「主の祈り」「聖母マリアへの祈り」などを唱えつつ風呂に浸かっておりました。

何でもない日常の出来事なのですが、昔の人はどんなことにも生活と信仰を結び付ける工夫があったなあと感じます。特に母方の祖母は、わたしのいちばんの祈りの教師でした。

山を1つ越えて祖父母の家に行ったり、また実家に帰っていく時に、1歩1歩踏みしめながら「めでたし、せいちょう」と唱えて歩けば歩きながら祈りができると何度も聞かされました。

暗い夜道を、祈りながら歩くと、暗闇の怖さもなくなると信じて、真剣に祈って歩いたことがあります。また「めでたし」を3回とか5回とか唱え終わるまで五右衛門風呂に浸かっていたいなさいと言われてれば、どんなに熱くてもがまんして「めでたし」を唱えていたものでした。

大学3年生になるまで祖母は生きていましたが、小学校しか行っていない祖母に、生活の中に祈りを練り込んで生きる知恵をさまざまもらったことを感謝しています。今でも祖母はわたしの心に、忙しい生活の中でどうやって貴重な時間を祈りに当てるか、話し掛けてくれている気がします。

さて朗読された福音書は、イエスがとても忙しく活動し、その中でも祈りを忘れない姿が描かれていました。昼間、イエスの一行はシモンとアンデレの家に行き、シモンのしゅうとめの熱を取り除いてあげました。その後

も、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、多くの悪霊を追い出しています。それも、夕方、日が沈む頃までです。イエスの時代に伝記はなかったわけですから、そう考えるとイエスの活動は働ける時間のすべてを働き通した、フルタイム勤務の連続だったわけです。

それでも、どんなに時間を取られても、イエスは祈りの時間を犠牲にしなかったことが分かります。「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」（1・35）

日が沈む時間まで、人々は病気にかかっている大勢の人を連れてきたのですから、あまりの忙しさに祈りの時間は見つけれないほどでした。弱いわたしたち人間は、そこまで忙しくなるとつい祈りの時間を犠牲にしてしまいがちです。ところがイエスは、祈りの時間を別に取り分けて、朝早くまだ暗いうちに、人里離れた所へ出て行き、そこで御父に祈っていたのです。

これは何を意味しているのでしょうか。いろいろ考えられると思いますが、まずは1人きりになって祈る時間の大切さを教えていると思います。だれにも気兼ねせず、1人になって、御父に今の自分のすべてを打ち明ける。そういった祈りを、イエスは朝早くまだ暗いうちに、捧げていたのではないのでしょうか。

またイエスの祈りは、人里離れた場所で行われていたのですから、隠れたわざと言ってもよいでしょう。それはイエスが繰り返し言われた「隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」（マタイ 6・4）ということの実践です。

隠れたわざを考えるのにわたしがもっとも適していると思うのは、「氷山」の様子です。皆さんよくご存じのことですが、「氷山」はその塊のほとんどが海中にあって見えません。表に見えているのはたったの10分の1だけです。ゆっくり動く氷山を見て、だれも目に見える部分だけ考える人はいないわけです。残り10分の9が海中にあって、ゆっくり動いている。だから、氷山の動きはゆっくりであっても力強さを感じさせます。

このように、祈りはある意味で人間生活の「隠れたわざ」なのだと思います。人前で見せる祈りの時間を、多く的人是はそれほど持っていないはずです。朝起きてから寝るまで、ほとんど仕事や人付き合いに忙殺され、振り回されている。そんな中で、人里離れた場所で祈るイエスの姿は、わたしたちに隠れた場所で祈ることを強く勧めているのではないのでしょうか。

わたしは昨日、お風呂に入って祖母のことを懐かしく思い出しながら、わたしにとって隠れた場所、隠れた時間というのはこういう時間なのかなと思ったのです。

皆さんにとっても、家族の生活、団体生活、近所づきあいをしている中で、それでもなお、「隠れた時間」「隠れた場所」がどこにあるのかを考えておくとういいます。どうしても祈れない時、わたしにとっての隠れた場所、隠れた時間があるなら、そこに行くことで少しは祈ることができるかも知れません。

隠れた場所、隠れた時間は、何も消極的な意味ではありません。人々には隠れていますが、神の前にはいちばん開かれた場所なのです。だ

れも入り込まない場所と時間だからこそ、神とだけ親しく話すまたとない機会となります。そんな場を確保しておくこと、確保する努力を惜しまないことが、今週わたしたちに問いかけられているのだと思います。

祈りが終わる頃、シモンとその仲間がイエスの後を追い、見つけると「みんなが捜しています」と声をかけました。また1日フルタイムの激務が始まります。それでも、イエスは1人きりで祈ったことが雄大に移動する氷山の「隠れた部分」となって、激務を支えます。わたしたちも、わたしを支えているのはわたしの力ではなくて、日常のちょっとした祈り、隠れた祈りが見えない神の支えとなっていることを忘れないようにしたいものです。

年間第6主日(マルコ 1:40-45)

年間第 6 主日 (マルコ 1:40-45)

イエスに刻まれた深い憐れみを生きる

土曜日の「聖パウロの手紙を学ぶ会」は、順調に人数が集まっています。昨日の 2 月 14 日は、馬込教会も、大明寺教会も、30 人くらい来ていました。みんなチョコレートを持っているかなと思ったら、チョコレートを持っていたのは 1 人だけでした。

わたしはその日、まず馬込教会の部に参加して、後半は車で移動して大明寺教会に参加しました。途中で、古い司祭館の写真と比較した新しい司祭館の写真が撮影したくなって、「聖パウロの手紙を学ぶ会」の途中で司祭館裏の壁に脚立を掛けて司祭館のテレビのアンテナのある場所によじ登ろうとしたのです。

すると、わたしの体重を支えきれなかったのでしょう。脚立が地面と接している根本から滑りまして、大きな音を立てて倒れました。わたしは脚立に乗ったまま 2 メートルちょっとのところから滑り落ちまして、軽い打撲の被害を受けました。根本から滑るとは予想してなかったものですから、滑り落ちる間何もできず、死ぬ思いをしました。

昨日の恐ろしい体験をして思ったのですが、人間何が恐ろしいかと言ったら、心の中に刻まれた恐怖がいちばん恐ろしいのではないかなあ、ということです。怖い映画を観ても、その瞬間は怖いと思いますが、明日になれば忘れてしまいます。

たいていの恐怖は表面的なものです。幼い頃水が怖くなったり高い場所が怖くなったりした経験は一生消えないものです。内面、つまり心の中に刻まれた恐怖は、いつまでたってもぬぐい去ることはできないのではないのでしょうか。

九州のとある県は、転んでもただでは起きないのだそうですが、わたしもせっかくあんな怖い思いをしたので、何か説教に生かせないかなあと思いました。そして、もしかしたらつながるかもなあと思う部分を見つけました。

今週の福音朗読でイエスは重い皮膚病を患っている人をいやしてください。この病を得ている人はイエスに、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」(1・40)と願い出ました。イエスへの信仰を持って、自分を救ってくれるように願ったのだと言えます。

それに対してイエスは、その病人を深く憐れみ、病をいやしてくださいました。わたしはこの時、イエスは重い皮膚病の人に、2つの面でその人の内面に深く入り込み、イエスの存在を刻み込んだのではないかと思ったのです。1つは、病をすっかり取り除くということ、もう1つは、深い憐れみを掛けてくださるということです。

2つのイエスの姿が、重い皮膚病の人の心に刻まれたのですが、いやされた後、この人は意外な反応を取りました。イエスは確かに、「だれにも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。」

(1・44)と念を押したはずなのですが、「彼はそこを立ち去ると、大

いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。」（1・45）となっています。

口外しないように、人に言いふらさないように念を押したはずですが、このいやされた人には伝わりませんでした。ということは、イエスがこの人の心に深く刻み込んだはずの2つの側面のうち、どちらかは心の奥底まで届いてなかったのかも知れません。

2つ示しましたが、自分をいやしてくれたのはイエスなのだ、イエスだけが、自分をいやしてくださるのだということは確かに届いたのだと思います。ただ、もう一方のイエスが示した深い憐れみ、この部分はもしかしたらこの人の心の奥底まで届いてなかったのかも知れません。

こんなに深い憐れみを示してくださったのに、だれにも話さないように口止めされた。きっとイエスは何かをお考えに違いない。そのことを理解できるように、イエスの命令を守って、だれにも、何も話さないようにしよう。わたしの心の中で、イエスの深い憐れみを思い巡らそう。こんな気持ちを保ってほしいとイエスは願っていたはずですが、残念ながらその思いはいやされた人の内面に深く刻まれることなく終わったのだと思います。

イエスの奇跡が、表面的にしか伝わってなかったかということ、そこまでは言えないだろうと思います。重い皮膚病の人は、「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」（1・40）と確かに申し述べたのですから。それでも、イエスの深い憐れみと一緒に、刻まれることはなかったようです。

どうしてこんな結果になったのか。わたし自身の昨日の体験から振り返ってみると、もし2メートルちょっとのところからずり落ちたことを、「あーあ、落ちちゃった」と受け止めていたら、恐怖はわたしの中に刻まれなかったと思うのです。つまり、出来事が確かに起こったとしても、それをどう受け止めるか、本人の心の持ち方次第ではがらっと変わってくるのではないのでしょうか。

そうすると、いやされた人の心の中は動だったのか、もう一度考え直してみる必要があります。そう思って登場人物の気持ちになってみると、この人は奇跡を期待する堅い信仰は持っていたと思いますが、奇跡はイエスの深い憐れみの一つの現れなのだと、そこまでの理解にたどり着く信仰は持ち合わせてなかったのかも知れません。

仮に、奇跡の体験を絶対に口外しなかったとしましょう。口外せずに思い巡らしていたなら、イエスがいちばん伝えたかったのは、神の深い憐れみだったのだと気づいたかも知れません。奇跡はその1つだ。神の深い憐れみが、わたしにも、あなたにも、この世界のすべての人に今注がれているのだ。やっと分かった！と、そこでようやく飛び上がって喜ぶことになったに違いありません。

イエスの同じ呼びかけが、わたしたちにも向けられていると思います。今日の奇跡物語を通して、わたしたちにもイエスは何かを心に深く刻みつけようとしているのではないのでしょうか。それは、奇跡の面でしょうか。わたしたちがこれまで考えてきたことからすると、むしろ神の深いあわれみをこそ、イエスは私たちの内面に刻みつけようとしているのではないでし

ようか。

イエスは、どんな人にも、深い憐れみを示してくださる。示す方法は奇跡の形であったり力を奮い起こす励ましの言葉だったりいろいろですが、絶望しかけている時に、希望の持てない場面に、イエスは深い憐れみを示すことのできるお方なのだと、今日の出来事を通して教えようとしておられるのです。

もしも、わたしたちの心にイエスの深い憐れみが刻みつけられたなら、わたしたちはある意味でだれにも、何も話す必要はありません。ただイエスの深い憐れみに自分自身が洗い清められたことを、人々に証明すべきだと思います。

何かの方法で、イエスに深く刻まれた憐れみの心を、感謝すべきです。感謝の仕方は、あなたに任せられています。たとえばそれは、だれかを深く憐れむということかもしれませぬ。イエスに刻まれたものをわたしはどのように感謝して生きていくか。この点が今週わたしたちに課せられた軛だと思います。

年間第7主日(マルコ 2:1-12)

年間第 7 主日 (マルコ 2:1-12)

イエスとはっきり出会う場面に気づいていますか

わたしたちが自分の信仰に期待していることは何でしょうか。おそらく、「あー、カトリック信者でよかったなあ」という瞬間をいちばん期待しているのだと思います。そして「カトリック信者でよかったなあ」という体験は、おのずと「イエスと出会えてよかった」という喜びに目を開かせてくれます。では、「カトリック信者でよかったなあ」という瞬間はどんな時にやって来るのでしょうか。

すぐ分かるたとえば、よその教会のミサに参加したり、聖地巡礼に行つて、あーこの信仰でよかったなあと思います。あなたは日曜日に、旅行に出かけました。心がけがあるなら、「近くの教会はどこかなあ。日曜日のミサは何時かなあ」と考えることでしょう。

そして実際に教会に行くと、いつも自分が故郷の教会でミサに参加している時のように同じミサにあずかり、ちゃんと日曜日の務めを果たすことができます。そんな時、「あーカトリック信者でよかったなあ」と感じるかも知れません。

皆さんがもしも聖地巡礼に行くなら、もっとカトリック信者でよかったなあと感じることでしょう。聖ペトロ大聖堂とか、聖墳墓教会とか、ルルドなど、世界各地の有名な大聖堂で、日本にいる時と同じようにミサにあずかって聖体拝領をすることができるわけです。サンキューすら言えなくても、ローマで、エルサレムで、ちゃんとミサにあずかれるというのは、カトリック信者であることの恩典だと思います。

福音朗読に入りましょう。イエスは中風で苦しんでいる人に、「子よ、あなたの罪は赦される」(2・5)と声を掛けました。もちろん別の言い方で声を掛けることもできました。例えば、「子よ、あなたの病気は今取り除かれる」そんな声掛けです。ところがイエスが最初に掛けた声は、「子よ、あなたの罪は赦される」というものでした。

ちょっとしたことのようにですが、違いがあると思います。当時は、「わたしが病気を治してあげましょう」と声を掛ける医者はいくらいたのだと思います。例を挙げると、マルコ 5 章で登場する 12 年間出血が止まらずにいた女性は、「多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであつた」

(5・26)とされています。お金目当てで、病気を治せない医者はいくらいたわけです。

イエスが最初に、「子よ、あなたの病気は今取り除かれる」と声を掛けていたら、中風を患っている人はどう思ったのでしょうか。またこの人も、金目当ての医者なのだろうか。そんな疑いを持ったかも知れません。病気を治すことだけであれば、イエスと中風の人とは単なる医者と患者の関わりしか生じないからです。

イエスはまず、「子よ、あなたの罪は赦される」と声を掛けました。律法学者たちがみごとに言い当てています。「神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦することができるだろうか。」(2・7)ここでイエスは中

風の人と、まず神と人との関わりを築き上げたいと願っていたのです。人々の前に引っ張り出され、恥ずかしい思いをして横たえられている病人に、イエスはご自分が罪に痛めつけられ、苦しんでいる人を癒す神なのだという事を、何よりもまず示そうとされたのです。あなたは今、神の子・救い主と出会っているのですよということを、中風の人に伝えたかったのです。

大勢の人が集まる前で、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦される」と声を掛けることにはもう一つの狙いがあるかも知れません。それは、そこにいる人すべてに、「あなたも今、神の子・救い主と出会っているのです」ということを伝える狙いです。

「イエスと出会えてよかった」その喜びは、神おひとりにしかにしかできないわざに触れることから生まれるものです。病気を治してもらうことは、きっかけにはなるかも知れません。けれども本質的には、イエスにしかできないわざ、罪の赦しや死と復活の出来事を通して、「イエスに出会えてよかった」と感じるようになるのです。

説教の始めに戻りましょう。日曜日のミサにあずかる時、「わたしたちはカトリック信者でよかった」と感じます。その時、「わたしは今、イエスに出会っている」または「イエスに出会えてよかった」という気持ちになっているのでしょうか。それとも、ミサにあずかりながら、「カトリック信者でよかった」とは思っても、「いったいいつ、ミサのどの場面でイエスに出会っているのだろう」と考えているのでしょうか。

「ミサにあずかって、『カトリック信者でよかった』とは思いますが、イエスに会っている実感は少しもない。それどころか、これまで何十年とミサにあずかってきたけれども、イエスに出会ったことはない」とここまできっぱり言い切る人がいるかも知れません。そう感じている人がいるなら、もしかしたらその人は、自分で言う通り、一度もイエスに出会ったことがないのかも知れません。

念のため、わたしが考えるイエスとの出会いのチャンスを示しておきたいと思います。「あなたの罪は赦された」という言葉を実感できるなら、その時わたしたちはイエスと出会っているはずで、罪の赦しは、神おひとりにしかできないことだからです。

ところで、ミサの中で司祭は、「全能の神がわたしたちをあわれみ、罪を赦し、永遠の命に導いてくださいますように」と言っています。そしてその通りに罪が赦されるとわたしたちは信じ、「アーメン」と答えているはずです。そうであれば、わたしたちはその瞬間に、イエスと出会っているのです。

また、ミサの中で「主よ、あわれみたまえ」「キリスト、あわれみたまえ」と繰り返しますが、この場面でもイエスはわたしたちにあわれみを示すためにそこにおられるはずです。ほかにも、「神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、われらをあわれみたまえ」と唱えます。これは単なる気休めでしょうか。たしかにあわれみをかけると信じて唱えているはずです。ここにも、イエスとのたしかに会いを感じるチャンスがあります。神の子、イエス・キリストにしかできないことに立ち会っているからです。そして何よりも、パンとぶどう酒のうちにイエスがとどまって、わたしたちの食べ物となってくださる聖体祭儀の場面には、これ以上ない形でイエ

スが現存してくださっています。死んで、復活し、わたしたちを救ってくださるのは、神の子、イエス・キリストしかなし得ないわざだからです。これらを重ね合わせると、十分わたしたちは、「イエスと出会っているんだ」「イエスと出会えて幸せだ」この喜びに導かれることができるはずです。ミサにあずかる中で「カトリック信者でよかった」と思っている。それはもっと深く掘り下げると、「イエスに出会えてよかった」と実感できるまたとないチャンスなのです。

わたしたちは、ミサという大きな恵みの場をカトリック信者として与えられています。カトリック信者でよかったと、素直に思える場だと思います。ぜひそこから、「自分はここでイエスと出会えているんだ」この実感にも導かれてほしいものだと思います。「カトリック信者でよかった」その喜びは、「イエスと出会えてよかった」という体験につながってこそ本物になるのです。

四旬節第1主日(マルコ 1:12-15)

四旬節第1主日 (マルコ 1:12-15)

荒れ野での四十日間が象徴するもの

先週私は、「カトリック信者でよかった」という例を挙げてみたのですが、誤解しないで欲しいことがあります。それは、「プロテスタントではなく、カトリックでよかった」と、カトリックとプロテスタントの違いを強調しようという狙いではない、ということです。

わたしがカトリック教会の司祭で、カトリック教会のことしか知らないのので、「カトリック信者でよかった」という例を挙げたまでのことです。本質的には、「キリスト者でよかった」そういう体験がわたしたちにとって必要なことだと思っています。

ついでの話ですが、誰からどう教わったのか、自分の宗教を「カトリック教」と言う人がいるようです。以前いた小教区でも似たような場面に遭遇したのですが、「あなたの宗教は何ですか」と聞かれたら、「キリスト教です」と答えてください。

なぜ「カトリック教」という言い方がおかしいのか、仏教と比較して考えてみましょう。伊王島には大きく2つの宗教、仏教とキリスト教があると思います。伊王島のお寺は禅宗のお寺です。禅宗は「仏教」の一派です。

「禅宗教」とは言いません。

同じように、伊王島の教会はカトリック教会です。カトリックは「キリスト教」です。これも「カトリック教」ではないのです。禅宗や、真宗を「禅宗教」「真宗教」と呼ばないのと同じです。そこはきちんと理解してほしいと思っています。もし病院に入院することになって、「宗教欄」を書く際は、「キリスト教（カトリック）」と書くべきだと思います。いきなり「カトリック教」と書かないようにしてください。わたしたちは「キリスト教」のカトリック信者なのですから。

さて、先週話したように、「カトリック信者でよかった」その喜びは、「イエスと出会えてよかった」という体験につながってこそ本物です。今週の四旬節第1主日に選ばれている福音朗読の箇所にも、「わたしは今日イエスに出会っている」その喜びを体験できる箇所を見つけました。今週の福音の箇所はマルコ1章12節から15節と本当に短い箇所ですが、今年読み返しながら、新たな発見があり、「イエスと出会っているなあ」と実感できたのです。

それは、1章13節「イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。」という箇所です。淡々と出来事を紹介しているので、うっかりすると読み飛ばしてしまいそうな箇所ですが、ここで言う「四十日間」という表現がわたしの目に留まりました。

聖書の中では旧約・新約を通して象徴的な意味を持つ数字があります。イエスが誘惑を受けたとされる「四十日間」という期間は、イスラエルの民がエジプトを脱出した後、約束の地にたどり着くために荒れ野をさまよった期間の象徴です。ちなみに十二という数字は、イスラエルの十二部族のことで、イエスが十二人の弟子を選んだのはイスラエルの十二部族を象徴的に表している数字です。

この荒れ野での四十年を象徴する「四十日間」ですが、荒れ野で四十年さまよったイスラエルの民は、無事に約束の地にたどり着いています。ということは、イスラエルの民のあの四十年は、人生の中のある四十年という意味ではなくて、人生の全体として捉えた方が適切だと思います。

この捉え方を、今日のイエスの荒れ野での誘惑に当てはめてみたいのです。イエスが四十日間荒れ野にとどまり、サタンから誘惑を受けた。それは実は、イエスの三十三年間という地上での人生を、象徴的に表しているのではないのでしょうか。わたしは今年の説教の準備の中でそのように考えてみたのです。

もし、荒れ野でのイエスの四十日間が、イエスの地上での三十三年間を表しているとしたら。もしそうだとしたら、四十日の間にサタンから誘惑を受けたことと、野獣と一緒におられたこと、天使たちが仕えていたということはイエスの三十三年間の中の出来事と重ね合わせて考える必要があります。福音書の中に、ちょうど重なるような出来事があるのでしょうか。わたしは、イエスがゲッセマネで祈っている場面、マルコ福音書で言えば 14 章が、荒れ野での四十日間の誘惑をうまく表現していると思いました。

最後の時を迎えようとしていたイエスは、ゲッセマネで地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」と言っています（14・35-36）

この緊張感あふれる祈りの場面で、やはりイエスにはサタンの誘惑があって、「杯をわたしから取りのけてほしい」と思ったわけです。けれども一方では、天使たちが仕えていて、「わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」と誘惑をはねのけました。こうした戦いは、イエスの全生涯を通して見られたのではないのでしょうか。

このように思い巡らしていくと、イエスが荒れ野で経験された四十日間は、イエスの地上での三十三年間の縮図だったのだろーと思えてきたのです。わたしにとってこの発見は、「荒れ野にいるイエスに出会えた」と感じた瞬間でした。もしここまでの理解にたどり着いていなければ、今年もわたしは荒れ野にいるイエスとただすれ違うだけだったかも知れないと思っています。

イエスの荒れ野での四十日間は、今の私の信仰の中で「イエスに出会えてよかった」という瞬間だと思いますし、「キリスト者でよかった」と思えるひとときでもあります。

ここであえてカトリックということにこだわるなら、カトリック信者として、プロテスタントの信者の方にも通じる喜び・体験を分かち合えた時、本当の意味で聖書の中の何かがつかめたとと言えるのではないかと思います。

つまり、カトリック信者にしか通用しない理屈や解釈では、本当に聖書の中の出来事に肉薄したとは言えないのではないのでしょうか。イエ

スさまがカトリック教会とかプロテスタント教会とかを作ったわけではないのですから、イエスさまの時代の出来事に迫るためには、カトリックとプロテスタントの垣根を越えて、一緒に共感できる何かをつかむ努力が必要だと感じます。

今週わたしの中で「あっ！イエスさまに会えた」という瞬間は、「イエスの荒れ野での四十日間」という部分でした。皆さんお一人お一人にとっても、「イエスと出会った」という瞬間が日々与えられたら素晴らしいと思います。また、そのような体験を求めて、自分の中でイエスと本当に出会える場面はいつだろうか、どんな時だろうかと思いつきながら準備をしておくことも必要かも知れません。

四旬節第2主日(マルコ 9:2-10)

四旬節第2主日 (マルコ 9:2-10)

毎日の苦しみを背負う時、わたしたちは光り輝く

四旬節の第2週は、イエスの姿が変わる場面です。「変容」と言ったりします。今年は、黙想会をわたしがしようと計画していますが、イエスの変容の場面を、黙想会で学ぼうとしている聖パウロの回心と重ねて考えてみたいと思います。

イエスの姿が弟子たちの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」(9・2-3)とあります。

この出来事は何かを言い表そうとしているのでしょうか。まずはこのイエスの姿が変わったことを考えることから始めましょう。

考えるヒントとして、次の表現に注目しました。「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」イエスの姿は、この世のものでは表現できないということです。それは言い換えれば、天の世界に属する姿になったということでしょう。イエスの、地上とのつながりとは全く違う面を、弟子たちはかいま見たのでした。

ここでペトロが次のような提案をします。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」(9・5) 今日の前に広がっている光景は、天の世界とつながっている光景です。それをペトロは、地上につなぎ止めようとしてあくせくもがいたのでした。

もちろんペトロの試みは失敗に終わり、光り輝く姿も見ることができなくなって、イエスと弟子たちだけが残ります。天の世界につながる一瞬を見た弟子たち。そしてこの出来事を地上につなぎ止めようと試みて失敗しています。実はこの時こそ、発想を変えて、どうやったら自分たちも天の世界につながることをできるだろうかと思いを巡らすチャンスでした。

イエスが天上の世界とつながっているのだと感じた輝かしい姿に、エリヤとモーセが現れています。この2人も、何かを象徴しているはずです。エリヤは、「苦しむ僕」として描かれる預言者です。また、モーセは、自分には重すぎると感じたイスラエルの民をエジプトから約束の地に連れて行く人物です。一方は、苦しむ僕を表し、もう一方は、使命に忠実な僕の姿が込められているのでしょう。

イエスは、この2人の人物を通して、ご自身が苦しむ僕であり、父である神の使命に忠実であるという両方の面を示してもらっています。そうであるなら、弟子たちが天上の世界につながる道は、苦しみを通っていくこと、与えられた使命に忠実であること、突き詰めれば、イエスに倣うことが必要なのでした。

それを証明するかのように、雲の中から声が聞こえます。これはわたしの愛する子。これに聞け。」(9・7) イエスに聞き従うこと。イエスに倣い、苦しみを通って使命に忠実であるなら、弟子たちは天上の世界につながることをできるのです。

弟子たちに求められていることは時代と場所を変えても当てはまります。つまりわたしたちも、地上にしながら、天上の世界につながる事ができるのです。それは、イエスの生涯に倣うことによってです。イエスが歩まれる、苦しみを担うことと使命への忠実をわたしたちが生活の中で担っていくなら、弱さの中にあるわたしたちも、天の国に結ばれるのです。

ここではほんの少しですが、パウロの例を紹介しておきましょう。黙想会の内容とも重なってくるので本当に少しだけにとどめますが、例えばパウロの決してくじけない態度は、イエスの生きざまを写し取っています。パウロは回心を経て、すぐに人々の前に出て「イエスはキリストである」と伝えました。人々はまだ、回心したというかつての迫害者を恐れて話に耳を傾けません。それだけでなく、自分たちの町から出て行ってほしいとさえ思っています。

宣教しようとして人々の前に立つその度にパウロは拒否され、ある時は石を投げつけられ、町から町へと移動しなければなりません。毎回逃げるようにして新しい場所に移ります。それは、普通の人だったら絶望してしまうような状況です。

けれどもパウロは、その度に気持ちを切り替え、初めて宣教に行くかのような新しい気持ちで人々の前に立ったのです。どれだけ嫌われても、だれも理解者を得られなくても、それでもイエスを告げ知らせる場を探し求めていったパウロは、わたしたちの生きた模範だと思います。

わたしたちにも、あきらめたくなるような現実立たされることがあります。どんなに親切にしても、お世話している人が心を開いてくれない。自分の言い方が悪いのかも知れないと思って黙っていると、無視していると勘違いされる。

いろんな時に、苦しみを経験し、自分の務めに忠実を尽くせないのではないかと絶望的になります。実はそうした場面こそ、わたしたちが天の国につながるチャンス、イエスの生きざまに自分を重ねて生きるまたとない機会なのです。

「これはわたしの愛する子。これに聞け。」わたしたちはこのような声を聞かないかも知れません。けれども、実生活であきらめずに何度でも出直して苦しみを担おうとするなら、何度くじけてもまた起き上がって使命に忠実に生きようと決意するなら、その時すでにあなたは「愛する子」として生きているのではないのでしょうか。

苦しみを担い、使命に忠実に留まる姿は、見た目には輝きなどないかも知れません。ですが御父はそんなわたしたちに声をかけているはずで、「これはわたしの愛する子。これに聞け。」そしてイエスは、日々十字架を背負って生きる姿に、「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬ輝き」を見てくださっていると思います。

四旬節第3主日 (ヨハネ 2:13-25)

まことの神殿であるイエスにすべてを秩序づけよう

いよいよ黙想会の週となりました。今年は聖パウロについて少しでも学びがあるようにと思って準備しています。今週のミサの説教も、先週のように聖パウロの歩みと、与えられた福音朗読が示すものを結び付けながら話を進めたいと思います。

イエスは神殿で羊や鳩といったささげものの動物を売り買いしている商人や両替商の人々を前に、圧倒的な存在を見せつけます。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」(2・16) その迫力は、多くの人を黙らせるに十分でした。

イエスがこの場面で考えさせようとしたことは何だったのでしょうか。神殿を神聖なものとするために、いけにえの動物を売り買いするというこの世の習慣を完全に締め出すことだったのでしょうか。そういう面もあったでしょうが、それだけでもなさそうです。

イエスが「このような物はここから運び出せ。」と言われた時の様子を想像してみました。動物の鳴き声、動物を売りさばこうと必死に声をかける人の声、そんな中でイエスが声を上げたのですから、おそらく大声を上げたに違いありません。イエスは、どのような時に大声を上げるのでしょうか。

福音書を眺めると、大声を上げる場面がいくつか見られます。使い方が2つあると思います。1つは、十字架の上で父である神を呼び求める時です。ルカ福音書に次のような場面が残されています。「イエスは大声で叫ばれた。『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。』」こう言って息を引き取られた。」(ルカ 23・46) これはおそらく、ご自分のためというより、その場に居合わせた人々のために、大声で父なる神を呼び求めている姿です。

もう1つは、「聞く耳のある者は聞きなさい。」(ルカ 8・8) と呼びかける時です。ヨハネ福音書で群衆に「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」(ヨハネ 7・37) という場面と、ラザロに「ラザロ、出て来なさい」(同 11・43) と大声で叫ばれたのも、同じような使い方です。呼びかけている人に信仰を求めています。

一方、わたしたちが大声を上げるのはどんなときでしょうか。皆、同じことを考えると思います。それは、怒りをあらわにする時です。その人の抑えられない感情が爆発して、大きな声を出すことがあります。福音書の中での使い方を見る限り、怒りを表すためにイエスが大声を出すという場面は見られません。ということは、今日神殿で商売をしている人に向かって大声を上げたのは、怒りをあらわにするためではなさそうです。

「このような物はここから運び出せ。」イエスが大声を上げてまで示そうとしたのは何だったのでしょうか。この点が今週の福音を学ぶための鍵になるのではないのでしょうか。

わたしは、この場面でもイエスがご自分への信仰心を呼び覚ますために大声を上げたのではないかなと思っています。いけにえの動物を神殿から追い出すことで、いけにえに頼らない神殿がここに今存在していることを知らせようとしたのではないのでしょうか。

イエスは、いけにえに頼らない神殿、いけにえに頼らない礼拝を目の前に示そうとしたわけですが、それは建物としての神殿の改革を意味しているのでしょうか。これからこの神殿は、イエスご自身がいけにえとなるのだから、動物のいけにえは必要ない。そのようなことを言おうとしたのでしょうか。

もう少し踏み込んで考える必要があると思います。ユダヤ人とイエスとのやり取りがそのことを暗示しています。「ユダヤ人たちはイエスに、『あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか』と言った。イエスは答えて言われた。『この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。』それでユダヤ人たちは、『この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか』と言った。イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。」(2・18-21)

ユダヤ人との問答の中で、神殿は最後にはイエスご自身の体として示されています。神殿の中にいるイエスを見るのではなく、イエスそのものを神殿として見るように人々を促していったのです。イエスの中に神殿を見るように、そのための信仰を、イエスは大声を出すことで求めておられたのです。

パウロも、信仰の理解の中で似たような体験をしています。パウロは、イエスに出会い、使徒として大きな足跡を残しました。パウロの働きは、キリストのみ国のための働きですが、彼の考えはキリストのみ国をキリストご自身と同一ととらえるところまで深まっていきました。パウロにとって本質的なことはキリストである。この悟りに彼は到達したのです。それは、神殿(今のわたしたちの聖堂)にイエスがおられるというわたしたちの通常考えから、イエスこそが神殿(聖堂)であるという考えにわたしたちを導くのです。

「このような物はここから運び出せ。」イエスのこの言葉は、すべてをイエスに秩序づけるようにとの呼びかけです。わたしたちに純粋な信仰を呼び起こす大声です。道具がなければ礼拝ができないとか、聖堂という建物に入らなければ礼拝ができないというのではなく、イエスそのものが神殿だから、わたしたちはイエスに結ばれている限りどこでも礼拝をすることができるのです。

今日の学びを生活に結び付けましょう。すべてを、イエスに秩序づけることが、1人1人に求められています。食べることを、イエスに秩序づけるためにどうしたらよいのでしょうか。イエスはパンを取り、賛美をささげ、それをさいて人々に与えました。わたしたちもパンを手にとったなら、賛美をささげ、自分のためと、人々のためにさくべきです。

一日の終わりに床に就きます。この休みを取ることを、どのようにイエスに秩序づけるのでしょうか。イエスは朝、1人静かな場所に行って祈りました。体の疲れを取ることができて、また新しい1日が与え

られた。そこでイエスのように父なる神に祈りましょう。
すべてが、イエスに秩序づけられ、最高の意味を持つ働きになります。
お金とか、名誉とか、結び付けるのに魅力的なものはたくさんあるかも知れませんが、それらも一時的には価値を与えてくれるかも知れません。けれども、さらにそれにまさってすばらしいのは、イエスに秩序づけられた活動です。いっさいを外に運び出し、それから1つ1つのものをイエスに秩序づけ、最高に価値ある人生を送ることにしましょう。

四旬節第4主日(ヨハネ 3:14-21)

四旬節第4主日 (ヨハネ 3:14-21)

イエスは世のすべての人を救うために来られた

今週の福音朗読箇所から説教を考えていて、ついこの前終了した黙想会の学びを、うまく福音のメッセージと結び付けて話したいなあと思いました。そういうつもりで読み返していたら、次の箇所を取り上げるのがいいなあと感じました。

17 節です。「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」(3・17) 世が救われるために、神は御子を遣わされた。世が救われるために、御子はそのすべてをささげました。イエスの地上での 33 年間の生活は、わたしたちだれもが人に語って聞かせることができます。

宿屋もないまま、幼子としておいでになり、ヘロデ王に命を狙われたりもしました。時が満ちて、ガリラヤで 12 人の弟子を選び、奇跡と権威ある教えで神の国を告げ知らせます。反対者の妬みによって不正な裁判にかけられ、十字架上で命をささげ、復活なさいました。出来事の 1 つ 1 つ、すべてが世が救われるためのものでした。

1 つ 1 つを細かに見ていくことも必要ですが、一方でこのすべてのわざは人間をどこに向けようとしたものかも考えておくべきでしょう。それは、パウロの回心の話と結び付けるとこうなります。イエスは、人間が自分を中心にして生活する態度から、神を中心に据えて生活する態度にすっかり生まれ変わるように導いたということです。

パウロが、この導きによって救われたのでした。彼は自分の努力で積み上げてきたことを自慢しようと思えばいくらでも自慢できる人でした。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」

「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。」(フィリピ 3・5-8) パウロが言うように、自分の努力とか、由緒正しい系図とか、誇らしく並べ立てていたものを中心に据えて生きていたけれども、キリストと出会い、キリストを中心に据えて生きるように変えられた時、これまで命の次に大切と思っていたものさえも損失と思えるようになったのです。

パウロを導いたように、イエスはすべての人を神であるイエス・キリストを中心に据えて生きる人に導こうとしました。当時の宗教指導者たち、障害を抱えた人たち、弱い立場に置かれていた人たち、男性と比べて社会的立場の弱かった女性、異邦人、ありとあらゆる人を、自分を中心に据えて生きる人ではなく、イエス・キリストを中心に据え

て生きる人に導こうとしました。それが、イエスが地上の生活で成し遂げようとした導きだったのです。

ですから、はっきりしていることは、自分を中心に据えて生きる限り、人はだれも救いにたどり着けません。パウロの生き方がそのことを教えてくれます。パウロは、律法にだれよりも熱心に生きていました。だれよりも熱心に生きていたのです。

彼は、人間的に見ればだれよりも正しく生きようとしていた、正しい人だったのです。けれども、パウロの生き方をどれだけ追求しても、どの段階まで完成させたとしても、人はその努力によって救われないのです。

それはわたしたちも同じことです。どんなに厳密に天主の十戒を守り抜いても、起きている間のほとんどを熱心な祈りに費やしても、イエス・キリストがその人の中心にいなければ、あなたの努力が中心に据えられているならば、その生き方によって救われたりはしないのです。だからこそ、こう書かれているのです。「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」わたしたちが自分の努力を正義として神に申し上げて、それだけでは裁かれることになります。わたしたちが救われるためには、イエスが示した生き方にすっかり移っていかなければならないのです。

わたしたちはこの招きが本当に分かっているのでしょうか。パウロはイエス・キリストに出会う前、自分の力では生き方を転換することはできませんでした。パウロほどの理解力がある人が、です。イエス・キリストに本来の人間のあるべき姿を示された瞬間にすべてを理解するほどの理解力の持ち主が、自分の力だけではイエスの示す生き方に自分を置くことができなかったのです。

わたしがここで言いたいのは、パウロさえも、自分の努力では生き方の大転換ができなかったのですから、わたしたちはなおさら、イエス・キリストの導きに頼って、自分の生き方を自己中心的な生き方からイエス・キリスト中心の生き方にしてもらう必要があるということです。

イエスの引っ張る力、わたしを変えてくださる力に導かれなければ、わたしたちが変わることはできないということです。イエスの主導的な働きを認め、受け入れることで、初めてわたしたちの人生の大転換は可能になります。「世が救われるために」イエスは神中心の生き方に大転換するよう人類を導いたのです。

それも、イエスにしかできない方法で。ガリラヤ中を歩き巡り、エルサレムで逮捕され、十字架に付けられ、死んで、復活するという、イエスにしかできないユニークな方法で、わたしたちの生き方の大転換を先導してくれたのです。

あと2週間後には受難の主日（枝の主日）です。イエスが示そうとした人間の本来歩くべき正しい生き方を、イエスは十字架の上でお示しになります。黙想会を終えたわたしたちは、イエスが示した道を歩きましょう。それ以外の道、つまり、イエスを生き方の中心に置かない道は、救いから遠く離れていると心得ましょう。わたしたちは、わざわざ遠く離れている道を好んで選ぶ必要はないのですから。

四旬節第5主日(ヨハネ 12:20-33)

四旬節第5主日 (ヨハネ 12:20-33)

だが、死ねば、多くの実を結ぶ

先週、先々週は黙想会をずっとこなして大変でした。けれども繰り返し話す中でわたしにとっては大きな収穫もありました。初めのうちは、黙想会で話していることが自分にも見えてなかったのですが、それが回を重ねていくうちに見通せるようになったからです。おかげで、黙想会終わってしばらくは、聖パウロの回心を福音の学びに当てはめて考えることができそうです。大助かりです。

まず、パウロの回心からわたしたちが学んだことを確認しましょう。パウロは、これまでの自分中心の生き方から、イエスを中心に据えて生きる生き方に変えられたのでした。律法を一点一画も漏らさずに守り、非の打ち所のない生き方をしたとしても人間は自分の努力では救われないことをイエスに諭され、自分の力では変わっていけない弱さを持つわたしたちだから、イエスに導かれて変わっていきましょうというのがパウロの回心から学んだことでした。

今日の福音朗読も、この考えに沿って読み直すと、たくさんの箇所がなるほどと納得できるようになります。すぐに気がつく箇所は、「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(12・24)という箇所です。

それに続く箇所も同じ呼びかけを読み取ることができます。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」(12・25)「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。」(12・26)イエスの呼びかけを受けて生き方の大転換をしたパウロの姿が、今日の福音朗読のあちこちに見いだせると思うのです。「イエスさまの時代にパウロは表舞台にいなかったはずなのに、どうしてイエスさまの呼びかけにパウロの生き方が読み取れるのか。」そう考えている人もいるでしょう。ところが、福音書が書かれた年代と、ペトロやパウロが殉教した年代をもう一度思い出すと疑問は解けます。

パウロは皇帝ネロの時代、60年代後半に殉教したと伝えられています。福音書が書かれた時代はというと、いちばん早いと言われるマルコ福音書でも、パウロの殉教より後に書かれているのです。ましてや、ヨハネ福音書などは、90年代に書かれたと言われます。

すると、福音書の著者たちは当然パウロの殉教も知っていたし、パウロの活躍や、キリストを中心に据えた生きざまについても十分理解していたはずです。ですから、イエスの言葉を福音書に残すに当たって、パウロの生きざまがイエスの言葉からしのばれるような工夫をしたかも知れませんが、もちろんイエスさまの言葉を曲げて書き残したわけではありませんが、福音書の著者自身が、「あー、パウロの生き方は、イエスの歩まれた道をそっくりまねていたなあ」と感じながら、福音書を書いた可能性は大いにあると思うのです。

イエスを信じる人々はけしからんと思って男女構わず縛り上げ、懲らしめようと意気込んでいたパウロ。その彼がイエスに捕らえられ、イエスのた

めならどんな仕打ちを受けても構わないと思うほど徹底的にイエスの僕となりました。

まさに、イエスと出会う前のパウロは才能豊かな「一粒の麦」でした。彼はイエスに捕らえられ、律法を守ることで義の道を歩もうとしていたこれまでの自分に死んで、イエスを中心に据えて生きる人に生まれ変わったので、想像をはるかに超える大きな実を結びました。

別の言い方もできるでしょう。パウロはそれまで自分の命を愛していたのでした。「生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」（フィリピ 3・5-6）ところが彼が誇りに思っていたものを損失だと思えるようになった時、本当の意味でいのちを保ち、永遠の命に導かれたのです。

みごとに、パウロの中にイエスの招きの言葉が当てはまります。まるで、パウロはイエスが宣教活動をしている時に直接出会い、イエスの弟子になったかのようにです。イエスの言葉を聞いて、生き方を変えたかのようにです。実際には復活前のイエスにパウロは会っていませんが、復活したイエスと出会ってから、すべての失っていたものを取り戻したのかも知れません。ここでわたしたちを振り返ることにしましょう。わたしたちにも、イエスの呼びかけは同じように響いています。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」そしてわたしたちもまた、パウロと同じく生前のイエスに出会っていないのです。

生きて、イエスに出会っていないなら、イエスのこの呼びかけを守ることにはできないのでしょうか。そうではありません。わたしたちもパウロと同じように、復活したイエスからすべてを教え、導いてもらうことができます。

イエスは今の世界に聖霊を注いで、一人一人に、多くの実を結ぶ生き方、永遠の命に至る生き方を促しておられるのです。もちろんその生き方とは、パウロと同じくイエスを中心に据えて生きる生き方です。黙想会を無事に終えたわたしたちは、生き方を転換するまたとないチャンスが与えられています。

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」イエスがまず身をもって示してくださった生き方を、わたしたちも歩んでいくことができるように、聖パウロの取り次ぎ、聖母マリアの取り次ぎを願いたいと思います。

受難の主日 (マルコ 15:1-39)

主がお入り用なのです

今日、聖なる一週間が始まる日曜日を迎えました。ミサ全体を通して、イエスが子ろばに乗ってエルサレムに入り、十字架にはりつけにされてお亡くなりになる、その一連の流れが表現されました。

ミサの始めに、枝の行列を行いました。イエスはエルサレムに近づいた時、ろばの子に乗ってエルサレムに入ることをお望みになります。わたしはそのやり取りを通して、今日のミサの典礼全体のテーマみたいなものが何となくつかめました。

そのテーマは、イエスから送り出される二人の弟子にあとで言うようにと伝えた命令で明らかになりました。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」(11・2-3)

そしてこのやり取りは、イエスが予告なさった通りに実現します。「すると、そこに居合わせたある人々が、『その子ろばをほどいてどうするのか』と言った。二人が、イエスの言われたとおりに話すと、許してくれた。」(11・5-6) わたしはこのやり取りの中の、「主がお入り用なのです」という言葉がとても印象に残りました。

「主がお入り用なのです」。直接には、イエスがエルサレムに入るために、子ろばを必要としておられたということを意味しています。そのことに間違いはないのですが、弟子たちはのちに、違うことも自分たちが口にした言葉から連想したのではないかと思ったのです。

つまり、「主がお入り用なのです」と感じておられたのは、人類の救いのために、「必要」と考えておられるすべてのものを意識して、あのようにつながったのではないか、ということです。

たしかにその場で、子ろばが必要だったかも知れません。ですがエルサレムに貼ってしまうと、子ろばは元のつながれていた場所に戻されるでしょう。むしろ、エルサレムに入城されるイエスこそが、「主がお入り用なのです」と言ったまさにそのものだったのではないのでしょうか。

福音朗読にありましたように、イエスは、「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」(11・9-10) と歓迎されたはずなのに、その同じ人々から「十字架につけろ」とののしられ、十字架の上でいのちをおささげになりました。

なぜこんな目に遭わなければならなかったのだろうか。そう考えることには意味があります。イエスのエルサレムでの出来事、それこそが「主がお入り用なのです」と望んでおられたことだからです。

イエスが十字架の上でいのちをささげたことで、わたしたちはみな救いに入る扉が開かれました。イエスが、御父のお望みに従っていのちをささげなければ、わたしたちは自分の力で神の救いにあずかることはでき

なかったはずです。わたしたちは繰り返し、パウロの回心の黙想の中で考えました。

パウロが非の打ち所のない生活をしていた時に、イエスは彼に救いの手を差し伸べました。あなたが救われる道は、わたしを中心に据えて生きる以外にありません。イエスはそんな思いを込めてパウロを呼び出したのでした。わたしたちが今日の典礼の中で体験したイエスの十字架上での出来事も、この方法以外に人間が救われる道はなかったのだと考えさせているのです。

そこでわたしたちも、今日二人の弟子が子ろばを引いてくる時に言った言葉を思い出し、自分に当てはめてみましょう。「主がお入り用なのです」。それは、わたしにどんな協力を求めて投げかけられた言葉なのでしょう。

わたしがすぐに思い出したのは、馬込教会では役員改選のために投票用紙が配られているはずです。この用紙に、一定の人数分だけ印を付けて来週の日曜日に選挙することになっています。投票する時に、真剣に新しい役員に必要な人を選んでください。そうして選ばれた人々は、わたしは神さまがこれからの馬込教会のために必要としてくださっている人々なのだと思います。

選挙が終わると、一定の人数の人々が選出されます。「この選ばれた人々をどうするのか。」そんな疑問をわたしにぶつけてくる人がいるかも知れませんが、もしかしたら選ばれた人々自身が、「わたしをどうしようというのか」と、わたしに言うかも知れません。

わたしはその時、こう答えましょう。「主があなたがたをお入り用なのです。」これから、馬込教会の家族を支えてあげる人々として、何かの活動や、教会での礼拝や、福音宣教への協力に率先してお手伝いしてくださる人々として、主があなたがたを必要としているのだと思うのです。そう思って、選ばれた人々はこれからの任務に手を貸していただきたいと思います。

今日、エルサレムに入城する時に使った子ろばは、「主がお入り用なのです」と乞われて連れてこられたのでした。わたしたち一人一人の働きも、実は「主がお入り用なのです」と思っているのではないのでしょうか。二人の弟子たちがそれとは知らずに口にした「主がお入り用なのです」という言葉を自分に当てはめながら、聖なる一週間に入っていくことにしましょう。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

謙遜なイエスの上に神のわざが実を結ぶ

聖木曜日、主の晩さんを記念する日を迎えました。イエスさまが最後の晩さんの席で、御自分の体と血を、パンとぶどう酒の形のもとにわたしたちに与えてくださる聖体の秘跡が制定された夜です。

また、この聖体の秘跡は、「わたしの記念としてこのように行いなさい。」(ルカ 22・19) と仰って弟子たちに引き継ぐことを命じてもいますから、必然的に司祭職の制定の日でもあります。この大きな恵みの夜に、学びの糧を得ることにいたしましょう。

今年、聖木曜日の典礼の中で考えたいことは、イエスが最後の晩さんの途中で、席を立ち、弟子たちの足を洗ってくださったことです。このイエスの振る舞いが示すいちばん目立った特徴は、「謙遜さ」だと思います。イエスの謙遜さが、弟子たちの足を洗う場面を成り立たせています。

足を洗うためにかがむ様子から、わたしは一つの学びを得ました。神さまのわざは、謙遜さを表す出来事の中に実を結ぶのかも知れない、ということです。その何よりの例は、イエスの御誕生の場面です。

神の独り子は、ほとんどだれにも知られることなく、家畜小屋で母マリアからお生まれになりました。この世の権力者の跡継ぎが生まれたのであれば、この世の人々は大騒ぎするのかも知れませんが、イエスは人知れずお生まれになりました。

イエスの誕生はすべてを知り尽くすことはできないような神秘だと思いますが、わたしたちが知りうる範囲の様子からすると、謙遜さが実を結んだ出来事でした。貧しさを受け入れ、この世の名声から遠く離れた場所でお生まれになった。それは、謙遜さの中に神のわざが実を結ぶという最高の例だと思います。

弟子たちの足を洗う今日の場面も、同じように謙遜な態度の中に神のわざが実を結んでいる好例ではないでしょうか。イエスが身をかがめなければ、今日の出来事は起こりえませんでした。ペトロは、「わたしの足など、決して洗わないでください」(ヨハネ 13・8)と言ったのです。弟子の足もとに、師であるイエスが身をかがめることは、考えられないことだったからです。

ところが、この場面は弟子たちに多くのことを教えるすばらしい出来事となりました。つまり、謙遜さが現れている場面に、神のわざはみごとに実を結ぶということを弟子たちは学んだのではないのでしょうか。のちにペトロを含む多くの弟子たちは、殉教を遂げたり、立派に生涯を全うしていきます。殉教者たちは、いのちをもって謙遜さに神のわざが実を結ぶのだということを証ししていきました。イエスが身をかがめる姿、また弟子たちが殉教していった姿は、わたしたちに謙遜の大切さを教えてくれているのではないのでしょうか。

そこで、わたしたちの生活の中で、謙遜さの中に神のわざが実を結ぶということをどうやったら体験できるのか、考えてみることにしましょう。2つの点で体験を積むチャンスがあると思います。

1 つは、一人一人の具体的な生活の中での体験です。わたしたちは、ほかの人よりも多くゆるしてあげなければならない時があったり、ほかの人よりも多く与えなければならなかったり、あるいは忍耐しなければならなかったりすることがあります。どうしてわたしだけこんな思いをしなければならないのだろう、正直そう思うことがあるでしょう。

そんな一人一人にやってくる身近な体験は、神さまのわざが実を結ぶまたとない機会だと思います。ゆるし、与え、忍耐する時、いつも共にいてくださっているイエス・キリストも、ゆるすための愛を、与えるための力さを、忍耐するための寛大さを、あなたに注いでくださっているのではないのでしょうか。

イエス・キリストがわたしたちに必要なものを注いでくださっているからこそ、今日までこれらのことができたのであるし、これからも可能なのだと思うのです。もし、イエス・キリストが共にいて、必要な恵みを注いでくださっていること、だから今のわたしがあると思えるなら、あなたの謙遜さの中に神のわざが大きな実を結んでいるのです。

もう 1 つは、秘跡に近づく中で、神のわざを体験できるのではないのでしょうか。わたしたちは洗礼を受けて神の子、神の家族に加えられました。洗礼のために準備の勉強などをして洗礼を受けた人は特にそうですが、洗礼を受けたあの日、特別に謙虚な気持ちで迎えたのではないのでしょうか。

また堅信の秘跡や婚姻の秘跡、あるいは中田神父は叙階の秘跡を受けたあの日、長い準備を振り返りつつ、謙虚な気持ちで恵みに浴したことを思い出します。つまり秘跡を受ける時、すべての人は自分の謙虚な態度の上に、神の偉大なわざが実を結んできたのです。

秘跡を受ける瞬間は、わたしたちの謙虚な態度の上に神のわざが現れる確実な場なのです。あの、身をかがめる中で表れた神の不思議なわざ、すべての人を謙虚な気持ちに造りかえる偉大な力を、わたしたちはイエスが弟子の足を洗う場面で見いだすことができます。

その同じ神の不思議なわざは、謙遜さを失わないならば、2000 年を経た今、わたしたちの日常生活にも、秘跡にあずかる中でも、繰り返し確かめることができるのです。

謙遜さに、神のわざが実を結ぶ様子を、今日の洗足式を通して確かめましょう。どんな人にも、どれほどの罪人に対しても、神の偉大なわざが今も実を結ぶのだということを、全員確かめることができるよう、恵みを願いましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

すべてを奪われたイエスによって人は救われた

本日聖金曜日の説教は、儀式書の規定にも「受難の朗読後、必要に応じて簡単な説教を行う」とあります。手短に述べたいと思います。

聖金曜日の儀式の始まりは、赤い祭服を着用した司祭が祭壇に一礼して床に伏すところから始まります。わたしは同じ動作を司祭叙階式の時に行いました。わたしはこの床に伏す動作の間に、ごく自然な流れで司祭叙階の時のことを思い出すわけです。

司祭叙階の時、わたしは床に伏して何を考えていたかと思い返してみると、何を考えていたかよりも、たしかに床に伏したこと、はっきり神さまの前にひれ伏したことのほうが印象深くなっています。人間が、大勢の目撃者の前で、床にひれ伏したこと、だれをもはばからず、人間がひれ伏す相手がここにおられるということを証ししたことが、意味深いことなのかも知れません。

このようなことを、今年の聖金曜日の始めに考えて典礼に入りました。イエスは、十字架にはりつけにされ、ある意味ですべての人の前ですべてを奪い取られて無となりました。全人類よりも重い存在である神の独り子が、無にされたことを、わたしたちは見過ごしてはいけないと思います。なぜ、全人類よりも重い存在である方が無となられたのか。それは、全人類を救うために他なりません。すべての人よりも低くへりくだったので、御父は御子のゆえに人類を救ってくださったのです。

わたしたちは昨日の聖木曜日の典礼の中で、イエスが身をかがめたことで素晴らしい模範を示し、神のわざが実を結んだことを学びました。今日も、イエスはこれ以上ないへりくだりを示しました。このへりくだった姿に、神のわざが実を結んだのです。

わたしたちの目には、すべてを奪われた、みじめな姿しか映っていないかも知れません。けれどもイエスは、このようにしてだれにも真似のできない忍耐を示し、最後まで柔和謙遜な生涯を全うしたのです。ここに、神のわざが実を結びます。

わたしたちは、イエスが命をかけて見せてくださった模範を受け取る必要があります。すべてを奪われたイエスに、全人類の救いという神の偉大なわざが実を結びました。わたしたちも、失うものは何もないというほどにへりくだった時に、わたしの上に神のわざが実を結ぶのです。

すべてを失ったイエスと自分を比べて、わたしはまだ何かを捨てきれずにいるのではないのでしょうか。何かにしがみついているのではないのでしょうか。イエスの他に、失うことを恐れるものはないのだと心に決める時、わたしは神の立派な器になると思います。イエスの歩みを、今日写し取って帰ることにしましょう。

復活徹夜祭 (マルコ 16:1-7)

復活した主は、先にガリラヤで待っておられる

主の復活、おめでとうございます。今年の福音朗読の中で、最後の箇所を取り上げて喜びの知らせとしたいと思います。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」
(16・7)

主の使いである白い長い衣を着た若者は、はっきり2つのことを知らせてくれました。1つは「あの方は復活なさって、ここにはおられない」(16・6)ということ、もう1つは、「先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」(16・7)ということです。

「復活して、ここにはおられない」と言います。復活とは、墓に決して縛られない状態を意味していると思われます。墓の中に入った時に、「ここにはおられない」と言われたからです。わたしたちの知識では計り知れないことが起こっているわけです。

わたしたちは、身近な人を失った時、時期を見て納骨します。お骨は、決して墓から無くなったりしません。場所に縛られているのです。自分でその場を離れることはないのです。そこからすると、イエスは墓の縛りから全く自由になっておられるということが分かります。復活とは、埋葬された場所を出て、墓の縛りから自由になった状態なのです。

神の使いの最初の言葉は、別の問題にも答えてくれます。その1つは、だれかが墓から、イエスの遺体を持ち去った、という考えを反駁します。もしだれかが、イエスの遺体を持ち去り、「あの方はここにはおられない」と言ったとしても、その遺体は別のどこかにあるはずですよ。そのような言い逃れでは、別の場所で相変わらずイエスは縛られていることになります。

もう1つの問題は、イエスは心の中で生き生きとよみがえったのだという考え方に反論します。心の中でよみがえったのだというなら、わたしの父も、今私の心の中で生き生きとその姿を思い出すことができます。

けれどもそのような言い方では、今どんな姿でいるのかに答えることはできません。わたしの心の中の父は、今日の父の姿ではないからです。イエスは、思い出としてよみがえったのではなく、今日も、明日も生きておられるのです。

さてそこで、主の使いのもう1つのメッセージが鍵になります。「先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」ということです。なぜガリラヤで会うことを復活したイエスは望んでおられるのでしょうか。

そこで、主の使いが言っているガリラヤとはいったいどんな意味があるのかを思い出したいのです。ガリラヤとはまず、大きな地域全体を言う言葉です。大明寺とか船津とか馬込とかの限られた土地を指すの

ではなく、言ってみれば伊王島全体をさすのです。

次に、ガリラヤの中にはいくつか出来事が思い出される土地があります。ガリラヤの町ナザレは、マリアが救い主誕生のお告げを受けた場所です。御子イエスがユダヤのベツレヘムで生まれてから、生活の場所にしたのもナザレでした。

別の出来事では、ガリラヤのカナで婚礼があつて、水をぶどう酒に変える奇跡を行いました。あるいは、ガリラヤのカファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であったのをいやしてくださいました。ほかに、「ガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。」（マタイ 4・23）という出来事もありました。

何と言っても、ガリラヤ湖では漁師を弟子にして、最初の弟子を選んだ場所としてガリラヤは記憶されています。このように、イエスがおもに宣教活動をした場所、それがガリラヤという言葉で表される意味なのです。

そう考えると、復活したイエスが「ガリラヤに先に行く」のは、弟子たちをこれからの宣教に駆り出す大きな力になります。もちろん本格的な宣教は聖霊降臨の後でしょうが、ガリラヤに行けば、今日も明日も、生きてイエスに会える。出発点であるガリラヤに行けば、生きてイエスに会える。それが主の使いの言いたかったことではないでしょうか。

主の使いに促されて、弟子たちはガリラヤに向かったことでしょう。弟子たちが食事をしている時に、イエスは現れています（マルコ 16・14）。これまでと同じように、今の弟子たちに声をかけ、これからすべきことについて指示を与えています。これは、復活して今生きておられるのでなければできないわざです。たしかに、イエスは復活して、今おられるのです。

弟子たちは、今生きておられるイエスと出会いました。わたしたちはどうでしょうか。わたしたちは、見える姿ではイエスと出会わないかも知れませんが、イエスが今のわたしに声をかけ、これから必要なことに指示を与えてくれるとしたらどうでしょうか。それこそ、イエスは復活して、今生きているという証しではないでしょうか。

今年、聖パウロ年を満ちあるものにするために、わたしは「聖パウロの手紙を学ぶ会」を企画しました。これは、わたしの思い付きとばかりは言えないと思います。イエスがわたしたちに今足りないものを指摘して、これからどうすればよいかを指示してくださいましたのです。

わたしの思い付きで、ここまでの成功は得られなかったはずですが、つまり、復活したイエスは、今生きて、わたしたちに話し掛けておられるのです。これからどうすればよいかについても、指示を与えてくれるのです。

一人一人、自分の生活を振り返ってみてください。わたしに、今足りないものを指摘してくれる声が聞こえてはいないでしょうか。そして、どうしなければならぬかまで、わたしたちには見えていないのでしょうか。それこそ、復活して今生きておられるイエスが、あなたの前にいて進むべき道を示しておられるのだと思います。

わたしたちにとっても、ガリラヤと言える場所があるかも知れません。イエスと出会い、イエスに導かれ、イエスと親しく過ごした場所です。その場所を思い出しましょう。そこに足を向けるなら、今もわたしたちはイエスに生きて会えるのではないのでしょうか。

「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。」復活した主は、先回りしてわたしたちを待っておられます。生きておられる主の声を聞くことができるように、「イエスさま、わたしの心をあなたに向けさせてください」と祈ることにいたしましょう。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

復活の主日 (ヨハネ 20:1-9)

墓に行った人が先に、復活のサインに気づいた

昨晚の復活徹夜祭で喜びを分かち合い、今日もわたしたちはあらためて復活の喜びに沸いています。大明寺教会では今年小学校に入ったばかりのお子さんが、このミサで初聖体をいただきます。イエスさまをいただく喜びも合わせて、朗読された福音からの学びを得ることにしましょう。

今年の学びとして、登場人物が復活の出来事に触れる共通のきっかけがないかを考えてみました。マグダラのマリア、シモン・ペトロ、イエスが愛しておられたもう1人の弟子、この3人が、イエスの復活に触れた共通のきっかけがあるのではないのでしょうか。

わたしはそれは、空の墓に足を運んだことだと思います。「マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。」(20・1)「もう一人の弟子の方が、ペトロより早く走って、先に墓に着いた。身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。」(20・4-5)「続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。」(20・6)それぞれ、空の墓に足を運び、違いはありますが、何かを見たわけです。

この、空の墓に足を運ぶという行動が、登場人物をイエスの復活に導いていったのだと考えました。もう少し言うと、「行動を起こすこと」そこに、復活したイエスと出会う鍵があるのではないかということです。

マグダラのマリアは、墓に納められているはずのイエスを探しに墓に行きました。マグダラのマリアは、イエスがお亡くなりになった後、遺体を埋葬するための手伝いをして、埋葬された真新しい墓の場所も記憶していたのかも知れません。最後まで手伝った彼女が、最初に行動を起こしたと考えるても不思議ではありません。

次に、マグダラのマリアの報告を聞いたシモン・ペトロとイエスの愛しておられたもう1人の弟子が行動を起こします。ペトロには、3度イエスを知らないと言った負い目があったはずで

す。お亡くなりになった後はどうなったのか、気が気でなかったことでしょう。それでも、まだ出かけていく勇気はなかった。そこへ、マグダラのマリアの報告があって、ようやく重い腰を上げたのです。これでやっと申し訳が立つといった気持ちだったのでしょうか。

イエスが愛しておられたもう1人の弟子は、おそらくヨハネだと思われます。そしてヨハネは、イエスの十字架上での最後の場面に立ち会っています。「見なさい。あなたの母です。」(19・27)と呼びかけられています。ヨハネがマグダラのマリアと一緒に最初に墓に行ってもよさそうなものですが、何か思う所があったのでしょうか。

それでも第一報を受けてからは、一目散に墓へ駆けていきました。彼は墓の場所を記憶していたはずですから、ペトロより足が速くてたどり着いたというだけではなかったのかも知れません。

いずれにしても、3人は行動を起こしました。行動した時、イエスの復活のサインに気づいたのです。まだ復活したイエスを目撃していませんが、「これはつまり、復活なさったのだ」と理解したのです。次のようにあります。「それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。」(20・8)

行動を起こした人々に、イエスの復活が先に知らされる。これは意味深いと思います。このことについてもう1つ例をあげることができるでしょう。イエスが亡くなられた後、弟子たちはユダヤ人を恐れて家の中に閉じこもっていましたが、別の2人の弟子がエルサレムからエマオに向かっている途中、復活したイエスに出会いました。

彼らはおそらく、師匠であるイエスを失って、エルサレムに留まっている理由が無くなったと思ってエマオに移動していたのだと思います。行動としてはマイナスの行動ですが、行動を起こした弟子にまず現れ、後に家で鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちにも現れたのでした。イエスに選ばれた使徒たちに、最初に現れてもよかったはずですが、何らかの行動を起こした別の弟子に、最初に現れたのです。

ここまで来ると、わたしたちが考えるべきことは明らかなです。行動を起こすことで、わたしたちも復活したイエスに出会う可能性があるのです。特別なことは必要ありません。身近に起こっていることの中で、行動を起こすのです。

立派な行動を1つ紹介しましょう。今日初聖体を受けるお子さんは、少し前から自分1人で席に座るようになりました。いつもおうちの人とくっついて座っていましたが、初聖体を受ける立派な準備として、ミサの時間自分1人でもいられるよというのを示してくれました。また、ミサ中の司祭の招きにも、声を出して答えることができるようになってきました。行動を起こしてくれたのです。行動する人には、イエスさまはだれよりも先に出会ってくださるのです。

また、今日馬込教会では役員改選のための投票用紙を提出することになっています。強制的にかき集めたりしませんが、自発的に投票箱に入れて、これはと思う人を選びます。今回の投票は、立派な行動だと思います。行動を起こす時、わたしたち1人1人に、わたしたちの教会に、復活したイエスがおいで下さるのです。

ちょっと、行動を起こしてみましよう。初めからダメだ、できないと閉じこもるのではなく、とにかく何か、始めてみましよう。そこへ、復活したイエスがおいで下さり、必要な助け、照らしを与えて下さいます。わたしたちができる人である必要はありません。復活したイエスが、これから行動を起こす人を導いて下さいます。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)

神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

週の初めの日、神のいつくしみを感じて

復活節第2主日は「神のいつくしみの主日」です。今年、「神のいつくしみ」をわたしたちが考え味わうために、「週の初めの日」に復活した主との出会いが繰り返されていることに注目したいと思います。「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」

(20・19) トマスがいない間に復活の主は現れました。週の初めの日の夕方でした。

ここにはトマスがいませんでしたが、次の「週の初めの日」、トマスも一緒にいた時にイエスが再び現れました。「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」(20・26) この八日の後というのは、最初の出現と同じ「週の初めの日」を指しています。

イエスは「週の初めの日」をわざわざ選んで弟子たちに出現したとヨハネが書き残した狙いをまず考える必要があります。ヨハネ福音書が書き残された90年代、すでに迫害は現実のものとなり、「ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」(20・19)という様子は、使徒たちにだけ起こった過去の出来事ではなく、今いる信者たちにも同じように当てはまっていたと思われれます。

そのことから想像できることは、使徒たちが恐れて家に閉じこもっている時イエスが現れて「あなたがたに平和があるように」(20・21)と呼びかけたのは、単に使徒たちにだけ当てはまるのではなく、同じように迫害に直面していたヨハネの共同体も、復活したイエスが自分たちの共同体を力強く励ましてくださると受け取ったということです。ヨハネの共同体が形づくられた頃には、安息日の翌日、つまり週の初めの日に、イエスを信じる者たちが集まっていたはずですが、自分たちも週の初めの日に集まっている。迫害を恐れて、家に鍵をかけて集まっているかも知れないけれども、置かれている状況はかつての使徒たちと同じだから、わたしたちも復活の主に「あなたがたに平和があるように」と言ってもらえるのだ。そう言い聞かせていたに違いありません。

まずここに、神のいつくしみを見て取ることができます。イエスに選ばれた使徒たちは、失意のうちに家に集まっていました。その使徒たちをイエスはいつくしみに包んで下さいます。八日後の週の初めの日には、その場にいなかったトマスも含め、復活の主が大きないつくしみを示して下さいました。

その出来事を、ヨハネ共同体は自分のこととして受け止め、期待していたのです。自分たちも恐れてはいるけれども、週の初めの日に集まっている。わたしたちの集まる「八日の後」にも、イエスはおいでに

なり、「あなたがたに平和があるように」と言ってくださるのだ。そんな期待に包まれて、迫害にさらされていたヨハネ共同体は神のいつくしみに触れたのだと思います。

ヨハネ共同体の体験は、2000年後のわたしたちにも受け継がれています。生活の中で挫折を味わい、信じていたことが裏切られ、これまでにない非難や無理解の中にさらされる。さまざまな辛い体験をして週の初めの日にここに集まっていると言えるかも知れません。だれも慰めることができない。だれも問題を解決できない。そんな人間不信の中で、心の戸に鍵をかけてここに集まっていると言ってもよいでしょう。そこへ、イエスが現れて、「あなたがたに平和があるように」と声をかけ、わたしたち一人一人にご自分のいつくしみを示してくださるのです。

ヨハネ福音記者は、「週の初めの日」に重ね合わせてイエスがいつくしみを示すという形にまとめています。週の初めの日に集まって賛美をささげているわたしたちに、かつてと同じように神のいつくしみが注がれることを期待することは、決して間違っていないと思います。一つの疑問にも答えて、今週の説教を結びたいと思います。本当にわたしたちは、神のいつくしみを期待できるのだろうか、という点です。この疑問に答えを見つけるヒントは、弟子たちが恐れに捕らえられて家の中にいたのを思い出せば十分だと思います。弟子たちは決して勇敢だとは言えない、普通の人々でした。

イエスと生活を共にしていた時に、「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイ 10・28）と言われて、ユダヤ人を恐れる必要はないと聞かされていたはずなのです。それでも、弟子たちは恐れに縛られていたのです。

そこへ、イエスは弟子たちの恐れを吹き飛ばすほどの圧倒的な存在感で現れ、弟子たちを喜ぶ人に変えたのです。「弟子たちは、主を見て喜んだ。」（20・20）それはトマスも同じことでした。「決して信じない」とまで言った彼が、「わたしの主、わたしの神よ」（20・28）と言ったのです。

恐れに縛られている人を自由にするのは並大抵のことではありません。恐ろしさのあまり腰が抜けた人を避難させるとか、行動に駆り立てることがどんなに困難か、十分想像できるでしょう。恐れている使徒たちをすら、イエスは喜ぶ人に変えたのです。これが、神のいつくしみの力だと思います。

復活の主は今も、恐れ、おびえて信仰を守っているわたしたちを喜ぶ人に変えます。自分が信仰を守ることでも精一杯なのに、信仰を子に伝えとか、ましてや知らない人々に告げ知らせるなんて、夢のまた夢だとおびえている時に、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われるのです。

さらに、手とわき腹とを見せて、「あなたが伝えるべきものはこれです」と、指し示すのです。恐れで縮み上がっているかも知れないけれど、わたしがあなたの心を解き放ちます。喜びで満たします。だから、神のいつくしみがあなたの心に伝わった頃、あなたも次の人々に神の

いつくしみを伝えてください。そう言っておられるのではないでしょう
うか。

復活の主が週の初めの日に繰り返し現れたこと、そして手とわき腹を
見せてくださったこと。この2つはわたしたちに神のいつくしみを示
すまたとない機会となりました。あなたが週の初めの日に来ってくれる
なら、必ずいつくしみに触れることができるようにして上げます。あ
なたにどんな過ちや裏切りがあっても、わたしはすでにこの傷によっ
て受け止めたのだから心配しないで。そう言って、わたしたちを喜び
で満たしてくださるのです。

週の初めの日が、**2000**年前から繰り返されています。神のいつくし
みもまた、その時から決して無くなっていないことを今日のこの礼拝
の中で確認しましょう。神のいつくしみを心に受けて、生活の場に持
ち帰り、生活そのものを神のいつくしみが現れる場としていけるよう
に、恵みを願いましょう。

復活節第3主日(ルカ 24:35-48)

復活節第3主日 (ルカ 24:35-48)

聖書をひもとく人は、復活の証人となる

復活節第3主日は、長崎教区では1つの特別な意味を持つ日曜日です。毎年同じことが繰り返されているのですが、御復活の2週間後というのは、司祭の異動の日なんです。昨年もこの話に触れたと思いますが、わたしもこの復活節第3主日から馬込小教区での生活が始まりました。もう少し異動の話をする、今年は浦上教会、滑石教会という2つの大きな教会の主任司祭、助任司祭がすっかり変わりましたし、カトリックセンターで働く本部事務局長も交代となりました。大きな転勤だったと思います。これからどんな新しい風がわたしたちの教区に入ってくるのか、大いに期待したいと思います。

今日、福音朗読の中で私の目に留まった箇所は、最後の部分です。

「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」 (24・45-48)

この箇所を取り上げたのは、イエスがご自身の復活を弟子たちに説明するのに、(聖書に)「次のように書いてある」と仰った点が、興味を引いたからです。イエスは復活の出来事を弟子たちに悟らせるために、聖書を引用したのです。

別に気になる点などないと思われるかもしれませんが、けれども、復活したイエスは目の前にいるのに、出来事を悟らせるのに聖書に頼って説明しているのです。手と足を見せるとか、焼いた魚一切れを弟子たちの前で食べることで、目の前の弟子たちは十分理解できるのではないのでしょうか。

この疑問を解決するには少し説明が必要だと思います。朗読された福音書はルカ福音書です。ルカ福音書の朗読に耳を傾けた人々は、ユダヤ教の教えを知らない異邦人でした。ルカ福音書の読者には、旧約聖書の予備知識は少なく、どんな小さなことでも聖書の知識から説明が必要でした。

ですから、ルカがイエスの復活を読み聞かせるとすれば、読者である異邦の民に分かるように説明をしなければなりません。そこでルカは、弟子たちに説明しているにもかかわらず、聖書の説明を土台にして復活の出来事を悟らせようとしているイエスの姿を描いたのでした。

もう少し加えるなら、イエスの最初の弟子たちと時代も場所も離れ、文化や歴史の土台も根本から違っているわたしたちにもイエスの復活を悟らせるために、ルカは聖書に書かれていることを根拠にして、出来事を解き明かすイエスを描くのです。この2000年代に生きているわたしたちのためでもあるのです。

このことから伝わってくるのは、イエスの復活は直接その時代に見た

人たちだけが理解できるというものではなく、聖書を丹念に読み返すなら、聖霊に照らされて、あらゆる国、あらゆる時代の人々が理解できるものなんだよということです。イエスの復活は、わたしたちも聖書を丹念に開くなら、当時の人々と同じように悟ることができる神秘的なのだと思います。

この点に気づいたことは、わたしにとって大きな励ましとなりました。どこかでわたしたちは、イエスの復活を当時の人々のように大胆に証言するのはちょっと難しいのではないかとひるんでいるのだと思います。ひるんでいるだけではなく、「わたしたちはその場にいなかったのだから、当時ほど宣教が成功しなくても仕方がないよ」と思っているのではないのでしょうか。

その、ちょっとしたあきらめと後ろ向きな態度に、ルカは釘を刺そうとしているのではないのでしょうか。イエスの復活を今の時代に伝えるのは難しくて当然だとあなたは思っているのか。聖書に書いてあるではないか。聖書を丹念に読めば、今の時代でも十分に理解できる出来事ではないか。そんな励ましを与える朗読だなあと思いました。

今週の福音朗読に耳を傾けた今、わたしたちには、受けた信仰をしっかりと生きて、告げ知らせる使命があることをあらためて確認したいと思います。イエスは復活の出来事を目撃した人にも、聖書を解き明かして復活の出来事を説明しました。わたしたちも、みことばの力に信頼して、勇気を持ってイエスの復活を告げ知らせる者になりたいと思います。

復活節第4主日(ヨハネ 10:11-18)

復活節第4主日 (ヨハネ 10:11-18)

羊もわたしを知っている

連休中で、お出かけの人もいるかも知れません。それぞれの場で、日曜日のミサに参加することは、いつもと違う神の家族に触れる良い機会だと思います。

今日の福音朗読の中で、イエスはご自身を良い羊飼いとして示しています。そして、良い羊飼いの条件は突き詰めると「羊のために命を捨てる」この点に尽きると言い切ります。イエスが良い羊飼いの条件として示した「羊のために命を捨てる態度」を、今週はじっくり考えることにしましょう。まず、イエスが用いられた言葉を確認することから始めましょう。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」

(10・11) イエスは「命を捨てる」と言いました。「捨てる」と聞くと、何か要らないものを処分するように聞こえるのではないのでしょうか。どう考えてもそれは間違っていますが、では元の言葉はどういう意味があるのでしょうか。

興味深いのは、同じ部分を英語の聖書は「羊のために死ぬ」と翻訳しています。たぶんこの訳がいちばん素直な翻訳なのでしょう。日本語訳では「羊のために死ぬ」という表現からもう一步踏み込んで、「羊のために命を捨てる」となったのでしょうか。ここで言う「命を捨てる」というのは、「肉体の命に執着しない」「犠牲をささげる」ということを含んだ上での言い回しではないのでしょうか。

元の言葉ではどんな表現になっているのでしょうか。ギリシャ語の聖書では、「命を置く」となっているそうです。この、ギリシャ語の表現に、「命を捨てる」という翻訳の元があるのですから、「命を置く」ということが何を意味するのかを考える必要があります。

考えるために、すでに分かっていることを思い出してみましょう。イエスが命を置いたのは、どこだったのでしょうか。イエスは、十字架上で、ご自分の命を置いたのです。また、イエスはなぜ、十字架上にご自分の命を置いたのでしょうか。これもはっきりしています。イエスは、全人類を救うために、十字架の上に命を置いたのです。

これらを確認した上で、わたしたちの体験を重ねて考えることにしましょう。わたしたちは何かを置いたり手に取ったりひんぱんに繰り返しています。そして大切なものを置くときには大切に扱い、ふさわしい場所に置くものです。貴重なものを床に転がしておく人は誰もいません。反対に、価値のないものを大切に飾ったりもしないのです。

イエスは、命を十字架の上に置きました。わたしたちの経験から考えると、命よりも大事なものはないのですから、命を十字架の上に置いたことを見逃してはいけないと思います。十字架は、命を置くのにふさわしい場所だったのでしょうか。価値ある物を置く場所としては、釣り合わないのではないのでしょうか。

十字架そのものは、この世界でいちばん重い命を置くのにはふさわしい場所ではなかったかも知れません。けれども、別の見方もあります。イエス

はかつてこのように言いました。「愚かで、ものの見えない者たち、黄金と、黄金を清める神殿と、どちらが尊いか。」（マタイ 23・17）

十字架を清めるのはイエスご自身の命です。イエスが命を置いたことで、十字架の木はとうといものとなります。枯れた木に過ぎない人間に、イエスがご自分の命を置いてくださったことで、わたしたちはとうといもの、価値あるものとされました。イエスがこの世の象徴である十字架の上で命を置いてくださったことで、この世と、全人類は救われたのです。

ようやく、わたしたちはイエスが十字架の上で命を置いたことの意義と価値を見いだすことができました。イエスはご自分が引き受けた御父のご計画の深い意味を知っていました。わたしたちもわずかですが、イエスが十字架の上で命を置いてくださったことの意味を知りました。これで、イエスの次の言葉が成就しました。「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」（10・14）

イエスは自分の羊、つまりわたしたち人間を知っています。熱心について行こうとするときがあるかと思えば、熱意を失って道を外れてしまう弱さを持っています。自分で道を外れておきながら、羊飼いであるイエスに探してもらい、連れ戻してもらわなければ、正しい道に立ち帰ることすらできないのです。時には悪い誘惑という狼の餌食になり、さんざん食べ物にされて、信頼していた人にも裏切られたり、守ってくれるはずの人が自分を捨てて逃げていくこともある弱い存在です。

イエスは羊のように弱いわたしたちを知っています。けれども、わたしたちはイエスをそんなに知らないのです。イエスは、「羊もわたしを知っている」と言ってくれますが、イエスの信頼に、わたしたちは十分に応えていないのです。

イエスとわたしたちは、対等にお互いを知っているわけではありません。それなのに、「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」と言ってくださいます。イエスの深い愛に感謝しましょう。わたしたちはイエスがわたしたちを知っているほどにはイエスを愛し返すことはできないのです。それを百も承知で、「あなたたちはわたしを知っている」と、勇気づけてくれるのです。

ここからわたしたちが考えなければならないことが見えてきます。わたしたちはイエスのことをそれほど知らないと思っているのに、「いや、あなたたちはわたしを知っている」と言ってくださいますのですから、わたしたちが誰かの前に立たされたとき、「わたしはイエスを知らない」と言うべきではないのです。

むしろ、「わたしはイエスを知っている。なぜなら、イエスがわたしたちを知ってくださっているから」と言うべきだと思います。確かに何かを知っているのです。全く知らないわけではないのです。ですから、勇気を出して、「イエスは良い羊飼いです」と知らせましょう。

「イエスは良い羊飼いです」と言ったのですから、わたしにとってそれはどんな体験から確かなことなのかを付け加えましょう。こうしてわたしたちは、「わたしはイエスを知っている」という証しを立てることになります。

復活節第5主日 (ヨハネ 15:1-8)

だれもがイエスにつながれた枝とわきまえよう

復活節第5主日と第6主日は、福音朗読から見るとヨハネ 15 章の 1 節から 17 節を 2 週に分けて朗読している形です。ヨハネ 15 章 1 節から 17 節は本来ひとまとまりとして読むべきですから、説教も少し、そのことを意識して考えを巡らせるのが理想です。来週と、うまくつながるか自信はありませんが、できるだけそのつもりで考えてみたいと思います。

第一朗読では、使徒言行録第 9 章が選ばれ、サウロがバルナバの手引きで使徒たちに紹介される様子が描かれています。その際、サウロはすんなり弟子として迎えられたのではありませんでした。「その日、サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じていないで恐れた。」(9・26)

彼がそれまでは迫害者であり、恐れられてもしかたない状況にあったことは皆さんも今年の黙想会で取り上げた内容ですからご存知です。それでもバルナバは、サウロを使徒たちのところに案内しました。

「バルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。」(使 9・27-28)

この一連の様子は、非常に興味深いなあと思いました。サウロは、みずからの体験によって、自分が間違いなく主イエスに呼びかけられ、ほとんど強制的とも言ってよいほどの迫力で、イエスのために働く僕とさせられたという自覚がありました。

一方エルサレムにいる使徒たちは使徒たちで、自分たちは 3 年間イエスと寝食を共にし、復活の出来事にも遭遇し、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ 16・15)との使命を受けたのだという自覚と誇りがありました。

ところでこの両者が出会ったとき、「やあ、あなたもイエスの弟子として選ばれたのですね」とすんなりと互いを認め合うことができなかったのです。使徒たちはサウロを恐れ、信じようとはしませんでした。にわかには信じがたいと思っていたでしょうし、もしかしたら、信じたくなかったのかも知れません。

わたしはここに、ある意味で今週の福音朗読ヨハネ 15 章 1 節から 8 節の理解を深めるとっかかりがあると考えています。どちらも、確実にイエスの弟子だという自覚がある。それなのに互いが互いを認め合うことができなかった。さいわいにバルナバの執り成しがあつたので両者は信頼しあえるようになりましたが、最初からそうだったのではないのです。

この第一朗読の出来事を頭に置いて、福音朗読と向き合うことにしましょう。イエスはご自身を、「まことのぶどうの木」としてお示しになります。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を

結ぶ。」（ヨハネ 15・5）

わたしたちは、イエスにつながっていると、実を結ぶと言います。確かに、ぶどうの木につながっている枝が、実を結びます。木に直接実がなるわけではありません。細くて、長く伸びた先の枝が、実を結ぶ場所です。

それはイエスとわたしたちの関係に置き換えると、イエスはわたしたちを、実を結ぶための道具として使っておられるということです。わたしたちのように、完全でもない、みずから栄養を与えて養うことすらできない存在に、実をつける役割を持たせてくださっているということです。

イエスからわたしたちに注がれているものはなんでしょう。それは聖霊です。イエスは、わたしたちに聖霊を注いで、実をつける枝として養い続けておられるのです。この聖霊に十分に養われて、わたしたちはイエスの望むように実をつけ、イエスの喜びとなるのです。

ちなみに、わたしたちがイエスに望まれている実についても考えておきましょう。いろんな示し方ができると思いますが、ここでは聖パウロのガラテヤの信徒への手紙を例に挙げたいと思います。次のように書かれています。「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。」（ガラ 5・22）わたしたちがイエスに期待されている実りとは、このようなものです。この実りをつけて、収穫主であるイエスにお返しするのです。

ここまでは話を聞いて考えればなるほどとうなずけるかも知れません。問題が1つ残っています。使徒言行録の朗読に戻りますが、のちにパウロと呼ばれるサウロも、エルサレムの使徒たちも、イエスにつながっている枝であるという自覚と誇りがありました。

けれども、エルサレムの使徒たちは、誰もサウロを弟子だとは信じないで恐れたのです。イエスにつながっている枝には違いありませんが、互いが互いを認め合うことができなかったのです。

この時の摩擦は、はたしてその時だけのものなのでしょうか。ある人にとっては、自分たちは昔から教会の一員だけれども、あの人々を教会の一員だとは認めていない。受け入れていない。そんなことが現代でも起きているのではないのでしょうか。

だれもが、イエスにつながっている枝だという自覚があるのですが、それぞれの枝が、別の枝を認めることができないでいるのです。いろんな理由がそこにはあるのかも知れません。あの人たちに何ができる。わたしたちは寝食も共にしてきた者だ。同じ仲間だと言われても絶対に認められない。たとえばこのような思いが、心のどこかにあるのではないのでしょうか。

問題を複雑にしている原因をはっきりさせましょう。原因ははっきりしています。1つの枝から、他の枝を見ているからです。自分という枝から、他の枝を見れば、かなり遠く離れている、もしかしたら正反対の方向に伸びているので、全く共通点が見いだせないかも知れません。どうしてこれだけかけ離れている相手を、仲間だと信じられるだろうか。なるほどそうかも知れません。

けれども、わたしたちすべてに聖霊を注ぎ、養っておられるイエスという木から枝を見ることで、すべては変わってきます。あの枝も、この枝も、もっと言うとすべての枝が、等しくイエスから聖霊を注がれた枝な

のです。

わたしから見れば遠く離れているかも知れないその枝も、イエスという木から見たとき、だれもがほぼ同じ距離にあるのです。イエスが注ぐ聖霊の届くところに、すべての枝がつながっているのです。

サウロを信じないで恐れたエルサレムの使徒たちも、あとでは彼を使徒として受け入れ、自由に活動することができるようになりました。今日わたしたちは、ミサのあとに信徒総会を開きます。せっかく総会を開いて皆が一堂に集まるのですから、誰もが木であるイエスに養われている枝であり、互いに受け入れ合うべきだ。その気持ちを起こすきっかけにして欲しいと思います。

こうしてお互い生かし生かされる関係になったとき、ぶどうの木であるイエスは、馬込教会の信徒という枝を通して、豊かに実をつけることができるのではないのでしょうか。

復活節第6主日(ヨハネ 15:9-17)

復活節第6主日 (ヨハネ 15:9-17)

イエスに友とされた者として生きる

先週、枝であるわたしたちは、ぶどうの木であるイエスにつながって、聖霊の息吹に養われながら、霊の実をつけるということを話しました。また、わたしたちの教会も枝であり、ぶどうの木であるイエスにつながって活動することで、イエスが現代にあっても豊かな実りを結ぶということも話したと思います。

今週、ぶどうの木であるイエスにつながっているわたしたちの姿をもう少し掘り下げてみたいと思います。先週もお話ししましたが、枝同士が自分の立場からものを見ると、わたしという枝と、正反対の方向に伸びている別の枝とは、似ても似つかない、共通点が見いだせない、協力できるはずがないと思ってしまいます。

ですが、キリストに養われている枝であるという意味で、わたしたちは協力し合える、理解し合えるということです。このことをイエスは今週の朗読箇所で次の言葉で言い表します。「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」 (15・14)

基本的に友達になれる人というのは、自分と同じ価値観を持っている人です。自分と似たような境遇にある人にも親しみを覚え、友人のうちに数えることもあります。たとえば、体に故障が来て、手術しなければならなくなったとしましょう。

似たような病気の人が同じように手術を控えて入院していたら、これからのリハビリの時間もあるので、友達になって一緒にリハビリに励もうと思うでしょう。病院に入院して初めて出会った人ですが、病気が同じだったので友達になることができました。

また、日曜日のミサに、違う場所で参加したとしましょう。たとえば5月の第3日曜日は雲仙殉教祭のミサが行われますが、雲仙でミサに参加している人のほとんどは、初めて見る人かも知れません。

けれども、大司教様主司式のミサに参加して、「お互いに平和のあいさつを交わしましょう。主の平和」とあいさつを交わすときには、見知らぬ人と笑顔で平和のあいさつをするに違いありません。それが可能なのは、同じ信仰を持ち、同じカトリック教会のミサに参加しているからです。その日のミサの中で、あなたは誰とでも、友人として平和のあいさつを交わすことができるでしょう。

このように、わたしたちは共通の価値観を持っている人のことを、「友」として見ることができます。イエスはすでに経験したことのあつたこのような体験を期待して、「友」という言葉でイエスという木につながっている信仰者のことを説明してくださったのです。「友」という言葉を生まれて初めて聞く人は誰もいないのですから、イエスは、誰にでもよく理解できるように、このような話し方をされたのでしょう。

ところで、イエスは弟子たちのことを「友」とお呼びになりましたが、「友」と呼ぶからには弟子たちに期待していることも何かしらあるのではないのでしょうか。わたしたちが、「友」に期待するようなことを、イエス

もまた弟子たちに期待するのは当然ではないでしょうか。

わたしたちは友人にふつうどんなことを期待しているのでしょうか。困ったときに助けてくれることとか、同じ目標を目指して、お互いに励まし合うとか、過ちを犯したときに正直に間違いを指摘して諫めてあげるなどのことを期待するでしょう。「それでも友達か」と言われるようなことを慎むことも含まれるかも知れません。

イエスは弟子たちに、「あなたがたはわたしの友である」と言いました。まずイエスが、弟子たちの友となってくれたに違いありません。弟子たちの働きに力を貸し、弟子たちが行き詰まっているときには知恵を貸し、喜ばしいことがあれば一緒に喜び、悲しい出来事があればその悲しみを半分に分け合って、友として十分に支えてくださったに違いありません。

そこから、弟子たちは自分たちのなすべき事を学んだことでしょう。イエスを信じ、イエスの命じる掟を守る人々に友として接し、イエスがくださったように、新しくキリスト者となった人々の支えとなっていたのではないのでしょうか。

そこで、わたしたちもイエスの呼びかけに向き合う必要があります。

「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。」つまり、互いに愛し合いなさいというイエスの掟を守るなら、わたしたちはイエスの友となれるのです。

病院で同じ病気にある人と友情をはぐくむことができると言いました。同じ目標を持っている人とも、友人になれると言いました。そうであれば、イエスの掟を生き方の基本にしているキリスト者は、互いに友となれるはずです。

友は、相手を思いやります。わたしたちがミサに参加しているこの時間、同じく友であるあの人は、残念ながらミサに来ることができないかも知れません。その人のことを思い出してあげましょう。

食事をしている時間、友であるある国の家族は今日の食べ物に事欠いているかも知れません。その人のために、小さな募金箱を用意しましょう。この運動はすでに長崎教区では広く行き渡っていて、「一菜募金（いっさいぼきん）」と言っています。

同じ司祭の身分にあるあの人、同じ修道者の身分にあるあの人、同じ信徒であるあの人が、もしかしたら心を閉ざして暗闇の中にいるかも知れません。どうしてるかなあと、その人のことを思い出したなら、祈ってあげるとか、電話やメールで連絡取るとか、訪ねてみるとか、いろんな方法で「あなたのそばにいるよ」と知らせてあげましょう。ずっとそばにいて知らせておけば、いつか心を開いて悩みを打ち明けてくれるかも知れません。

これらはすべて、友であるイエスが先にわたしたちのためにしてくれたことであり、わたしたちにも期待されていることだと思います。入院先の友達は同じ病かも知れませんが厳密にはわたしの病と相手の病は別物です。キリスト者同士はこの世の友とは違います。同じ一つの信仰で友となれるからです。他の友とは全く異なり、イエスを信じているという共通の土台に立って、物事を考えることができるのです。

わたしたちは、イエスに友としていただいたことを決して忘れてはいけません。決して忘れないしるしは、わたしたちが誰かの友となることです。

イエスを信じているから、身近なあの人に力を貸そう。ずいぶん遠ざかっているあの人に、心の窓を開いておこう。わたしたちが動き出す力は、先にイエスによって友としていただいたこと、ここに力の源があるのではないのでしょうか。

主の昇天(マルコ 16:15-20)

主の昇天 (マルコ 16:15-20)

昇天の直後から、主は共にいて働く

主の昇天の祭日を迎えました。これから連続して祭日が続きます。来週は聖霊降臨、その次は三位一体、さらにキリストの聖体、さらにキリストの聖体の週の金曜日にイエスのみ心の祭日がやってきます。この一連の祭日は、セットにして覚えることにしましょう。

また、今年はイエスのみ心の祭日から、ベネディクト 16 世教皇の発表により、「司祭年」が始まります。司祭年に当たっての司祭に向けられたテーマは、「キリストと司祭職への忠実」となっています。「司祭年」を過ごす今年は、特に司祭のためにお祈りいただければ幸いです。

さて、主の昇天に示されたメッセージをお互い学び合ひましょう。イエスが天に昇られるというのですから、まず考えなければならないことは、天に昇られるイエスを、わたしたちはどのように見つめればよいのかということです。

見方としては、わたしたちに先立って天に昇られたのだから、イエスに希望を置こうと考えることは大切だと思います。イエスはたんに御父のもとに昇って行かれたのではなく、わたしたちのために場所を用意しに、先に行ってください（ヨハネ 14・2-3 参照）と考えることで、天に昇るイエスの姿を思う時、希望を持つことができると思います。

もう一つは、イエスの次の言葉です。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」（16・15）宣教に出かけて行きなさいと言うのですが、そんなに簡単なことなのでしょうか。イエスがそばにいて初めて、弟子たちは宣教活動ができるのではないのでしょうか。この疑問に、しっかり答えを見つけなければなりません。

実際、イエスが共にいてくださらなければ、弟子たちはほとんど無力です。イエスと一緒に行動しておられた時でさえ、弟子たちだけで悪霊に悩まされている子供を救ってあげることができませんでした。「この霊を追い出してくださるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」（9・18）とあります。

弟子たちはイエスが共にいてくださらなければ自分たちがまったく無力であることをよく知っていたことでしょう。それなのに、宣教に出かけなさいという命令を受けて、さっそく出かけて行っただとすれば、弟子たちのそばにイエスが留まってください、共にいてくださるという確信があったからに違いありません。

確かに、今日の福音朗読の最後には「弟子たちは出かけて行って、至るところで宣教した。主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりとお示しになった。」

（16・20）とあって、主が弟子たちと共に働いたことが分かります。けれども、弟子たちは、イエスが天に昇られた時点で即座にこれからもイエスが共にいてくださることを理解したのでしょうか。

わたしは、イエスが天に上げられてから弟子たちが宣教活動に出かけて行くまでには時間があって、そのことが今日の福音朗読には省略さ

れていると思います。そのことを解く鍵は、今日の朗読箇所がマルコ自身が書いたものかどうかということにあります。

マルコ福音書自体は、60年代から70年代に書かれたとされています。四つの福音書の中で最も早く書かれた書物です。ところで、大多数の学者は、今週の朗読箇所を含むマルコ16章9-20節は、マルコが書いた結びではなく、マルコ以後に書き加えられた結びであると主張しています。そうであるなら、今日朗読された、弟子たちが積極的に宣教活動に出かけて行くさまは、ある一定の時間が経過した後の出来事、例えば2世紀初頭の出来事だろうと思われるのです。

2世紀初頭の出来事であれば、聖霊降臨もすでに体験しているはずです。つまり、今日登場している弟子たちというのは、聖霊降臨後の弟子たちの宣教の様子が、あたかも主の昇天直後であるかのように付け加えられているということです。

弟子たちが宣教に出かける様子をマルコ福音書の最後に付け加えた後代の編集者は、聖霊降臨以後に起こったことを、主の昇天直後のことだったと歴史を書き換えようとして付け加えたのでしょうか。わたしはそうは思いません。

この付け加えで後代の編集者が言いたいのは、主の昇天直後から、イエスは弟子たちと共におられたのだということが言いたくて、このような書き方をしたのだと思います。そのことを実感したのは聖霊降臨の時ですが、昇天された直後から、イエスは弟子たちと共にいてくださったのです。

このことはわたしたちに一つのことを考えさせます。わたしたちはいつになったら宣教する信徒へと変わるのだろうかということです。それに対する答えは、「あなたが、イエスはわたしと共にいてくださる」「イエスはわたしたちと共にいてくださる」と感じたその時から、すでに宣教者なのです。

長崎教区のここ十年来のモットーは、「参加し・交わり・宣教する」ということですが、わたしたち一人一人を振り返ると、「参加し・交わる」ことまでは何とか関わっていると感じていますが、なかなか「宣教する」ということまで踏み込めていないのが現状ではないでしょうか。

つまり、わたしの家族で、洗礼を受けてもいいかなあと思っている人がいても、直接口に出して勧める勇気がないとか、わたしの近所の人で、正直に生きているけれども特別な信仰は持っていないというような人に、「日曜日、よかったら教会に一緒に行きませんか」と、そこまでは声に出せない。そんな状態なのではないのでしょうか。

そうであるなら、やはり何かの機会に、「もっと宣教する」ということに心を向けるべきだと思います。この1年間取り組んできた「パウロ年」がきっかけを与えてくれましたし、今年6月18日から始まる「司祭年」はさらに良い機会になるでしょう。

わたしたちが「イエスはわたしと共にいてくださるんだ」と感じたなら、ためらわずにわたしにできる宣教に関わってほしいと思います。イエスは2世紀初頭だけではなく、今も、「共に働き、語る言葉が真実であることを、それにとまなうしるしによってはっきりお示しにな

る」のです。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 15:26-27;16:12-15)

聖霊降臨の主日 (ヨハネ 15:26-27;16:12-15)

わたしたち自身の聖霊降臨に気づき、証しを立てよう

5月30日土曜日に、父フランシスコ中田輝明の年忌のミサを新上五島町鯛ノ浦教会でささげてきました。金曜日に長崎の大波止から五島産業汽船に乗って鯛ノ浦に向かったのですが、この日は木曜日の大荒れの天気の影響がまだ残っていて、少々の波では何とも思わないわたしも、さすがに船が揺れてまいりました。胃の中身がかき混ぜられるような感じと言ったらいいでしょうか。とにかくつらい船旅になりました。

わたしは大きな波に揺られて鯛ノ浦に向かっている時間に、1年と数ヶ月前、肺ガンの治療のために鯛ノ浦から長崎に船で上がってきた父を迎えた時のことを思い出していました。「おー、迎えにきとったとか。酔うたぞ～」と、弱気なことを言って船から降りてきたのです。

「これから治療に行くんだから、そんな弱気じゃダメだよ」と、元気づけるつもりで言葉を掛けたような気がします。わたしが金曜日に味わったようなつらさをもし味わっていたとしたら、弱気じゃダメじゃないかとか言ったのは、今になって考えてみれば悪いことを言ってしまったなあと思ったのでした。

翌日の土曜日、集まった信徒の皆さんと一緒に追悼のミサをささげたのですが、金曜日に布団に滑り込んだのは夜中の12時半くらいでした。しばらく休ませてもらおうと思っていたのですが、ちょっとした物音が聞こえたような気がして起き上がって居間に行きますと、母が何やら新聞で調べ物をしていました。

「頼むよ本当に。こっちは疲れてるんだから。」そう言うと母が「起きたとね。時間までゆっくり寝とってよかよ。起こすけん」と言うんです。それはこっちのセリフじゃ。こんな時間に物音立てたりして。そう思ったのですが、これまたあとで考えると、毎朝ミサに行く時に「おー、こうじ。ミサに行くぞ～」と言って目覚ましが鳴るよりも早くに起こしていた父が、物音を立ててわたしを起こしていたのかなあと思ったのです。

この2つのことを重ねて考えると、わたしはこんなことを思いました。父が生活の中で教えてくれようとしていたことは、一緒に暮らしている時には当たり前すぎて理解できなかった。けれども、父が亡くなって1年経てみると、今のほうがむしろ当時よりも父の言いたいことがよく理解できることもある。そう感じたのです。

この経験は、聖霊降臨の出来事を理解するヒントになるのではないのでしょうか。今日の福音朗読の中で、「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。」(15・26)「あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。」(15・27)「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。」(16・12)「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」(16

・14) これらの箇所が重なっていると考えました。

説明すると、聖霊降臨の出来事は、弟子たちが、今は理解できなくても、あとで聖霊を受けると理解できるようになるという約束の部分と、聖霊を受けると弟子たちは証し人になるという使命の部分とが含まれると思うのです。

この二重になっている部分は、わたしが父のことをあとになって理解できるようになったことと、父が残してくれた生き方を、自分のこれからの人生の中で証ししていかなければならないと感じているという二重の感覚と、よくにているなあと思ったわけです。

このような関連は、なぜ生まれてきたのか。それは、両方共に、聖霊が降って、働いているからではないでしょうか。今年、中田神父にとっては、父の1周忌を通して、聖霊降臨とはどんな出来事だったのかを具体的に教えてもらったような気がします。

もちろんわたしが話したことはわたし個人に関わる体験ですので、皆さまはそれぞれが、自分の中で同じような経験をしていないだろうか、と振り返っていただければと思います。

その当時は理解できなかったけれども、今になってみたら前よりもよく分かるようになった。そしてその分かるようになったことは、今の時代のより多くの人に、さらには次の世代の人々に、告げ知らせるべきだと感じている。

もしもこのような経験を持っているとしたら、あなたにも聖霊降臨の働きが届いているのだと思います。聖霊降臨で弟子たちが体験していることは、当時劇的な形で実現したわけですが、それで終わったのではなく、今の時代にも同じ恵みの体験は与えられるということです。

同じ体験が与えられる共通の土台は、わたしたちがすでに堅信の秘跡によって聖霊を受けているということです。あとは、よくよく振り返ってみると、誰しもきっと同じような体験に行き当たるのではないのでしょうか。

わたしにも、聖霊降臨の恵みは届いています。その喜びの体験に気づき、体験をもとにして証しを立てましょう。あなたが体験した喜びであれば、他人の借り物ではないのですから、きっと伝えることができるはずです。そしてあなた自身の喜びが本物であれば、きっと人を惹きつけ、わたしたちと同じ信仰に、人を招き入れることができるのではないのでしょうか。

三位一体の主日(マタイ 28:16-20)

三位一体の主日 (マタイ 28:16-20)

聖霊による一致を三位一体から学び、倣おう

半月板の手術のために賄いさんが市民病院に入院してから1週間が経ちました。わたしにとっては1ヶ月のように感じられた1週間でした。わたしが掃除をしないおかげで司祭館はゴミ屋敷です。ゴキブリも大運動会をしています。幸いに修道院のシスターが助けに来てくれたのですっかりきれいになりましたが、1ヶ月これが続くのかと思ったら気が重いです。まあそれでも、見舞いに行ってみようかなあと思い、せっかくなら伊王島の魚も味わわせてあげようと、釣った魚をこしらえて病室に行きました。リハビリの時間だったので、30分ほど待ちましたが、病室に戻ってから様子を聞いて、それから言いました。「病院では伊王島の匂いのする物も食べてないだろうから、これを食べて元気を付けよう。」刺身に切って行ったのは、キンブク（シロサバフグ）と、バリ（アイゴ）です。そしたらよほどおいしかったのか、かぶりついて食べましたよ。一緒に食べようと思っていたのですが、黙ってたら全部食べてしまいそうだったので、「おいおい、わたしにも残してくれよ」と言ったくらいです。この日は病院食と別に刺身も食べたわけですから、先週話したような三食昼寝付きではなくて、四食昼寝付きという豪勢な入院生活ですよ。いいですねえ。今日三位一体の祭日を迎えました。父と子と聖霊が唯一の神でおられるという神秘について、与えられた朗読箇所から学びを得ることにしましょう。考えるきっかけとして、ひれ伏す弟子たちに、イエスが近寄ってきたということを取り上げてみたいと思います。弟子たちの中には疑う者もいたわけですから、空間的には近寄ることはできても、弟子たちの心の中まで近寄ることは困難だったと思われます。それでもイエスは近寄って、すべての民を弟子にきなさいと使命を授けました。イエスが弟子たちに取った態度、「近寄る」ということの中に、三位一体の神秘に触れるヒントがあるようです。父と子と聖霊が間に何も挟むものがないほどに近寄る時、父と子と聖霊は近くにいるというよりも一つでおられるのです。わたしたち人間同士は、親友であっても離れることがあるし、離れてはいけない間柄であっても引き裂かれることもあります。ところが父と子と聖霊は決して離れません。たんに近くにいるのではなく、一つになって、唯一でおられるのです。父と子と聖霊が、一つでおられるための大きな役割を果たしているのは聖霊だと思っています。父と子が、思いも望みも近寄って一つになるために、聖霊が絆となっておられるのです。このことは、イエスが弟子たちに近寄った場面にも当てはめて考えることができます。弟子たちにイエスが近寄った。それは分かりますが、それだけではあとに続くみことば「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(28・20)の説明には不十分です。「いつもあなたがたと共にいる」という実感は、弟子たちが聖霊降臨を体験しなければ理解できなかったはずです。つまり、聖霊のおかげで、イエ

スが仰った「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とのイエスの約束が弟子たちにも理解できたのです。

父と子と聖霊の三位が一体となるために、聖霊による一致が大きな役割を果たしているとわたしは考えました。同じように、わたしたちが教会として一致して行動するためにも、聖霊による一致が必要になります。

行動の計画を立てる時、ある人は意見が対立するかも知れません。それは反対するための意見の衝突ではなく、慎重になっていたり、別の方法で目的が果たせるのではないかと考えていたり、いずれにしても熱心さから来る意見の衝突は十分考えられます。そんなとき、わたしたちは皆、聖霊に一致のための恵みを願うべきです。

また、家族の中で大きな決定を下す話し合いをする時にも、意見がぶつかり合うことはあり得ます。親と子の間で、夫と妻の間で、兄弟間で、それぞれの持っている考え方には違いがあるわけですから、すんなり話し合いがまとまらないこともあるでしょう。そんな、一致が難しいと思える時に、一致のための聖霊の恵みを願うべきだと思うのです。

三位一体が深い一致を実現して、わたしたちに何かを考えさせていると思います。あなたたちに一致できないことはない。もし一致できないのなら、聖霊による一致を願っていないからだ。聖霊による一致以外に、本当の一致を見ることはできない。だから、あなたの関わっている教会、共同体、家族の一致のために、聖霊の恵みを願うべきだ。そんな声を、今日三位一体の祭日にイエスは呼びかけているのだと思います。

イエスは弟子たちに近寄って声をかけてくださいました。弟子たちを含め、わたしたち人間には一致の力が足りないので、イエスのほうから近寄って、一致の力を与えてくださいました。わたしたちの中で一致が見られないなら、聖霊による一致を強く願いましょう。わたしたちがある程度一致できているなら、より深い一致を求めて聖霊に祈りましょう。聖霊こそ、三位一体の絆の源であり、わたしたちが意見の相違を乗り越えて、信頼しあえるまでに一致する、力の源なのだと思います。

キリストの聖体(マルコ 14:12-16, 22-26)

キリストの聖体(マルコ 14:12-16, 22-26)

取って食べなさい

火曜日から金曜日まで、教区司祭の黙想会に参加してきました。黙想の指導はイエズス会の林 尚志（ひさし）神父さまでした。まもなく後期高齢者ですと言っていましたが、どうしてどうして、身振り手振りも交えて説教をする方で、時間割に従えば説教の時間は45分のはずですが、いちばん短いときでも60分、いちばん長かったのは72分も話していました。どこからあんな元気が出てくるのか、学びたいなあと思ったくらいです。説教の内容は、大きく言うと、「イエスとの出会い、交わりの中で、わたしたちにイエスの命が流れる。交わりを大切に」ということだったと思います。交わり、出会いを大切にすることで、わたしたちは誰でも自分の中心に芯となるものが1本通っていて、この「中心線・芯」を、イエスの中に流れている「中心線・芯」とぴったり重ねて生きることが最も重要なのだ。芯と芯を重ねるから、これをイエスとわたしたちとの芯重と捉えていますと仰っていました。ちょっとびっくりする言葉ですね。

他にもお話しすればたくさんのキラッと輝く材料を提供することができるのですが、またの機会にしましょう。これからの一年間のわたしの説教への取り組みの中に、またわたし自身の歩みの中に、黙想会で見つけた材料を練り込んでいけたらと思っています。

今年の黙想会は、例年とは少し雰囲気違っていました。2つ例を挙げますと、昼食と夕食に、例年よりも多くの神父さまが一緒に参加しておられたということです。長崎本土の神父さまは、希望すれば教会に戻って司祭館で食事をすることもできます。本土の神父さまが全員そのようなことをすれば、一緒に食べる人の数はもっと少なかったでしょう。

また、「今日は外で食べようかなあ」というようなことを、これまででしたら割とおおっぴらにやっていたのですが、今年は本部事務局のたつての願いで、「みんなでカトリックセンターの食事を食べましょうよ」という意向になっていたのです。本心は、「たまには外食したいなあ」と思っている方もおられたかも知れませんが、結構まじめに、カトリックセンターと大司教館を離れずにいたようです。

もう1つは、これもまじめに黙想会をしようとするなら当然と言えば当然なのですが、いろいろ用事を作って外出する人も少なかったのではないかと思います。たとえば、昼食後にわたしは時々気分転換をしにボーリングに行っていました。この点についても、本部事務局から、「黙想会に妨げとなるような行動は慎みましょう」と釘を刺されてしまったのです。わたしはボーリングですが、ある人はもっと小さい鉄の玉で楽しむ場所に行く人もいたわけで、こうした楽しみを慎んで、それはもうまじめ～に、黙想会をしてきました。

さて、福音朗読に入りましょう。朗読箇所は、マルコによる福音の、過越の食事を通して、イエスが弟子たちに聖体の秘跡を制定される様子が描かれていました。今年の黙想会を終えてあらためてこの朗読箇所を読むと、わたしには「過越の食事」という意味合いがぐっと迫ってきます。

「過越の食事」というのは、説明なしで使われていますが、マルコ福音書の中では説明の必要がないのでこのような使われ方をしています。けれども、わたしたちには説明が必要でしょう。ここで言う「過越の食事」は、出エジプト記の出来事に基づいています。エジプト脱出の夜、イスラエルの民が小羊の血を家の入り口に塗ったことから過越の記念として食されました（出エジプト 12:1-14）。出エジプト記 12 章によると、エジプト王がイスラエルの民をひどい扱いをしている中で、神はモーセを選び、エジプトに災いをもたらしてイスラエルの民を約束の地へと脱出させようとしています。

エジプトには 10 の災いが降るのですが、その最後の災いが、人であれ動物であれ、初子が死ぬというものでした。小羊の血を塗った家は災いが過越ていきました。こうしてイスラエルの民は、モーセを先頭にしてエジプトを脱出したわけです。

この過越を経験した人々の子孫は、当時の出来事を思い起こし、物語るために、食事の形式を引き継いでいったのです。イエスの時代にも、忠実に受け継がれていて、弟子たちは過越の食事を準備する場所をどうするのか、イエスに尋ねたわけです。

イエスはもちろん、当時の過越の食事の形式を尊重しましたが、この最後の晩餐の中で執り行った過越の食事には、全く新しい意味が与えられることになります。エジプトを脱出した当時、それは現状の奴隷の軛からの解放であって、エジプトを脱出したからと言って救いにあずかったわけではありませんでした。

イエスも、過越の出来事を念頭に置いていましたが、イエスが残してくれた最後の晩餐は、ご自身のからだを裂くことによって、救いを与えるものとなったのです。現状からの解放だけではなく、決定的な救いにあずからせるために、イエスはご自身を過越の食事として与えてくださったのです。

そう考えるとき、イエスが用意してくださった過越の食事は、どこからどこへ過ぎ越すものであるかを、しっかり捉える必要があると思います。食事の形でイエスが残してくださったもの、つまり「聖体の秘跡」は、わたしたちをどこからどこへ過越させるものなののでしょうか。

「これが説明だ」と、1つの説明に縛り付ける必要はありません。決定的にわたしたちを過越させるのだと言えるその人なりの説明があればいいと思います。たとえば、罪深い生活から、罪を捨て神と向き合う生活に決定的に変わる。もちろん人間の力だけでは不可能ですが、聖体の秘跡はこのような過越をわたしたちにもたらしめます。あるいは、人を憎み、ゆるそうとしない姿から、憎しみを捨て、決してゆるせなかった人とも和解する。そのような過越を可能にしてくれるのです。

では、これほどすばらしい過越のためにイエスがご自分のからだを裂いてくださったのであれば、わたしたちはイエスの愛にどのように答えればよいのでしょうか。それは、イエスが用意してくださる聖体の秘跡に近づき、わたしたちも決定的に過越させてもらうことです。今週の「キリストの聖体」の祭日は、そのことを考えるまたとない機会です。

この喜びに、わたしたちは毎週招かれています。罪を自覚していてもそこから抜けられないわたしたちを、イエスはご自身が過越の食事となって決

定的に過越させてくださるのです。日曜日ごとに繰り返されるみことばと聖体の祭儀は、わたしたちを決定的に過越させてくださる交わりの場なのです。

まずわたしたちは聖体の秘跡の力をよく理解して、なかなか足を向けない人々にも、また初めての人にも、宣教するきっかけにしましょう。わたしたちが聖体の秘跡の力をもっともっと感じるなら、宣教することは難しいものではなくなってしまうはずです。自信を持って、この一週間それぞれの生活に遣わされていくことにしましょう。

年間第 12 主日 (マルコ 4:35-41)

年間第 12 主日 (マルコ 4:35-41)

困難があっても共にいるイエスに信頼して渡る

金曜日でした。墓地管理委員会の通帳に島外の人々の管理費が入っていないか郵便局まで確認に行ったのです。集団下校している小学生に会いました。その中に、付き添いの大人の人から「ほら！そんなところに登ったら危ないでしょ」と注意されている小学1年生がいました。

船津の、一ノ瀬電気の並びの道路は、一段高くなったコンクリートの土手の上に簡単な手すりが設置されているわけですが、注意されても言うことを聞かず、狭い土手を平気で歩いている1年生がいました。わたしはバイクに乗って、ヘルメットをかぶっていましたが、その1年生から、「あー、何か神父さまに似てる」って言われましたが、似てるんじゃないくて神父さまです。

6月19日、今年のイエスのみ心の祭日はとても大切な祭日になりました。この日から来年の6月19日までを、教皇ベネディクト16世は「司祭年」とすることに決めたのです。この司祭年に当たっての呼びかける中心になる相手はもちろん司教・司祭で、司祭年のテーマは「キリストと教会への忠実」となっています。

わたしも自分の司祭職を、委ねられた務めを、キリストと教会に対して忠実に、誠実に果たしているかと言われると、やはり反省させられます。

「だいたい」は果たしているでしょうが、「忠実に、誠実に」果たしているか。うーん、まだまだ足りないなあと感じます。

さて福音朗読は、イエスが弟子たちを促して、舟で湖の向こう岸に渡ろうとする出来事が取り上げられています。イエスは、「向こう岸に渡ろう」

(4・35) と弟子たちに言いました。この時点ですでに、かつてモーセを先頭にして、イスラエルの民が紅海を無事に渡ったことが背景にあるのかなと考える必要があります。

出エジプトの出来事を背景にして、目の前で起こっていることを考えると、「激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった」

(4・37) という様子は、後ろからは追いつかるエジプト軍の精鋭部隊、前は海という絶体絶命のピンチが思い起こされます。この前にも進めない、後にも引けない状況で、神は水を分けられ、イスラエルの民は乾いた土地を歩いて対岸まで渡ったとされています。

同じように、イエスは弟子たちのあわてふためく中で、枕をして眠っておられるのです(4・38 参照)。ここには、父である神への絶対の信頼の中にイエスはおられて、たとえどんなに惑わされそうなときでも、揺るがないという姿があり、かつてのモーセとイエスの間で重ねて見ることができます。

ですから、イエスのこうした態度は、自然を超越している神の子だからできるのだという意味よりも、どんな場面でも父なる神への信頼を失わないという態度を学ばせるためのジェスチャーなのではないでしょうか。つまり、波をかぶっている状態でぐーぐー眠っておられたというのが出来事を中心なのではなく、腕を組み、目を見開いて、動じない。そんな意味合い

がイエスの態度にはあるのだと思います。

一喜一憂しないということでの話ですが、先週始め賄いさんから電話があり、リハビリを懸命にこなしていて、予定通りいけば今月いっぱいには退院できるだろうという報告でした。その際、「一時的に膝の周りが腫れたこともあって心配した」というので、わたしはこう返事したのです。「晴れの日も、曇りの日もあると。人生晴ればかりじゃない。いちいち心配しない。」そう言ったら電話の向こうではげらげら笑い転げておりました。

さて福音に戻りますが、弟子たちはイエスの一連の行動に恐れを感じています。「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」(4・41) 弟子たちは目の前で起こっている出来事が十分理解できていませんでした。

湖を渡る体験が、もしかしたらかつての紅海を渡ったイスラエルの民の体験と重ねられているのではないだろうかということや、イエスがどうしてあそこまでして落ち着き払っている様子を示そうとしているのか、さらにはイエスと共にあるなら、「向こう岸」に渡ることができるということも、その時は理解できていなかったわけです。

この記事を書いたのはマルコ福音記者です。他にもマタイとルカも同じ記事を取りあげています。皆さんも今年の黙想会で理解するように、マルコはパウロの第1回宣教旅行で活動に同行し、のちには別行動を取ることになりましたが、それでもパウロやバルナバに認められていた人物でした。

マルコはふり返ってみて、12人の弟子たちが体験した湖を渡る出来事はイエスに絶対の信頼を置くように促す意味深い出来事だったことを物語の中に込めようとしたのです。しかも、旧約聖書のエジプト脱出の出来事を意識しながら物語を描いている節があるのです。

モーセと共に、かつてイスラエルの民は紅海を渡ったじゃないか。イエスと共に、嵐の湖を渡ったじゃないか。わたしたちの舟である教会も、イエスと共にあるなら、どんな嵐でも渡っていけるはずだ。そんなことがこの物語には込められているのではないのでしょうか。

今年、教皇さまの願いで、「司祭年」が設定されました。もしかしたら今の社会の中であって、教会という舟は転覆寸前なのかも知れません。これまでの常識を根底から揺るがす強風が吹き付けているし、これまで考えることすらしなかった意見や現実が一気に舟の中に流れ込み、水浸しになっています。それなのに、目に見えた動きがないのです。これでは、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言いたくなるのも無理はありません。

けれども、イエスはかつてともそうであったように、今も船と一緒に乗っておられて、揺るぎない態度を保ち続けておられるのだと思います。「黙れ、静まれ」(4・39) とだけ命ずれば、風はやみ、すっかり風になる。弱いわたしたちは、そのことがなかなか信じられないのだと思います。

この「司祭年」という一年、固い信頼をイエスに寄せたいと思います。いつもイエスのほうから「向こう岸に渡ろう」と呼びかけを受けているはずです。もしかしたら今のままの方が楽でいいのかも知れません。けれども、危険があるとしても、イエスはわたしたちに「向こう岸に渡ろう」と促す

のです。

あえて危険を覚悟で向こう岸に渡る経験をしなければ、わたしたちのイエスに対する信頼は深まることできないのかも知れません。何も、絶対というものがない現代だからこそ、イエスへの絶対の信頼がより必要になってきているのではないのでしょうか。

向こう岸に渡れない、さまざまな事情を抱えている人もこの中にいるかも知れません。けれども、向こう岸に渡ろうと決心するとき、必ずイエスがそばにいてくれることを体験できます。なかなかイエスに信頼して生きることを選ばない今の暮らしから、イエスへの信頼を生活の土台にして生きる人間へと渡りきることができるように、お互い恵みを願うことにしましょう。

年間第 13 主日 (マルコ 5:21-43)

年間第 13 主日 (マルコ 5:21-43)

イエスの心に触れる生き方を目指そう

ようやく、賄いさんの退院の目処が付きました。日曜日の昼ご飯を食べたあとに退院だそうです。30 日までは息子さん夫婦の家に寄せてもらって、それから体と相談しながら司祭館の仕事に復帰してくれるようです。やれやれといった感じです。

6 月最後の日曜日は、とても大切な日曜日です。それは、昨年 6 月 29 日（日）から始まった「パウロ年」の閉年を宣言する日曜日だからです。この 1 年間、聖パウロの手紙から多くのことを学び、生活に生かそうと努めてきました。教区内あちこちの地区で聖パウロについての講演会も開かれましたし、わたしたちは小教区の中で「聖パウロの手紙を学ぶ会」を続けてきました。

お知らせしましたように、日曜日の午後 2 時から、浦上教会で「パウロ年の閉年ミサ」がささげられます。参加者と共に、この 1 年取り組んできたことの発表が本部事務局のまとめで披露されます。その中には、馬込教会・大明寺教会が取り組んだ「聖パウロの手紙を学ぶ会」のことが特別に取り上げられるそうです。わたしたちの取り組みが、教区本部の目に留まったということです。

また、参加者のために、記念のメダイが 1000 個用意されていると聞きました。そのようなお楽しみもありますので、ぜひ都合をつけて参加し、パウロ年でいただいた恵みを、教区のみんなと分かち合ってほしいと思います。

では福音の学びに入りましょう。今日の朗読福音は、一部省略することのできる箇所が含まれています。会堂長ヤイロの娘が命の危険にさらされているという物語に、途中 12 年間出血の止まらない女性の物語がサンドイッチのように挟まれています。朗読を省略することもできますが、あえて省略しないで朗読しました。

というのは、今週の朗読の中で、わたしは出血が止まらない女性とイエスとのやりとりがとても興味を引いたからです。「この方の服にでも触れればいやしていただける」（5・28）と固く信じて、「群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた」（5・27）のでした。

イエスは、自分の内から力がでていったことに気づいて、群衆の中でふり返り、「わたしの服に触れたのはだれか」（5・30）と尋ねました。この、イエスが仰った「わたしの服に触れたのはだれか」という言葉に、わたしはぐっと引き込まれました。

イエスが仰った「触れる」という言葉ですが、もちろん服を掴むという意味もあると思いますが、わたしは、「イエスの心の奥に触れる」ということも、言葉の中に含まれているのではないかと思いました。それを他の言葉で言えば、「動かされた」という言葉に近いかも知れません。動かされたという言葉聞いたとき、多くの方は「心が動かされた、感動した」ということを考えるのではないのでしょうか。

「わたしの服に触れたのはだれか。」イエスは、ご自分の心にまで触れる

ような強い決意で近づいてきた女性がいたことを感じ取ったのです。だれかが、イエスの心に触れたのです。

女性は、自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話しました（5・33）。女性はまだイエスの思いを理解していませんでした。ですから恐ろしかったのです。

イエスは、「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

（5・34）と声をかけます。イエスにとって、女性の取った態度は、心にまで触れる感動的な出来事だったのです。心にまで触れる態度を、イエスは押し寄せる群衆を前にして、たたえたのです。

この出来事が、会堂長ヤイロの娘の癒しの間に挟まれました。会堂長ヤイロは、本当は娘の命が心配で、途中で足止めを食うのは不本意だったと思います。けれども、イエスが動いてくださるまではイエスをせかすことはしませんでした。そこには、ヤイロなりの理解の深まりがあったのだと思います。

会堂長ヤイロは、まずイエスにお目にかかったとき、「どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」（5・23）と自分の信仰を表明しました。ただし、このイエスへの信頼は、出血症の女性とのやりとりの間に揺らぎ始めます。本心は、目の前の女性など放っておいて、まっすぐに娘のところに來て欲しかったのです。

けれども、ヤイロの信仰は深まっていきます。会堂長の家から使いの者がやってきて、娘が死んだことを告げました。それでもイエスに「恐れることはない。ただ信じなさい。」（5・36）と言われ、踏みとどまったのです。また進んで、「子供は死んだのではない。眠っているのだ。」（5・39）とイエスが声を上げたとき、人々のあざ笑う声が自分にも向けられていると感じたでしょう。それでもヤイロは、イエスへの信仰に踏みとどまったのです。

実はここに、出血症の女性とのやりとりに共通する部分が隠されています。会堂長ヤイロも、もうイエスについて行けないと思えそうな場面に至っても踏みとどまることで、イエスの心に触れていたのではないのでしょうか。ヤイロの信仰もまた、イエスを感動させるに足る信仰だったのではないのでしょうか。

こうして、両方の奇跡物語は1つのしるしとして示されていることが分かります。それは、イエスの心に触れるほどの信仰は、イエスから奇跡すら引き出すということです。

わたしは、今週の福音朗読を分かち合いながらこう考えました。イエスは、今もわたしたちに呼びかけているのではないか、ということです。「わたしの服に触れたのはだれか。」イエスの服に触れ、イエスの心に触れるほどの信仰の持ち主はどこにいるか。そのようにイエスは問いかけているのではないのでしょうか。

どんなに小さな隣人愛でも、イエスの心に触れるほどの隣人愛である可能性があります。わたしは気づいていなくても、これまでおさげしてきたこと、これまでにゆるしてあげたこと、これまでの働きで力になってくれたこと、これらがイエスの心に触れている可能性があると思うのです。

「わたしの服に触れたのはだれか。」あなたが知らないところで、イエス

はあなたの隠れた行いを高く評価してくれているかも知れません。

年間第 14 主日 (マルコ 6:1-6)

年間第 14 主日 (マルコ 6:1-6)

イエスの全能の力を妨げない生き方をする

7月3日、使徒聖トマスの霊名の祝日を迎えて、今日日曜日に、わたしの霊名の祝いのため、信徒一同でミサの依頼をしていただきました。感謝申し上げます。ここに置かせてもらえる喜びを感じながら、精一杯奉仕したいと思っています。

今日の説教は、福音の学びから入って、司祭年を意識しながら話してみたいと思います。まず、今日の朗読箇所はどこに注目してみたかということから話に入りましょう。今年、わたしが注目したのは、出来事の最終場面に当たる場所です。6章5節「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった」という部分です。

わたしたちは、神について次のように学んだはずですが。「神にできないことはありますか」「神にできないことは何一つありません。これを、神の『全能』と言います。」皆さん間違いなく知っている教えです。

確かに「神の全能」について習いましたが、今日のイエスさまはその「全能の神」という姿に当てはまっていないのではないのでしょうか。「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった。」わたしたちが理解している神の姿を現していないような気がします。

では、奇跡がおできにならなかったことと、神の全能の力とは、矛盾するのでしょうか。この点を今週の朗読箇所から今年は考えてみたいと思っています。結論から言うと、奇跡がおできにならなかったという事例があっても、神の全能の力は衰えたり曇ったりするものではないということです。2つの方向から考えてみたいと思います。まず、神の子イエス・キリストの全能の力は、地上でもまったく変わりがないことを確認しましょう。同じマルコ福音書の第9章には、「汚れた霊に取りつかれた子をいやす」奇跡が取り上げられていて、父親がイエスに「霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」(9・22)と話し掛けました。それに対してイエスは、「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」(9・23)とはっきり伝えます。そしてその父親もすぐに叫んで、「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」(9・24)と答える場面がありました。イエスはここではっきりと、「信じる者には何でもできる」ときっぱり答えているのです。

一方で、事態が避けられない場面もわたしたちは思い出すことができます。イエスの受難とご死去が近づいている中で、ペトロの離反を予告した時、ペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」(14・29)と言います。それにもかかわらずイエスは「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」(14・30)と明言するのでした。

「ペトロは力を込めて言い張った」ようです。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」（14・31）実際は、出来事はイエスの予告通りに進んでいきました。

この場面で、イエスがペトロを無理矢理裏切らないように金縛りに遭わせるとか、そういうことができたかどうかと考えると、おそらくそういうことを望めばできたのだろうと思います。けれども、神は人間の意志を踏みつけてまで、何かをなさったりはしないわけです。おできになるかどうか、神の全能を問うならば、ペトロに絶対裏切らせないように、ペトロの意志を押さえつけてしまうことも可能だったでしょう。けれども、神はたとえ全能であっても、人間の意志を踏みつけたりはしないのです。

同じことは、イスカリオテのユダに対しても当てはまります。ユダは、祭司長たちのところへ行き、イエスを引き渡す手引きをしました。「あの男をあなたたちに引き渡せば、幾らくれますか」（26・15）。

もしイエスが無理矢理イスカリオテのユダの計画を押さえつけようとするなら、それも可能だったかも知れません。けれども、神は人間の意志を踏みつけてまで何かをなさろうとはしないのです。たとえそれが、悪意のある計画であっても、人間が自分の意志で選んだことを、踏み越えて押さえつけたりはしないのです。

ここまで、2つの事例を取り上げました。イエスは、ご自分が全能の神であることをよくご存知です。「信じる者には何でもできる」と仰っています。一方で、人間の意志を尊重して、踏みつけることはしません。この両方の姿を頭に置いてもう一度今週の朗読を考えると、起こっている出来事が理解できるようになるでしょう。イエスは奇跡を行う全能の力を持てられますが、人々が不信仰に留まるなら、その思いを踏みつけてまで奇跡を行うことはしないのです。

人々が奇跡を信じなくても、無理矢理奇跡を起こしてやるんだと、そういう態度は取らないのです。これが、「ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった」という部分です。

全能の力を神がお持ちであっても、人間の意志が神の働きを拒み、受け入れないなら、全能の力は示されないということになります。これは、人間の責任を問う大切な問題です。神には不可能がないのに、人間が神の全能の力を妨げるつまづきとなり得るということなのです。

そこで中田神父は振り返って考えるのです。イエスは、わたしの上にも全能の力を発揮することがおできになるわけですが、わたしがイエスの邪魔になって、例えば奇跡をおできにならないことが起こっているのではないか。「わたしはあなたを裏切ります」と意思表示したために、イエスのなさりたいことの妨げになる場面があったのではないか。そう思う時、わたしの責任は重大であると感じたのです。

たとえ、事が小さい場合でも、同じようなケースは起こりうるのではないのでしょうか。イエスがわたしを通して、だれかに手を差し伸べようとしている。だれかの叫びを拾ってあげようと考えている。それなのに、「わたしはあなたに協力しません」と意思表示をしたために、イエスのわざがお

できにならないままになっている。しばしばそのような形で、神の全能の力に、わたしが躓きの石となっているのではないだろうか。司祭年を過ごす中で、まず最初に振り返りたい部分だなあと思いました。

もちろん、わたしの反省として申し上げたことは、皆さんも、お一人お一人自分に当てはめて考えていただきたいのです。「そこでは、ごくわずかの病人に手を置いていやされただけで、そのほかは何も奇跡を行うことがおできにならなかった」。このような結果が生じてしまうのは、わたしたちに原因がある可能性があります。

今イエスが、わたしたちの中で神の偉大なわざを行おうとしているかも知れない。それなのに、おできにならないとしたら、責任は重大なのではないでしょうか。今の時代に、もっとイエスの働きが十分に発揮されるために、わたしたちはイエスに大きな信頼を寄せて生きていく必要があるのだと思います。

年間第 15 主日 (マルコ 6:7-13)

年間第 15 主日 (マルコ 6:7-13)

イエスは二人一組での宣教を考えておられた

「(イエスは) 十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。」(6・7) 今週の福音朗読の最初の部分です。イエスが弟子たちを二人一組にして派遣する様子をあれこれ思い巡らしてみました。わたしなりに考えたことを、皆さんと今週分かち合いたいと思います。まず、二人一組にして送り出すことにした理由を考えてみました。一人で出かけて行きなさいと命ずることもできたはずですが。テレビの旅番組でも、その土地土地を一人でぶらり旅する番組は成り立ちます。自分一人の力で必要なことに対処しながら、いろんなことを吸収することも可能でしょう。

けれどもイエスは、あくまで二人一組での宣教を考えていたようです。きっと、一人で出かけるよりもはるかに良い面があると考えていたのでしょう。わたしなりにそれを考えると、二人で力を合わせることは、効果的に、効率よく働くことに貢献するのだと思います。

二人いますから、そこには話し合いが当然生まれるでしょう。どのような方針で活動していこうか。二人の役割分担はどのようにしようか。日常の細々したことはどのように分担するか。こうしたことを最初に話し合うかも知れません。

また、二人一緒にいるのですから、二人とも同じ事をしなくてもよいわけです。つまり、二人とも街角に出て話し掛けをしなくても、一方が街角で話し、他方は人が集まりやすい他の場所を探しに行くということも考えられます。あるいは、街角で一方が話し掛けるのを他方がみんなと一緒に聞いてみて、もっと工夫できることや、良かった点を見つけてもらうということもできます。

二人でいれば、二人ともいつも元気はつらつというわけにもいかないでしょう。一方が疲れて意欲を失いかけてたりするときに、他方が励ますこともできますし、もし一方が倒れてしまったときにも、他方が助けてあげることできます。どちらかが弱っているときには、二人一組で出掛けしていることは大きな慰めになることでしょう。

福岡の大神学院時代のことを思い出しました。2年間、二人部屋で勉強しました。福岡の大神学院には8年間お世話になりましたが、最初の2年間は大部屋で共同生活していました。3年目と4年目が、二人部屋の生活でした。3年目は同級生、4年目別の同級生と暮らしました。

うまく説明できるか分かりませんが、一つの部屋を二人で分けています。朝起きるときから、夜寝るときまで、授業の教室に行くときや、祈りのために聖堂に入るとき、食事のために食堂に行くとき以外は、一緒に暮らしているわけです。

わたしが相部屋だった二人は、それぞれ福岡教区と大分教区で司祭になっています。今ふり返ると、わたしはルームメイトとして、どんな風に受け止められていたのだろうかとても気になります。わたしが

勉強しているとき、反対に勉強していないとき、わたしが休憩したり、ゴロゴロ横になっていたり、勉強以外の過ごし方をしているとき、相手の人はどう思っていたらうか。考えてみると今の今まで全くふり返ったことがありませんでした。

相手にとって、やる気を起こさせる存在になっていたらうか。大きなストレスを与える存在だったのではないだらうか。今考えてみるとそんなことも気にしないで当時過ごしていたとしたら、相手にとって相当わがまま勝手に人のことも気にしない奴だと思われていたかもしれませぬ。申し訳なかつたなあという気がしてきました。

わたし自身ふり返ってそのようなことを感じましたが、イエスが一組にしたコンビというのは、どんな組み合わせだったのでしょうか。わたしだったら、どういう組み合わせにするだらうか。まずはそのことを考えてみました。

わたしだったら、当然「気の合う人を二人一組にする」ことを考えるでしょう。そのほうが、互いの力を引き出す刺激になるだらうと思うからです。けれども、もう少し考えると、別の方法もあることが分かります。つまり、「正反対の者同士を組み合わせる」という方法もあります。

お互い水と油、一生懸命努力するタイプと、努力しているのを表に出したがないタイプがいます。汗をかいて努力するのが格好悪いと思っている人と、汗水流して努力することが尊いと思っている人が一緒になると、おそらく最初はうまくいかないだらうと思うのです。

または、せっかちな人とのんびりした人を組み合わせても、予想外のことが起こることでしょう。さらに正反対は、性格や気質ではありません。若手と年長者を組み合わせると、若手に刺激されて年長者が力を出します。年長者の知恵を若手が学びます。そのような正反対も、弟子の組み合わせにはあつたかも知れませぬ。

けれども、イエスから派遣された弟子たちの目的は皆同じです。「出掛けていって悔い改めのための宣教をすること」この一点です。正反対の二人を組にして派遣した班があつたとしたら、最初は意見が合わずに対立しても、きつと折り合いをつけて、気の合う組み合わせの班よりももっと努力をしてくれるかも知れませぬ。

イエスは、ご自分の考えのもとに、二人一組のいろんな組み合わせを考えられたのだらうなあと思います。6通りの組み合わせが出来上がったわけですが、その6組はイエスに対して直接間接のいろんな収穫をもたらしてくれたのではないのでしょうか。十二人の弟子の中には、二組の兄弟も含まれていました。兄弟で二人一組だったのか、それとも別の人と組み合わせたのかなど、誰と誰をコンビに指名したのか、とても興味深いなあと思いました。

最後に、わたしたちのことを考えてみましょう。わたしたちもある意味で、この社会に対して神から派遣された人間です。ある時代に、ある地域で、ある一定の条件の下に生きています。一人で生きていると思っている人もいるかも知れませぬが、いろんな組み合わせのもとにわたしたちは置かれているのではないのでしょうか。

夫婦として、二人一組の生き方を与えられた人もいるかも知れませぬ。

あるいはずっと関わる家族の中で、組み合わせを与えられた人もいるかも知れません。また、一生涯同じ生き方をする人たちは、その生き方の中での組み合わせに置かれていると言えます。いくらどのように考えても、自分は一人きりだと感じる人であっても、その人は、イエス・キリストと二人一組で、社会の中に遣わされているのです。

自分が置かれている二人一組の組み合わせの中で、わたしはどんな役割を果たしているのでしょうか。あるいは、どんなことで力になれずにいるのでしょうか。相方がいることを、どれくらい意識しているのでしょうか。相方がどう思っているか、ときどき考えることはあるのでしょうか。

福音朗読のちょっとした部分を拾っての分かち合いでしたが、わたしたちがあらためて考え直すような材料が見つかったなら幸いです。ぜひ、神さまの練りに練られた二人一組の生き方を、十分に思い巡らして、新たな気持ちでこれからの生活に入ることにいたしましょう。

年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

イエスは適切にふさわしい休みを与える

「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。」(6・31) わたしは、このイエスの言葉が、弟子たちに対する深い思いやりとして映りました。何らかの形で人を雇っている立場にある人々にとって、示唆に富んだ態度だなあと考えたのです。

イエスが弟子たちに「休みなさい」と言っている今週の朗読箇所は、間違いなく何度も私の目に留まったはずですが、聖書をぼちぼち読み続けている中でも、また福音書の学びの中でも、そして少なくとも、この箇所を日曜日の福音朗読で、読んでいたわけですが、主任司祭として人を雇ったり、協力者を自分で募る立場になるまで、弟子たちに配慮するイエスの姿はわたしの目の前を通り過ぎてしまっていたなあと気づいたのです。

一歩目の気づきは確かにありましたが、今もって、わたしは雇っている人々にとって優れた雇い主ではないと思います。また、協力者を募って協力してもらっていますが、協力者に対して優れた上司ではないと痛感します。その原因は、人が人のために働いているということ、まだ十分に理解していないからです。

わたしも、2人の主任司祭のもとで教会の務めを学びました。協力者にどのように接するかも見て学びました。当時は20代後半からようやく30代に入るといって本当に若い時期でしたので、人が人のもとで働いていることについてそれほど理解があったとは言えないと思います。

その一方で、ある部分では雇われている身でもあります。主任司祭ではあっても、任地を決めるのは常に大司教さまです。大司教さまの任命を受けて、任命された場所で務めを果たしていきます。その意味では、雇われている人の気持ちも前よりは考えるようになりまし、大司教さまがどんな気持ちで任地を決めて、わたしたちを働かせているのかなあとということも考えるようになりまし。

そこであらためて、イエスが弟子たちにかけた言葉を思い返すのです。

「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。」わたしは、イエスのような配慮を、雇っている人に持っているのだろうか。協力を仰いでいる人に、イエスのような温かい思いやりを掛けているのだろうか。むしろ配慮にも、思いやりにも、足りない面があるのではないかと思うことばかりです。

イエスが弟子たちに言われた「休みなさい」という勧めには、どんな思いが込められていたのでしょうか。イエスは、この場合の「休む」ということを、どのように捉えておられたのでしょうか。まず考えたのは、「次に働くために、十分に準備する」ということです。

イエスは弟子たちを休ませましたが、それは弟子たちが休みの中でしっかり充電して、次の働きのために備えさせるためです。弟子たちが休みのあとに期待されていることははっきりしています。「新たな場所への派遣」です。次の任務に向かう時に、十分に務めを果たすことができるように、今休ませるです。

この点を、自分がイエスに成り代わってできているだろうかと考えました。雇っている人は、これからも教会のために雇ってもらいたいと希望して今雇われているだろうか。それとも、他によい条件がなく、教会の仕事をつなぎでしているのでしょうか。できれば、教会のために働きたいという気持ちになってもらえるよう、育ててあげる必要があります。

また、休みは本来の仕事を見つめ直す大切な時間にもなります。休みのための時間を「レクレーション」と言ったりしますが、この言葉のもとの意味は、「再び・造り上げる」ということです。本来の仕事への姿勢を取り戻すために、休むのです。休みは与えない、働けるだけ働かせる。そんな厳しい雇い主になっていないだろうか。すごく考えさせられました。

子どもたち、また学生たちは、夏休みに入りました。夏休みも、今日のイエスの呼びかけを当てはめて考えることができます。「この夏休み、しばらく休みなさい。」自動的にやってきた休みと取るのではなく、イエスが、休みなさいと言っているのだと考えるわけです。そのことで、休みは次の学期への準備を意識させてくれるし、本来の姿にどのような姿勢で臨むべきかを考えさせてくれるものになるはずです。

思えば、わたしの主任神父さまになってくれた2人の神父さまは、次によく働くために休みを取るということを上手に実行していたと思います。それは先輩主任神父さま自身のためだけではなく、わたしたち後輩にも、何かの手本を残そうとして実践しておられたのではないかなと感じました。イエスは弟子たちにはしっかりした休みを取らせつつ、押し寄せてくる群衆には「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（6・34）となっています。責任者が、態度で弟子たちを教え育てています。しっかり休んだら、わたしがしていることをあなたがたもしなさい。導きが必要な人々がまだまだたくさんいるから、いろいろと教えてあげなさい。そんなふうに、イエスはご自分の働きぶりで教えてくださっています。

わたしたちは皆、イエスから「休みなさい」と声をかけてもらう必要があると思います。イエスがわたしたちにくださる休みの中で、わたしたちは次に備える時間を持ちます。イエスが用意した場所で休むなら、その休みは本来の姿にどのように向き合うべきかを考える良い機会になるはずです。もっと、雇われている人の気持ちを考えて、「休みなさい」と声を掛けてあげられる人でありたいと思いました。そして、休みから帰ってきたら、また気持ちを込めて働く人へと育ててあげる必要もあると感じました。イエスの一つの呼びかけにヒントを得て、求められている姿に自分を向けていきたいと強く願った福音朗読となりました。

年間第 17 主日 (ヨハネ 6:24-35)

年間第 17 主日 (ヨハネ 6:1-15)

主よあなたが解決してくださると信じます

今週は、「五千人に食べ物を与える」という奇跡の物語で、四つの福音書が（マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ）ともに出来事を残しているわけですが、他の三つの福音書（「共観福音書」と呼びます）の書き方とはっきり違いを見せています。共観福音書では、パンの奇跡が行われた場所は「人里離れた場所」とされていますが、ヨハネは出来事が山でおこなわれたとしています。

この「山」という表現ですが、稲佐山だったのか、岩屋山だったのかという細かい話は問題ではなくて、かつて山で行われた出来事と、今回の出来事を重ねて考えてみなさいと言いたくて、「山」という場所を用いているようです。

では、「かつて山で行われた偉大な出来事」とは何でしょう。イスラエル人が真っ先に考えるのは「十戒の出来事」でしょう。神はモーセを通じてイスラエルの民に十戒を授けました。民はこれを守り、それによって神が民を守り、救うというものです。

ですから、イエスが五千人に食べ物を与えるという奇跡を「山」でおこなったという書き方をヨハネがしているのは、かつての山での出来事を思い出しなさい。神が十戒を与えて民を守り、救うしるしを与えたように、今イエスも、あなたたちを守り、救うしるしとしてパンを与えているのですよと言いたいのです。

ヨハネが描くパンの奇跡、共観福音書に見られないもう一つの特徴は、この出来事を「しるし」として示している点です。出来事の結末に目を向けて欲しいのですが、「イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。」（6・15）とあります。群衆は明らかに「しるし」を見誤ってしまったのです。パンを食べさせてくれたのは、かつて十戒を授けてくれた神にわたしたちの目を向かわせようとしているのだと気づくべきです。イエスもまた、神の子としてわたしたちの救いのためにこの偉大な出来事をなさったのだと気づいて、神をたたえるべきだったのです。

ところが、群衆が取った行動は、イエスをこの世の王に仕立てようとする態度でした。この世の王は、人々を支配する存在です。救いを与えるのではなく、支配のもとに人々を置くに過ぎません。支配ではなく、神に守られ、愛されている喜びを持ちながら生きるために、奇跡をしるしとして用いたのです。しるしとしての何かが必要だったのですから、パンの奇跡でなくても、他の奇跡でもよかったかも知れません。

さて、このようなヨハネの理解を踏まえて、パンの奇跡の出来事をふり返ってみましょう。イエスは、フィリポに尋ねます。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか。」（6・5）イエスはひとまずそばにいた弟子に尋ねています。弟子に何かを気づかせるためにほかなりません。

自分たちが山に来ているということや、パンを買って用意するには絶望的

な状況であること、それなのにイエスが自分に「どこでパンを買えばよいだろうか」と、解決策があることを前提に尋ねていることなど、たくさんの方に気づいてほしいと願っていたのだと思います。

フィリポは置かれている状況が絶望的であることには気づいたようです。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう。」(6・7) シモン・ペトロの兄弟アンデレも、何かはあるけれども、何かがあるだけで何の役にも立たないだろうと決めてかかっています。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」(6・10)

この状況は、きっとわたしたちの状況を指しているのだと思います。わたしたちも、イエスからなぞかけをされたときに、ある部分については把握できているのですが、大事な部分に気づくことができないのです。状況は絶望的で、わずかに何かがあるけれどもそれは何の役にも立たない。そうとしか考えることができないのです。

そこへ、イエスは見落としている大切なことを指摘します。絶望的な状況だけでも、わたしがそばにいるのを忘れてはいないか。何の役にも立たないくらいしか手持ちがないけれども、その役に立たないほどわずかのものを活かすことのできるわたしがいるではないか。そのことをイエスは、当時の弟子たちにも、わたしたちにも言いたいのではないのでしょうか。わたし個人を考えてみても、八方ふさがりの中でなげやりな気持ちになることが繰り返し起こります。今日は26日で今月もあと残りわずかになっています。先週の金曜日締め切りという、とある原稿がありましたが、20日過ぎまでわたしの中で何を探してもどう思い返してもネタが見つからない状況でした。

そうなれば誰かと出会って、その出会いの中で何か発見でもあればよいのですが、この伊王島では誰かと出会うといってもたかが知れています。そう思っていましたら、1人の婦人の方から声を掛けてもらいまして、その時話したわずか2・3分の会話でパッとひらめき、締め切り間に原稿を提出することができたのです。

状況はもう絶望的でした。何かがあると言っても、何の役にも立たないほどしかありませんでした。その時、わたしはイエスがそばにいてくれることを全く考えに入れてなかったのです。まさに、イエスはもう絶対ダメ、どうにもならないという場面で、ご自分がそばにいることを力強く示してくださったのだと思います。

食べ物がないで困っている人を全員食べさせるためにイエスさまがおられるわけではありません。全く希望のないところに、希望を与えるしるしとして、イエスはおられます。全員食べさせるのは、国の仕事、国連の仕事です。そうではなく、こんなものがあっても役に立たない、こんな人材不足では何もできないと嘆いているところに希望を与えるために、イエスはしるしとしておられるということです。

わたしたちは、イエスが示す奇跡をきちんとしるしとして読んでいるでしょうか。わたしが抱えていた絶望的な気分は、イエスがそばにいることを忘れていたことで生じていたのではないのでしょうか。イエスは今も、わたしたちに「この絶望的な状況を、どうしたら打開できるだろうか」となぞ

かけをしているのではないかと考えています。
それに対して「もちろん、あなたがそばにいてくだされば、きっと解決できます」と答える準備をしておきましょう。その答えを、イエスは今か今かと待っておられるのではないのでしょうか。

年間第 18 主日 (ヨハネ 6:24-35)

年間第 18 主日 (ヨハネ 6:24-35)

イエスが見ているものを見る目を養う

ここ数ヶ月で、わたしの目に明らかな変化が生じ始めました。いろんな兆候はあったのです。一例を挙げますと、時計を外して、裏に刻まれている文字を見ようとしても、まったく見えないのです。焦点を合わせることができず、メガネを外してみると、何とか読み取れるようになりました。その瞬間、「ううっ！」と思ったのです。近視のメガネを外して文字が見えるようになったのですから、明らかにこれは老眼です。ガックリきました。メガネを外して物を見ている人は自分とは違う世界の人たちだと思っていましたが、とうとうその仲間入りをすることになりました。

あまり認めたくはなかったのですが、どうしても今までの近視のメガネでは調節できない部分が出てきたので、夢彩都にある眼鏡屋さんに行って相談しました。レンズをいろいろ組み合わせて最適のレンズを提案してくれるわけですが、「この状態に、1枚加えてみます。どうですか？」

「よく見えます。」「あー、今1枚加えたのは老眼のレンズです。お客さま、43歳ですよ。私も、43歳から遠近両用のメガネを使い始めました。思い切って、使い始めることも1つの手です。」「じゃあそうします。」まあそういうことで、今週からそういうレンズの入ったメガネを掛けています。「そういうレンズって、遠近両用のレンズってこと？」とか言わないの。

今この状態では、近くも遠くもかなりよく見えています。よく見えるようになってみると、見えてなかったんだなあということもよく分かります。何が見えてなかったか。それは、今までとは違う助けをもらわなければ、今までのことができなくなってきたという事実です。

もちろん、近視のメガネを外せば、近くのものは見えていました。けれども、そういう状態でしばらく過ごしても、自分が遠近両用の補助が必要だとは分かっていなかったのです。遠近両用の補助を得て初めて、「あー、遠近両用が必要になっていたんだなあ」と分かったということです。

この体験は、今日の福音朗読箇所を考えるのに役立ちました。イエスと群衆のやりとりで、群衆にイエスの指し示したものが全く見えていないことが明らかになります。群衆はイエスと弟子たちを追いかけました。

そして追いついたのですが、イエスは群衆に釘を刺します。「あなたがたがわたしを探しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」(6・26) イエスと五千人の群衆の間で、パンの奇跡が行われました。パンの奇跡の中でイエスが示そうとしたのは民を養う神としてのご自分でした。ところが、群衆がパンの奇跡の中に見たものはパンだったのです。

イエスはパンの奇跡ではっきりと「わたしが示そうとしている物を見なさい。わたしが伝えたいことに気づきなさい」と促していました。この部分を、わたしたちは自分の生活の中に見る必要があります。わたしたちは目の前で起こっていることに何を見ているのでしょうか。それが今日の説教の中心部分です。

いちばんまずい状態について触れておきます。福音朗読のいちばん最後の部分です。「彼らが『主よ、そのパンをいつもわたしたちにください。』と言うと、イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとの来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」（6・34-35）

群衆は、自分たちに命を与えてくれるまことの食べ物、イエス・キリストなのだととうとう気づきませんでした。群衆はイエスのそばにしながら、イエスからいちばん遠い考えをしていたのです。

さて、わたしたちはどうでしょうか。身近な出来事の中で、イエスがわたしたちに分からせようとしていることに目が向いているのでしょうか。具体例を挙げて考えてみます。7月1日は188福者の列福記念日になっていました。何人かの人は、「そうだった。7月1日は福者の記念日だった」と思い出したことでしょう。思い出し、その日にミサに参加した人もいると思います。

7月1日（水）に、ミサに参加しなかったとしても、思い出して何かの行動を起こした人はいるのでしょうか。残念ながら行動を起こすこともしなかったという人もいるかも知れません。ここまででわたしが言いたいことは、「列福式で福者が与えられましたが、わたしたちはその時に何を見たのでしょうか」ということです。

一年経ってみて、列福式はわたしたちに何を示してくれたのでしょうか。鳩が飛んだのがあなたの目に焼き付いているのでしょうか。大きな福者の絵が掲げられていました。あの絵が、あなたの中に焼き付いたのでしょうか。それとも、真っ赤な祭服を着たたくさんの聖職者たちの姿が、最後に残ったのでしょうか。

わたしは、今並べたようなことは、いつか忘れられてしまうだろうと思います。ヨハネ・パウロ二世教皇さまがおいでになったとき、ミサは何色の祭服だったのでしょうか。松山競技場でのミサの時、出し物として鳩は飛んだのでしょうか。それらのことを、25年以上経ってみると、どうだったかなあと思っているわけです。ただ一つ、寒かったことだけが印象に残っています。

そのたった一つの思い出が、わたしたちは問われているのです。教皇さまは、わたしたち日本のキリスト信者の中をかけがえのない良い物があることを気づかせるために、日本にやってきたのです。それは、司祭がいない迫害の時代にも、失わなかった信仰です。この信仰を見直してもらうために、教皇さまは来たのです。

250年もの間変わらなかった信仰は、188殉教者の中にあります。信仰とこの世の宝とを、交換することはできないと言って、信仰のためにこの世の命を手放しました。絶対に譲れないものは何かを知っていたのです。福者になった188殉教者たちは、迫害の中に、決して失われないイエス・キリストという宝を見ていたのです。パンの奇跡でパンを見ていたのではなく、パンの奇跡の中にイエス・キリストを見つけたのです。

わたしは、ヨハネ・パウロ二世教皇さまが来日して教えてくれたことは、わたしたちが持っている信仰が、迫害の中でも、信仰があまり大切にされない今の時代の中でも、決して譲れないものですよと教えてくださったと思っています。

教皇さまがおいでになったときも、188 殉教者の列福式の時も、大変厳しい天気でした。皆さんの中にはそのことが忘れられないかも知れません。あるいは、どちらの時もたくさんの聖職者を見たかも知れません。けれども、これらのことはイエスさまが見ているものとは違うと思うのです。教皇さまがおいでになった時にイエスさまが示そうとしたことも、列福式を通してイエスさまが示そうとしたことも、実は同じだと思っています。それは、「あなたに注がれた洗礼の恵みは、決して譲ることのできないものなのですよ」ということです。今週の福音朗読を通して、「イエスが見ているものを見る目を養おう」と決意しましょう。イエスが見ているものを見ていなければ、わたしたちの目は今もピンぼけしているのと同じだと思います。

年間第 19 主日(ヨハネ 6:41-51)

年間第 19 主日 (ヨハネ 6:41-51)

イエスのみことばに固く留まる

今年の年間第 19 主日は、8 月 9 日は、長崎原爆の日と重なりました。わたしよりも皆さんのほうが詳しいのですが、原子爆弾の投下によって、たくさんの方が亡くなりました。

1 つの話をわたしは聞いております。爆心地にいちばん近かった浦上教会ではこの日ゆるしの秘跡が行われていました。お祝い日前の告白、すなわち 8 月 15 日聖母の被昇天の祭日を迎えるためにゆるしの秘跡の場を設けていたのです。

浦上教会に籍のあるカトリック信者は当時 1 万 2 千人いました。そのうち 8 千人が、瞬時に亡くなったと言われています。さらにその中の何百人かが、浦上教会に集まってゆるしの秘跡を受けていたのです。

福音朗読に入りましょう。今日の朗読箇所は、始めと終わりを同じ言葉で挟んでいます。「わたしは天から降って来たパンである。」(6・41、また 6・51) ヨハネは、このような強調のしかたで、イエスがどのような方であるか考えさせようとしています。天から降って来たパンであるイエスにつながるものが、本当に生きるということなのだと思わせたいのです。浦上教会で原爆投下の瞬間ゆるしの秘跡が行われていたことを話しましたが、当然ゆるしの秘跡を受けるために集まっていた人々は、聖母の被昇天の日にミサにあずかり、聖体を拝領するための準備をしていたわけです。そう考えると浦上教会の人々は、「天から降って来たパン」であるイエスに近づこうとしていた人々だとはっきり言うことができます。言い換えると、この人たちは、イエスが言われたみことばを十分理解していたということです。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」(6・51)

長崎の空に落ちた一発の原子爆弾で、たくさんの方の命が奪われました。命は取り戻すことはできませんが、その人々の中に、他の人々とは明らかに違った行動を取って、命を奪われた人々がいたのです。

それは、教会に行って聖母の被昇天の祭日のために心の準備をしていた人々のことです。この人々は、どんな困難があろうとも、教会に行ってゆるしの秘跡を受けたかった人々でした。イエスが言われた「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」というみことばに全幅の信頼を置いていた人々が、当時の 8 月 9 日、長崎の 1 つの教会に集っていたのです。

わたしは、あの日浦上教会でのゆるしの秘跡にあずかりに行った人々の生き方は、決して滅びない生き方だと思います。体の命は奪われるかも知れませんが、けれども、どんな恐怖も、どんな脅しも、浦上教会に行く人々の足を止めることはできませんでした。それはすなわち、「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」とのみことばに信頼を置く生き方は決して滅ぼすことはできないと、証しをしてくれたのだと思うのです。

そこで、わたしは 2 つのことを考えました。1 つは、自分自身の生き方です。わたしは、イエスのみことばに絶対の信頼を置いて生きているだろう

かと考えました。まず心に浮かんだのは、病人訪問の場面でした。病人の部屋に行くと、まず回心の祈りを唱えて、次に福音書の一節を読み、主の祈りを唱えてから聖体を拝領します。福音書の一節に、わたしはよく今日の箇所、それも終わりの部分を選んで朗読しています。

福音書の一節を読む時は、「イエスは言われた」と前置きしてから朗読をしていますが、「わたしは、命のパンである」(6・48)と朗読しながら、わたしの中で、「確かにそうだ。命のパンであるイエスに、わたしは活かされて生きている。これは疑いようがない。」そんな気持ちで聖体拝領する病人のために朗読をしてあげているのだろうか。あらためて考えてみたのです。

また、自分自身の反省として次のことも浮かんできます。「イエスは、命のパンである。」この確信がわたしにあるのであれば、わたしは本当に生き生きと日々を暮らしているだろうか。命のパンをいただく、それも、ほとんど例外なく毎日いただいているながら、わたしの生活は生き生きとしたものになっているだろうか。実感があれば問題ありませんが、迷いがあるとすれば、なぜなのか。考えさせられたのです。

2つめとして、イエスのみことばには違う形での呼びかけもあると感じます。それは、「わたしたち・共同体として、社会に対してイエスのみことばに絶対の信頼を置いて生きているだろうか」ということです。浦上教会で、ゆるしの秘跡を受けようとしていた人々は、あの日の午前中、防空壕にも留まらず、畑にも行かず、工場にも行かず、教会に行ったのです。

行くことのできた場所がいろいろあった中で、1つだけ選んだのが教会に行ってゆるしの秘跡を受けることでした。6日後、聖母の被昇天にミサにあずかり、聖体を拝領することを思い描いて、あの日教会に行ったのです。それは、社会に対して、イエスのみことばに絶対の信頼を置いて生きているという証しになりました。

1人では大きな証しを立てることはできなかったかも知れません。けれども浦上の人々は大勢で、おそらく何百人単位で、社会に対して証しを立てたのです。「イエスは命のパンです。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きるのです」と証しを立てたのだと思います。

社会に対して証しを立てるためには、キリスト信者すべての協力が必要です。キリスト信者のだれもが、命のパンであるイエスをいただいて生きていることを、右にも左にもそれずに証しをする必要があります。

「だれそれさんは確かにイエスを必要としている人だが、別のあの人はキリスト信者だけれどもイエスを必要としていないじゃないか。」そう反論されないように、社会に対して力強い証しになるように、答える必要があります。皆が「わたしは、天から降って来た生きたパンである」とのみことばに「アーメン。その通りです」と答える必要があると思います。

「わたしは天から降って来た生きたパンである。」命の危険を冒しても、大胆に社会に対して証しをした時代があり、証しをした瞬間がありました。わたしたちも、イエスのみことばに生きている、自分を生かし、世を生かすイエスのみことばに生きていると、いつでも証しができるように日々を調えましょう。

聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

賛美を受け継いで証しをしよう

聖母の被昇天の祭日を迎えました。マリアが胎内の子を身ごもったと知り、先に身重になっていたエリザベットにあいさつに行く様子が描かれています。今年は、エリザベットがマリアに語ったことばを鍵にして、朗読箇所を読み進めていきたいと思います。

エリザベットはマリアの訪問を最大限の賛美で迎えました。「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。」(1・43)そして、主が2人に目を留め、2人のために偉大な働きをしてくださったことをたたえます。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、何と幸いでしょう。」(1・44)

わたしはこの、エリザベットの最後のことばがとても心を打ちました。マリアとエリザベットの2人こそ、このことばにふさわしい人物です。「主がおっしゃったことは必ず実現する。」堅くこのことを信じた偉大な女性だったと思います。

さらに、このことばは旧約の人物をも思い出させます。アブラハムは、子どもに恵まれない時期に、主を信じて息子イサクを与えられました。ノアは、洪水が起こることをだれも信じていない時に主に命じられたとおりに準備して、命を救われました。モーセは、エジプトの軍隊がイスラエルの民を紅海まで追ってきて、絶体絶命のときに主を信じて民を無事に渡らせました。

マリアの心にも、エリザベットの確信に満ちたことばは届いたことでしょう。マリアが続けて声を上げた賛美には、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた人は幸い」という思いが、賛美の全体に行き渡っているからです。

エリザベットの確信がマリアの賛美ににじみ出ています。いくつか拾ってみましょう。「今から後、いつの世の人でもわたしを幸いな者と言うでしょう。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」(1・48-49)「身分の低い者を高く上げ(てくださる)」(1・52)「その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません。」(1・54)主がおっしゃったことは必ず実現する、そのとおりになる。マリアもまた、実感があったのです。

では、出来事が起こった時よりも後の時代の人々にとって、エリザベットとマリアの体験はどのような意味があるのでしょうか。マリアの次の言葉に注目しましょう。「今から後、いつの世の人でもわたしを幸いな者と言うでしょう。」マリアははっきりと、「後の人々、いつの世の人でも」と言っています。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた人は幸い」という思いが後の人々にも受け継がれ、たたえられることになると言うのです。実際に、マリアの思いは受け継がれているのでしょうか。2000年経った今でも、マリアとエリザベットの確信は正しいと証明されているのでしょうか。間違いなく、マリアの思いは受け継がれ、今の時代にあっても「主がおっしゃったことは必ず実現する」と証明できます。

そこで、今日は8月15日、終戦の日でもありますので、戦争に関わる歴史の中で、例を挙げたいと思います。長崎にやってきた修道会の司祭に、マキシミリアノ・マリア・コルベという司祭がいます。彼はヨハネ・パウロ2世の在世中に聖人となりました。

コルベ神父の最後は、皆さんもある程度はご存知でしょう。ナチスによって強制収容所に連れて行かれ、脱走者が出たことで見せしめで殺される人が10人選ばれた時に、1人の人の身代わりを申し出ました。

彼は、死にたくないと言って憐れみを乞うていた人の身代わりになっただけではなく、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」（ヨハネ 11・25）というイエスのみことばに絶対の信頼を置いていることを証ししたのです。希望のない強制収容所の中で、「主がおっしゃったことは必ず実現する」という希望を生き抜いたのです。みごとに、現代にあってマリアとエリザベトの確信を受け継ぎ、証ししていると思います。

同じく、強制収容所の中で、ガス室で処刑された別の修道女がいます。エディットシュタインというカルメル会の修道女です。コルベ神父はポーランド人で迫害を受けましたが、エディットシュタインはユダヤ人だったことでナチスの迫害を受けました。

エディットシュタインには神の不思議な導きがありました。彼女はユダヤ人でしたから、もともとは純粋なユダヤ教徒でした。けれども、イエス・キリストの中に真理を見だし、キリスト教に改宗し、さらにカルメル会修道院という、社会から遠く離れることになる場所に入ったのです。彼女もまた、現代にあってイエスのみことばは必ず実現すると信じ、証しを立てたのです。

60数年前の人々が、過酷な環境の中で立派な証しを立ててくれました。わたしたちは、それに比べればはるかに証しをしやすい環境の中にあります。

「主がおっしゃったことは必ず実現する」と、堂々と宣言できる自由な社会の中に生きています。そこでわたしたちも、マリアとエリザベトに倣い、「主がおっしゃったことは必ず実現する」との思いを証ししたいと思うのです。

ところで、「主がおっしゃったことは必ず実現する」と言っても、具体的な例が思い付かない人もいるかも知れません。何をたとえに引いて、証しをすればよいのでしょうか。2つ、示しておきましょう。1つは、去年の列福式です。188人の殉教者が、神のもとで、幸いな状態に置かれていることを教会は正式に宣言しました。

わたしたちの先祖が、わたしたちの時代に対して、イエス・キリストを信じる者の幸いを証ししてくれました。わたしたちが188福者を堂々と証しするなら、わたしたちもまた「主がおっしゃったことは必ず実現する」と証しをする人の仲間です。

もう1つ考えてみました。8月15日、終戦の日は平和を願う日でもあります。イエスのみことばを信じて生きると、今一度確認するまたとない機会です。そのみことばとは、ヨハネ福音書の一節「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。」（14・27）です。

わたしたちが平和のために力を尽くすなら、イエスが、平和を与えてくださる。この信仰に生きることは、すばらしい証しになると思います。まだ

平和は実現していません。イエスが与える平和は、どのようにしてもたらされるのか分かりません。けれども、「主がおっしゃったことは必ず実現する」と信じて生きるまたとない機会です。

すでに手に入れたもののためではありません。まだ手に入れていないものを、あたかもそれはすでにあるかのように、確信して生きるのです。こうして現代のわたしたちは、聖母被昇天の祭日にマリアとエリザベトの賛美を受け継いで、「主がおっしゃったことは必ず実現する」ことの証し人になります。

年間第 20 主日 (ヨハネ 6:51-58)

年間第 20 主日 (ヨハネ 6:51-58)

パンであるイエスが、今も世を生かしている

今日はまず、実際にあった話から「ことわざ」を1つ思い出してください。ある人がイスラエルとローマ、さらにフランスの聖地巡礼に行きました。わたしもたった1度だけですがイスラエル巡礼に行ったことがありましたので、経験から学んだ簡単な勧めを、巡礼に出発するその人に1つ伝授しました。

「外国に行ったら、絶対に日本の味が恋しくなると思うよ。だから、醤油を、出前のお寿司に付いている小さな醤油差しに入れて、持って行ってね。」するとその人は鼻で笑ってこう言うのです。「あはは。わたしの家庭は昔食べ物に相当苦労してきました。ですから、食べ物が口に合わないとかそういうことで不平不満を言ったりは決してありません。ご心配なく。」そう言って巡礼に出かけました。

その人が巡礼から帰ってきたので、わたしは早速醤油のことを聞きました。「醤油、役に立ったでしょ。」するとその人はこう言ったんです。「すみません。あれだけ言い聞かせてもらっていたのに、醤油差しを持っていかなかったんです。巡礼先では苦労しました。何の味もしない素揚げの魚を食べさせられたり、フランスではフランス料理が出るものだと思っていたら、口に合わない料理を食べさせられたり、おまけに固いフランスパンを思いっきりかじったら、歯が折れてしまったんです。」

そんなこと知ったことかと思いましたが、あれだけ忠告したのに醤油差しを持って行ってなかったんですね。「言うことを聞かずに、現場で苦労させられて身をもって知ること。」こういうのを「ことわざ」で何と言いましたっけ？そうです。「百聞は一見にしかず」と言うんですよ。

今日はこの、「百聞は一見にしかず」を、与えられた朗読箇所から学んでみたいと思っています。イエスは言いました。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」(6・51)

このみことばは、いくら頭で想像しても、理解できるものではありません。つまり、どれだけ言葉で説明を受けても、イエス・キリストを食べる、すなわち聖体を拝領する体験に導かれなければ、その意味を理解することはできないのです。

わたしはこれまでに何度も、初聖体を準備してきた子どもたちが、その小さな手にご聖体をいただき、拝領する様子を見てきました。初聖体式と言ったりしますが、初聖体のために、いつの時代でも、どの教会でも、準備を欠かさずにしてきました。

子どもたちの初聖体の準備は、ほとんどの場合シスター一方が受け持ってくださいますが、シスターの教育が良いのか、聖体の秘跡がそうさせるのか、初聖体を受ける前の子どもと、初聖体後の子どもでは、同じ子どもなのに顔つきが一変するのを見てきました。

お兄ちゃんが初聖体の日を迎えた時、弟がご聖体の味はどんな味なの

かしきりに聞く様子も見たことがあります。わたしはそういう場面に出くわすと、よく「これだけは教えられないと弟に言ってあげなさい」とけしかけることにしています。どんなに言葉で説明しても、聖体を拝領する前と拝領した後の変化を、人に説明するのは難しいのです。まさに、「百聞は一見にしかず」ということなのです。

ところで、この聖体拝領について、もう一つ考えてもらいたい例を話したいと思います。現在福者になっているマザー・テレサは、生前次のようなことを語りました。今から 33 年前、1976 年 12 月シンガポールで「世界宗教者会議」が開かれた時、アジアの色々な宗教の代表者が 200 人程集まり、宗教者の和解について話し合いました。その閉会式にマザー・テレサが招かれて、あいさつをした中で出てきた話です。

「わたしは毎朝、祭壇の上から小さなパンのかけらの主をいただいています。そしてもう一つは、町の巷の中でいただいています。先日町を歩いていると道端の溝に誰かが落ちていました。引き上げてみるとおばあちゃん体はネズミにかじられ意識もありませんでした。それでわたしは体をきれいに拭いてあげました。すると、おばあちゃんがパッと目を開いて、『マザー。どうもありがとう』と言って息を引き取りました。」

「その顔はそれはそれはきれいでした。あのおばあちゃんの体は、わたしにとって御聖体でした。『わたしは飢えた人、凍えた人の中にいる』とイエスがおっしゃったように、あのおばあちゃんの中に主がいらっしゃった。おばあちゃんを天に見送った時に、わたしの心の中に主が来て下さったのです。」

開会式のこのあいさつを聞いて、会議の議長を務めていたマレー大学副学長であり、イスラム教の有名な学者が、「会場の皆さん、今マザーの話聞かれたでしょう。わたしの気持ちを言えば、このままこの宗教者会議を閉じたいところです。マザーの言葉を胸に秘めて、帰国の途につくのがいいと思います。」と語ったのだそうです。マザー・テレサのあいさつは、その場にいたすべての宗教者の心を打ちました。ここでことわざを思い出しましょう。「百聞は一見にしかず。」わたしたちが、マザー・テレサの言葉を理解するためには、わたしが引用した話を繰り返し聞けば足りるのでしょうか。そうではないでしょう。マザー・テレサの言葉を確実に理解するためには、わたしたちは出かけて行って、街中で、社会の中で、わたしたちの手を必要としている人に出会って、出会ったその人からイエス・キリストをいただく必要があると思うのです。

さらに、今週の福音朗読を踏まえてことわざを考えてみましょう。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」みことばを繰り返し聞くだけでは足りません。食べてみなければ、拝領しなければ、イエスのみことばは理解できないのです。

マザー・テレサの体験から考えると、イエスをわたしたちがいただく場はミサ聖祭においてと、社会においてです。ミサの中では、みことばというパンをいただくことと、聖体をいただくことでイエス・キリストを拝領します。社会の中では、わたしの手を必要としている人に

手を差し伸べる時、その人からわたしはイエス・キリストをいただくことになります。

2つの聖体拝領、どちらも大切です。「このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」ミサがささげられる聖堂に、わたしたちはいつまでも居続けるわけではありません。聖堂にいつまでも居続けて生活できる人はごくわずかです。むしろ、心はときどき聖堂に安置されている御聖体に向けて、社会に居続ける人のほうがはるかに多いのです。どちらにいても、イエス・キリストを拝領する場があるとわきまえて、礼拝の集いも、社会生活も、大切にしたいものだと思います。

「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きるためのわたしの肉のことである。」このみことばを真に理解するために、2つの聖体拝領を体験することにしましょう。2つの聖体拝領を通して、世を生きさせてくださるイエス・キリストに今週も出会うことができるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

年間第 21 主日(ヨハネ 6:60-69)

年間第 21 主日 (ヨハネ 6:60-69)

この夏、あなたをおいてだれのところに行きましょう

夏休みをいただきました。故郷に帰ってみると、夏休みを満喫している小学生、中学生にたくさん会いました。夏休みもあと1週間になると、宿題が気がかりなのですが、遠く離れた学校に通っていたわたしは、近くの学校に通っていた同級生たちとは違うことが気がかりになります。それは長崎に帰る日の天気です。

夏休み残り1週間になると、いつも天気予報を穴の開くほど見て、「フェリーが欠航にならないかなあ」とつぶやいていました。この8月末というのは、ちょうど台風が長崎を通過する時期でもありましたので、強風波浪注意報とかが発表されると小躍りして喜んでいました。

けれども最終的にはフェリーも欠航せず、競り市に引かれていく牛のような重い足取りで上五島の奈良尾ターミナルに向かったものでした。今では、早く馬込教会に帰りたい気持ちが先になっています。

さて今週の福音朗読箇所では、イエスのこれまでの言葉や行いにとうとう付いていけなくなり、弟子たちの中に離れていく者が現れます。もしかしたら、イエスに熱狂的になっていた人たちの熱が冷めたということだったかも知れません。

これまで行動を共にしていた弟子たちでしたが、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」(6・60)と言って背を向けます。この時点で12人の弟子たちが残ったわけですが、イエスは「あなたがたも離れて行きたいか」と問いかけました。

イエスが言われた「あなたがたも離れて行きたいか」(6・67)という言葉は、自分にはぐっさり刺さります。中学生高校生の時、神学校に戻りたくなくて、フェリーが欠航すればいいのと思っていた時期がありました。20歳を過ぎてくると、同世代の仲間が社会生活ですでに給料を手にし、わたしにおごってくれたりします。わたしはそんなことできる身分ではなかったのもので、羨ましい気持ちになりました。

そんな気持ちはすべて、司祭への召命を危険にさらすものです。その度にイエスから「あなたがたも離れて行きたいか」と言われていたはずですが。司祭召命をしっかりと見ようとしてなかったそのときどきの自分は、きっとイエスの期待に応えてなかったのだと思います。

「あなたがたも離れて行きたいか」というイエスの言葉には、「きみたちだけは残ってくれるよな」という期待が感じ取れます。ペトロは本心は迷っていたかも知れません。イエスのすべてを理解しているわけではないのですから、このままついて行くことができるだろうかとためらっていたとしても不思議ではありません。

ところが、ペトロはきっぱりとイエスについて行くことを表明しました。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」（6・68）ペトロをはじめ12人の弟子たちは、離れ去っていった弟子たちが見抜けなかったイエスの何かを掴んでいたのです。この人について行ける。そう思えるだけの何かを、この時までに掴んでいたのです。

わたしも、イエスの何かを掴んで、今この日まで司祭として続いているのだと思います。イエスについて行きますとは言いながら、わたしが置かれている環境で、「だれが、こんな話を聞いていられようか」という出来事は少なからず起きています。

教区との関わりで、広報委員長に任命されていますが、教区報「よきおとずれ」に何かを載せる際に、「えー、どうしてこうなるの」というような思いを内心持ちながら紙面に掲載することだってあるのです。そんな時にも、「あなたがたも離れて行きたいか」とイエスに難しい質問を向けられている気がします。

幸いに、司祭召命の歩みを続けて留まっています。何が自分を留まらせているのでしょうか。きちんと説明はできません。ただ、何かを掴んだのです。ペトロのように、戸惑いながらも、ついて行けるだけの何かを、イエスに見つけたのです。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」（6・60）。

きちんとした説明はできませんが、体験したことを話すことはできます。2つ、話しておきましょう。夏休みに入る前に、中町教会を使わせてもらって葬儀ミサをささげました。皆さんご存知の方の葬儀ミサです。わたしは説教の中でこう言いました。「今旅立っていく故人の今日に、希望を置くために、信仰が必要です。今旅立とうとしている故人の明日に、期待するために、信仰が必要です。」

これまで何度となく葬儀ミサの説教をしましたが、あのような言い方で信仰の必要性を祈りに集まった人に語り掛けたのははじめてでした。念入りに準備したからあの言葉が出て来たというわけではありません。また、経験を積んできたから、あの言葉が出て来たのでもないのです。

もし、あえてそれを説明するなら、あの時イエスがわたしにあのような言葉を授けてくれたのだと思っています。つまりイエスははっきりと、わたしの準備したこと以上の言葉を示して、イエスについて行けるだけの確信を与えてくれているのです。

わたしの経験からではとても思い付かない言葉をわたしの舌に授けてくれて、イエスについて行けるだけの確信を与えてくれるのです。この体験が、「だれが、こんな話を聞いていられようか」という危機がおとずれても、わたしを支えてくれているのだと思います。

わたしは同じ方の前日の通夜の時にも、イエスが先について行けるだけの何かを授けてくださるのだと感じました。前の日の通夜が、夜の6時に行われましたが、通夜のために夕方5時半、中町教会に行ってみると、たまたま、そこにシリアという国で木工職人に技術指導をしているシニアボラ

ンティアの家具職人に出会ったのです。

まったく前触れもなしにです。その日、その職人は夏休みで日本に帰国しており、彼の妻と故郷が同じだという女子パウロ会のシスターに夫婦で会いに来ていました。わたしは通夜と葬儀でたまたま夏休みを1日遅らせたので、シリアで技術指導をしているはずの人と中町で久しぶりに再会したのです。

どんな偶然もここまで重なることは難しいでしょう。けれども、イエスはこのようなことを通して、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか」と言えるだけの確信を与えてくれるということです。だれにとっても、何かしら、ついて行けるだけの確信を与えてくれる。イエスはそのような方なのです。

「あなたがたも離れて行きたいか。」きっとイエスは、ついて行けるだけの十分なものを先に示してくださったのではないのでしょうか。その何かを、はっきり掴むための照らしを、今日のミサの中で願うことにしましょう。

年間第 22 主日 (マルコ 7:1-8)

年間第 22 主日 (マルコ 7:1-8,14-15,21-23)

清い生活、神の心にかなう生活は心の中から

伊王島・高島地区は、今回の衆議院選挙に関しては土曜日ですべて投票が終わっています。島民すべてが、日本の多くの人々よりも一歩先に選挙を終えて日曜日を迎えていることになります。

わたしも、一票を投じてきました。誰に入れたのか、何党に入れたのかはここでお話しする必要はないと思うのですが、やはり最終的には、わたしの心にあることを少しでも形にしてくれそうな候補者、政党を選ぼうと考えて投票に行きました。

もちろん中には、その人がどんな人であるかはどうでもよくて、どの政党に所属しているかでその人に投票した、という有権者の方もいらっしゃるかも知れません。それはまあ、例えて言えばお気に入りのプロ野球球団があって、その球団のユニフォームを着ている、それだけで応援しているというようなものです。年がら年中空振り三振していてもかまわないというのです。

わたしはそういう応援の仕方は正直言ってどうかなあと思っている人間です。ですから、「何党に所属しているから」というだけで一票を投じる勇氣のある人には、それはそれでたいしたもんだなあと思います。

今日の福音朗読ですが、ファリサイ派の人々と数人の律法学者たちがイエスのもとに集まっている場面で事件が起こります。イエスの弟子たちの中に、「洗わない手で」食事をする者がいるのを見たのです。

昔の人の言い伝えを固く守って生きる人々にとっては、目を覆いたくなるような出来事でした。それは、お気に入りの球団の選手だった人が自由を得て他の球団に移ったようなものです。または、ある候補者が、応援している政党から、対立している政党に鞍替えして立候補してしまったというようなものかも知れません。とても納得できないことだったのです。

ですが、イエスの説明は、理解ある人にはもう一度考えさせる照らしとなりました。「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出てくるものが、人を汚すのである。」(7・15) 形式にのっとって手を洗わず、掟に外れたことをしている。それは見た目には良くないことですから、掟に外れることを何よりも恐れている人にとっては、目を覆いたくなるような場面だったのです。

けれども、イエスは昔の人の言い伝えである「手を洗う」という儀式よりも大切にしていたことがあったはずです。もし、昔の人の言い伝えが何よりも大切だったとしたら、集まっている学者たちに言われる前に、イエスが弟子たちを厳しく叱ったことでしょう。

けれどもイエスは、弟子たちが昔の人の言い伝えを守るために手を洗うことを放棄しても、とがめなかったのです。なぜなら、言い伝えのために手を洗っても、それだけでは神を喜ばせることに直接結びつかないからです。むしろ、ここには書かれていませんが、イエスと弟子たちは食事の時に感謝の祈りを唱えてから食事をしたことが想像されます。食事の前に祈ること。そのことのほうが、規則のために手を洗うことよりも大切なこと、よ

り神を喜ばせることだと彼らは知っていたのです。
今回の総選挙は歴史的な選挙だと大騒ぎしています。外から聞こえる声に踊らされて投票しても、国のためにならないのではないのでしょうか。外から聞こえてくるものは、たいてい大きな騒音です。むしろ、自分の心の中から、「ああ、そうだなあ、それが本来の政治の姿だよなあ」と思える、同感できる意見に賛成することが、必要なのだと思います。

つまり、今日の福音で問われていることは、今のわたしたちの生活にも同じことが問われているということです。身近な例で言うと、今回の総選挙にだって同じことが求められているのだと思います。イエスが求めていること、それは、人の言うことに右往左往するのではなく、本当に神を喜ばせるためにしなければならないことは何だろうかと考えることです。

イエスの時代に、本当に神を喜ばせるためには、昔の人の言い伝えに考えもなしに従うことではなくて、その人が心から、神を喜ばせることだと思えることを行う。そんな態度が必要でした。この態度はイエスによって初めて示してもらった態度でした。

今のわたしたちの時代も同じです。例えば選挙にしても、何も考えずにこれこれの党から出ている人に一票というのではなくて、この人は何と言っているだろうかと考えてから一票を入れる。そうすることでわたしの一票を用いて神を本当に喜ばせることになると思うのです。

「そんなの建前であって、実際は頼まれたらその人に一票入れなきゃいけないんだよ」とおっしゃるかも知れませんが、たとえそうだと心の中からも、「うん、この人でいい」と思うことは、どんなときでも必要だと思えます。

イエスは今日の最後にこう言いました。「中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。」（7・21-23）

このイエスのみことばから考えるべきことは、心の中にある思いをととのえなければ、わたしたちは自分の清さを保つことはできないということです。「主よ、あわれみたまえ」とか、「世の罪をのぞきたもう主よ、われらをあわれみたまえ」とわたしたちはミサの中で唱えています、本当に心の中からの声になっているのでしょうか。よく考えてみましょう。

ミサ中によそ見をしながらでも、人の欠点に気を散らしながらでも、「われらをあわれみたまえ」と口は言うことができます。そうであってもはいけないのです。心の中からも、そう思って、ふさわしい祈りを唱えましょう。平和のあいさつ「主の平和」と言うときも、心の中からも平和を願ってあいさつを交わしたいものです。

イエスは、心の中をととのえなければ、わたしたちは清さを保つことはできないと強く迫ります。生活の隅々にまで、イエスのこの願いが行き渡りますように。身近な例で言えば、心の底から、この決断が正しいと納得して、一票を入れることです。あらゆることに、イエスの期待することが行き渡るとき、わたしたちはこの社会に神の掟に根を張った神の国を建設することができるのだと思います。

年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

年間第 23 主日 (マルコ 7:31-37)

イエスは「エッフアタ（開け）」と言う

今週の福音朗読は、耳が聞こえず舌の回らない人がいやしてもらう奇跡の場面です。イエスの前に連れて来られた人は、自分が置かれている辛い状況から解放されたいと心の底から願っていたはずです。

こんな中で、イエスは動き出しました。指をその両耳に差し入れ、唾をつけてその舌に触れます。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって「エッフアタ（開け）」と言いました。すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになったとあります。イエスが「エッフアタ（開け）」と言って開いたものは何だったのでしょうか。それは、誰も開くことのできないもの、人間の力では決して開くことのできないものでした。今回は、耳が聞こえず、舌が回らないという深刻なハンディでしたが、ほかのことでも当てはめてよいと思います。

たとえば、死者を生き返らせるために「ラザロよ、出てきなさい」（ヨハネ 11・43）と呼びかける場面であるとか、「少女よ。あなたに言う。起きなさい。」（マルコ 5・41）と命じる場面なども、イエスにしか開くことのできない扉を開く偉大なわざだと思えます。

わたしは、イエスが仰せになった「開け」ということばに、もっと広がりをもって考えることで、イエスのこの呼びかけと自分たちを具体的に結び付けることができるのではないかと思いました。イエスが「開け」と仰せになるとき、それはわたしたちの具体的な生活、しかもあらゆる部分で、閉ざされていたものを開くように求めているということです。

わたしたちには、生活の中でイエスによって開いてもらう必要のある部分が、まだたくさんあるのではないのでしょうか。たとえば、わたしたちの中のある人は、あきらかに目上の人の前では自分をよく見せようと振る舞い、自分よりも下の立場にある人に対しては横柄な態度を取っています。

イエスはそのような人に、すべての人に公平に振る舞いなさいと呼びかけます。目上の人、目下の人で振る舞いを変えるのではなく、心を開いて、だれに対しても寛大に振る舞うように、「開け」と仰せになっているのだと思います。

また、ある人は権威を振り回しています。責任者という立場を全体の利益のためではなく自己満足のために使うのです。権威を振り回すことは、周りの人にとっては暴力をふるわれているのと同じです。自分以外のすべての人を傷つけてしまいます。むしろ、権威を全体の利益のために、奉仕のために活用しなさい、「開け」と、イエスは呼びかけるのです。

ある人は、家庭の中で暴力的になっています。夫が妻に対して、父親・母親が子供に対して、あるいは子供が父母に対して、暴力をふるってしまいます。誰も、家庭の中で暴力をふるうことなどゆるされていません。親の子に対する威厳は、子を育てるために神から委ねられた

ものです。決して言いなりにするためのものではないはずです。夫と妻の関係も同じです。どちらも、配偶者に対して支配する立場にはないのです。イエスは今日の出来事を通して、家庭の中にも「エッファタ（開け）」と言っておられるのではないのでしょうか。

まだあります。ある人は、生活に表と裏があります。人に見える部分では社会に貢献していますが、見えない部分で悪事を働いている人もいます。イエスはこれらの人々にも「開け」と命じ、闇から抜け出すように呼びかけるのです。

ここまでは、社会生活に目を向けてみましたが、もはや社会だけではなく、教会の中でも問題が起こっているかも知れません。もしかしたら、教会の中では社会生活以上に深刻な問題が起こっているかも知れないのです。

なぜかと言うと、この部分に関してすでに一歩も二歩も取り組みが進んでいるので、社会の中ではいつか問題が表に現れて、社会的な裁きを受けることになります。ところが、教会の中では問題が表に現れにくく、表沙汰にしないようにしよう、できるだけ隠そうという傾向にあるからです。

もうすでに、悩みを抱えて打ち明けられずにいる人がいるかも知れません。自分さえがまんすればいい、自分が一人で問題を抱えればいいと思い詰めて、一般社会以上に問題が深刻になっている可能性があります。教会の中での権威を使っての言葉や態度での暴力など、成熟した社会であればとくに訴えられているようなことさえも、まだまだ隠れて表に出ていないかも知れません。

わたしはもはや、これは他人事ではなくなっていると思います。問題を抱え、解決策を探して苦悩している教会共同体、神の家族に対しても、イエスは「エッファタ（開け）」と命じているに違いありません。信者同士で何気なく言ったこと、たとえば「結婚信者のくせに」というような言い方は、本当は相手を深く傷つけるのです。相手はたまったものではありません。

いちばん注意が必要なのは司祭自身です。司祭が、信徒を言葉で追い詰めたり、不快にさせたりしていることがきつとあるだろうと、正直に認めるべきです。「こんなことも知らないのか」と態度に表して相手の方を失望させたりしていたら大変なことです。イエスは教会の立場ある人たちにも、「エッファタ（開け）」と仰せになって、本来の姿に立ち戻るように迫っているのではないのでしょうか。

特に、教会生活での問題を、もっと考える必要が出てきていると思います。差別、虐待、抑圧、どれをとってももはや教会と無縁とは言えなくなっているのではないのでしょうか。

弱さや未熟さ、誤解や偏見、傲慢さなどで本来の姿が見えなくなっているわたしたちに、イエスが今日「エッファタ（開け）」と仰せになっている。真剣にそのことを受け止めて、問題を抱えている部分があるとしたら、どうかイエスによっていやしていただけるように、恵みを願いたいと思います。

年間第 24 主日 (マルコ 8:27-35)

信仰告白は表明した瞬間から深まっていく

土曜日に、大浦天主堂を結婚式のためにお借りして、一組のカップルの結婚式をしました。馬込教会のミサの参加者には、実際に結婚式に出席した人もいるかも知れません。その結婚式の説教で、結婚する2人に次のような話をしました。

「人は、完成に向かって進んでいく生き物です。まず初めは、お腹の中の赤ちゃんです。赤ちゃんはお腹の中で、自分の体の完成のために進み始めます。まだ、社会とのつながりも始まっていませんが、体の完成のために、お母さんの愛情の中で着実に進んでいきます。」

「次に、この世に生まれ落ちると、その時から人生の完成のために進み始めます。しつけを学び、教育を受け、基礎を固めてもらいます。あとでは仕事に就き、自分で生活するための糧を得るようになります。」

「そして、自分の人生の完成の中に、今日の結婚式もあると思うのです。配偶者を見つけ、この人と、自分たちの人生の完成に向かって力を合わせて進んでいきます。あるいは、必要なときお互いに助け合って、人生の完成のために協力を惜しまないのです。」

「結婚した夫婦に、『結婚して良かったですか』と尋ねるとしましょう。結婚した手の夫婦が『結婚して良かった』と答える場合と、結婚10年目の夫婦が『結婚して良かった』と答える場合とでは、その答えは重みも、深みも明らかに違いがあると思います。結婚生活10年のうちには、困難を解決する経験も積んだことでしょうし、喜ばしい出来事にもたくさん出会ったはずです。『結婚して良かった』という言葉には、はるかに重みがあると思います。」

「さて、こうしてたくさんのかをきっかけに人生を完成させようと進むのですが、人間は人間の力だけで人生を完成できるものなのでしょうか。わたしはそうは思いません。人間が、その人生を本当の意味で完成させるためには、信仰心がどうしても必要だと思うのです。わたしはカトリックの司祭という立場で話していますので、人生を完成させるためには、神の導きと照らし、力が必要だと思うのです。」

「もちろん、すべての人がキリスト教を信じているわけではありませんので、それぞれの信仰の中で結構ですが、信じているお方と、親しいつながりを保って、人生の完成のために力を願う、つまり祈りを通して力をいただくようにしましょう。夫となる〇〇さんは、カトリック信者ですから、これからも教会とのつながりを保ち、家庭での祈りを忘れないようにして、神に人生の完成のための大きな導きを願うようにしてください。」

ざっと、こんな話をしました。人は、完成を目指して、自分の人生を歩いている。これが昨日の結婚式の説教の中心点でした。実は今週の福音朗読を読み解くために、今紹介した話を使いながら学びを得たいと思うのです。イエスは弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と尋ねました(8・27) いろいろな声を弟子たちは耳にしていたようです。そしてイエスは、さらに踏み込んで尋ねます。「それでは、あな

たがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが代表して答えます。

「あなたは、メシアです。」(8・29)

このペトロの信仰告白を、最初に話した結婚式での説教、「人は、人生の完成に向かって進んでいる」ということに照らして考えてみたいのです。つまり、ペトロの人生の中で、あのペトロの信仰告白は、どういう意味を持つだろうか、ということを考えたいのです。

ペトロは、イエスと3年間行動を共にしてから、その後おそらく35年くらいは生き続けました。ローマで殉教したのが68年か69年で、イエスの死と復活の出来事がおよそ30年の頃に起こったとすれば、35年くらいは生きたという計算になります。このペトロの人生の中で、「あなたは、メシアです。」という信仰告白は、きっと完成に向かって、より洗練された意味を持ち、初めてイエスに信仰告白したときよりもはるかに重みのある、深まりのある答えになっていったと思うのです。

それは、たとえとして話した「あなたは結婚して良かったですか」という答えに、新婚の夫婦が答えるのと10年共に歩んでから答えるのでは重さが違うというのと同じです。ペトロの信仰告白「あなたは、メシアです。」というイエスへの単純な答えも、その後の35年以上の人生の中で、深まっていったと思うのです。

わたしは今、ペトロの信仰告白について話したわけですが、信仰告白が深まっていかなければならないのはペトロに限ったことではありません。わたしたちもまた、イエスを信じる弟子なのですから、イエスへの信仰を告白し、その信仰告白が人生の歩みの中で完成に向かっていかなければならないと思うのです。

わたしたちは皆、イエスを信じる弟子ですが、その生き方はさまざまです。家庭の中にある人、一人暮らしの人、さまざまです。社会にあって信仰を守っている人もいれば、生活のすべてをイエスへの信仰のために明け渡している修道者や聖職者もいます。それぞれの置かれている場があるのです。その中で、一人ひとりは何かの信仰告白をイエスに表しているはずです。

たとえば、「朝晩、必ず祈りをしないと、何だか落ち着きません。」という人がいるでしょう。あなたは、イエスに向かって、「朝晩、必ず思い出すお方です」と信仰表明しているわけです。この信仰は、どの程度深まっているのでしょうか。どの程度の重みを、今持ち続けているのでしょうか。

朝晩忘れないと言っても、眠たいときは忘れますという程度でしょうか。それとも、わたしが酸素マスクをする羽目になっても、それでも忘れませんという程、真剣なものになっているのでしょうか。イエスに対するあなたの思いは、ほんの少しでもいいから、完成に向かっていくのでしょうか。

また、わたし自身に当てはめると、イエスとの関わりは「24時間、切っても切れません」ということになるでしょう。朝早くであろうが夜中の1時であろうが、急な事態が発生すれば求められたところに飛んで行きます。飛んで行きますが、すべてを置いて飛んで行くか。そこまで深まっているか、重みが増しているかと自分に問うと、もしか

たら完成に向かう途中でわたしの信仰告白は停滞しているかも知れません。

どういうことかと言うと、現実問題、いろんな予定や計画がわたしの手帳には書き付けられていますから、その予定や計画を調整して、うまくやりくりして緊急事態の場所に行っているというのが実情です。すべてを横に置いて行く、イエスのために、いっさいを横になげうつ。そこまで完成されていないのです。

こうしてみると、すべての人がペトロの信仰告白を聞いて、自分自身に当てはめて考える必要があると思います。ペトロはイエスに、「あなたは、メシアです。」と信仰を表明して、その信仰告白はその後のペトロの人生の中で深まっていった。わたしはどうだろうか。この点を、今週は考えてみたいのです。

すべての人が、完成に向かって人生を歩んでいます。そしてすべての人が、自分の力だけでは人生を完成できません。イエスに、わたしたちの信仰告白が一步でも二歩でも完成に向かって進むように、照らしと導きを願いたいと思います。

年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

年間第 25 主日 (マルコ 9:30-37)

まず「あと 1 人」に仕えてみる

先に、13 日の教会周辺の清掃と、敬老会についてねぎらっておきたいと思います。13 日の清掃は、当日出席が難しい人が結構出た中で、本当によくやってくれました。7 月 26 日が中止になってからずいぶん経っていたので、機械が入れないほど伸びていたにもかかわらず、献身的に協力してくださった皆さんに感謝します。

また、19 日の敬老会は、これまた多くの人の気持ちよい協力によって、予想よりもずっと楽しい会になりました。演目が予定よりも増え、わたしもしたいわたしもしたいという状態になって、しかも切り替えもだいたいのスムーズに行われたおかげで、12 時に無事に終わることができました。

この場にいませんが、踊りの会の方々、園児の皆さん、デイサービス「ふるさと」の方々はじめ、協力くださったすべての方に感謝申し上げます。何よりも、今年も敬老会を楽しみにして出席してくださった招待者の方々に、御礼申し上げます。

では福音の学びに入りましょう。今週の福音朗読でイエスは、「いちばん偉い者」についての意味深い教育を弟子たちに施しています。「いちばん先になりたいものは、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」(9・35) 上に立つ人になるよりも、すべての人の後に仕える者になることのほうが、本当に偉い人なのだと切り切っています。

そこで、「上に立つことを目指す工夫」ではなくて、「すべての人に仕えるための工夫」を考えてみたいと思います。どのようにしてそれは可能でしょうか。

考えるヒントとして、司祭が 2 人いて、ミサをささげている時を想像してください。2 人の司祭のうち、どちらかは祭壇の中心に立って、主司式を務めます。もう 1 人の司祭は、主司式の司祭の右か左に立って、一緒にミサをささげます。

そばで一緒にミサをささげる司祭をよく観察すると、しばしば、侍者と同じような手伝いをしているのを見ることがあると思います。たとえば、パンとぶどう酒の奉献を準備する中で、侍者が 1 人しかいない場合、司祭が侍者と一緒に手伝うわけです。

ぶどう酒と水を 1 人の侍者が持つ代わりに、そばにいる司祭がぶどう酒を持ち、侍者は水を持つ。あるいは中央の司祭が手をすすぐときに、脇の司祭が手洗いの水を持ち、侍者が手ふきを持つ。司祭が 2 人いてミサをしているときは、こういう場面がしばしば見られます。

問題は、2 人の司祭の本来の立場と、そのミサの中での役割が逆転しているときです。たとえば、主任司祭と助任司祭が一緒にミサをしていて、その日は助任司祭が主司式をしているとします。そうすると、主任司祭が助任司祭のためにぶどう酒を渡したり手洗いの水を持ってあげたりするわけです。

皆さんは、どう思われるか分かりませんが、そういう時って助任司祭はものすごく緊張しているんです。知らなかったでしょう？主任司祭が、30 歳

にもならない新米司祭のためにぶどう酒を差し出してくれたり、手を拭くために手ぬぐいを持ってくれる。こういう時主任司祭は敬虔な面持ちでお仕えしてくれています。そういうお顔を見ればますますなのですが、助任司祭は緊張するものなのです。

わたしはその経験を2つの教会で通ってきました。浦上教会では、平日のミサは当番で主司式をする役割が回ってきます。新米のわたしが主司式をすれば、ほかの先輩司祭はそばにいて仕えてくれるのです。滑石教会の時もそうでした。主任神父さまが、わたしのそばでぶどう酒を持ってくれたり、手洗いのための器を持ってくれたりして仕えてくれたのです。

わたしはあのときの体験を思い出しながら考えるのですが、わたしが指導を仰いだ2人の主任司祭が本当に偉い人だったなあと思わせるのは、上に立つ場面でそのように感じさせたのではありませんでした。主任司祭ですから、当然上に立つ場面はいくらでも出てきます。

そうではなくて、主任司祭でありながら、まだ見習いに過ぎない助任司祭が主司式をしているミサでそばに立ってミサをささげているときに、かいがいしく世話を焼いてくれる姿に、わたしは感動を覚えたのです。

ある時はこんなこともありました。主任と助任の関係ではありませんでしたが、大先輩の司祭と一緒にミサをささげた時のことです。その日、たまたまわたしが主司式をしていたのですが、福音書の朗読に、大先輩が向かおうとするとき、司式の司祭が座る椅子に就いているわたしに、「祝福をお願いいたします」と言ってひざまずいたことがありました。

皆さんも、大司教さまが主司式をしておられるミサで、福音朗読をする司祭や助祭が大司教さまの前にひざまずくのは見たことがあると思います。そのように、大先輩がわたしの前にひざまずいて祝福を求めたのです。

「主の福音を告げるために、全能の神が、神父さまを祝福してくださいますように。」わたしはかろうじて、それだけの言葉をひざまずいている大先輩司祭の前で唱えました。わたしの足は震えていました。それは恐ろしさから来る震えではなく、いわば聖なる場面に立たされてその崇高さに震えたということです。若造に過ぎない、わたしの前にひざまずいている大先輩司祭を見たときに、聖なるものを見た気がしたのです。

こうした経験から、1つわたしにも言えることがあります。「すべての人に仕える者になりなさい」とのみことばを実践する確かな方法は、「今日、あと1人に仕えてみる」という姿勢だと思います。主任司祭が、当番で主司式を果たしているひよっこの助任司祭に嬉々として仕えているのは、「今日、あと1人に仕えてみる」という最高の模範だと思います。

朝、目が覚めてから、あなたはきっと多くのことで人に仕えて1日を過ごしてきたことでしょう。ほぼ1日が終わろうとしている時間になれば、あなたは「あーやっと終わった」と、胸を撫で下ろしていると思います。もう、仕える必要はない。自分の好きなようにできる時間になった。そう思っている瞬間に、考えて欲しいのです。「今日、あと1人仕えてみる。」今日果たすべき事を終えたあなたに、「あと1人仕える」ということは納得できないかも知れません。その必要を理解できないかも知れません。けれども、イエスが「いちばん先になりたいものは、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」と仰っているのを実現させる時間は、すべてが終わったと思っているその時から始まるのではないのでしょうか。

今日すべき事はすべて終わった。だから、わたしはもう誰に仕える必要もない。そう思っているときに、「あと1人に仕えてみる」それが、あなたをすべての人に仕える姿に造りかえてくれるのだと思います。

助任司祭を抱えて指導してくれた先輩の神父さまは、わたしの見る限りたくさんの若い司祭をご自分のもとに受け入れ、鍛えてくれました。おかげで、長崎教区の今の中堅司祭が存在するのだと思っています。

それと同時に、この大先輩の神父さまは、巣立っていくまで教育したそのすべての若い司祭に、ある場面では仕えてくださっていたのです。わたしはそのことに今ようやく気がつきました。

人の上に立つことの多かったその神父さまたちの何が偉かったかと言って、それは、見えないところで仕える人であったということだと思います。人の上に立つことは、自分にその気がなくてもその場に立つことはできます。けれども、人の上に立つ身分の人が、人に仕えるというのは、心がけがなければ絶対にできないことなのです。

そこでわたしたち皆、「今日、あと1人に仕えてみる。」そういう心がけで今週を過ごしてみましょう。きっとその心がけが、イエスのみことば「いちばん先になりたいものは、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」の意味を分らせてくれるきっかけになると思います。

年間第 26 主日 (マルコ 9:38-43,45,47-48)

あなたの中の「当たり前」を切り捨てる

金曜日に全国版のカトリック新聞を読んでいたら、「2009年10月11日に福者ダミアン神父が列聖される」という記事が新聞の見開きで掲載されていて、びっくりしました。びっくりした理由は2つあって、1つは、このダミアン神父の列聖式が10月11日だというのに、わたしは9月25日の新聞を読むまで全く知らなかったということです。わたしが知らなかっただけで、たとえば長崎教区の広報委員は知っていたかも知れないと思って尋ねてみると、2人の教区広報委員も全く知らなかったそうです。中央は、もう少し広報活動をしておいても良かったのではないかなあと思います。

ダミアン神父について少しだけ紹介しておきますと、かつて病名がらい病と呼ばれていた、ハンセン病の人々に奉仕するためにベルギーからハワイのモロカイ島に宣教に行き、そこで病人の方々と共に暮らし、最後には自分もハンセン病になって、命をささげつくしたのでした。そこでもう1つの疑問になるのですが、これだけのことをした立派な方が、福者になり、聖人になるのに120年もかかっています。なぜそんなに長い時間がかかったのだろうか、そのことも不思議に思いました。福者に上げられてからも列聖まで15年もかかっています。長い道のりなのだなあと思いました。

ついでに、ダミアン神父についてもう少し皆さんに親しみを持ってもらうために、こぼれ話をしたいと思います。日本の有名な彫刻家で、舟越保武さんという方がおられました。西坂の、26聖人像を制作した方と言えばおわかりでしょう。この方が、かつてダミアン神父の銅像を制作したのですが、長崎で去年だったか、舟越保武展が開かれたときにそのダミアン神父像も展示されていました。

顔はできものだらけ、目もくり抜かれたようになっていましたが、迫力満点の銅像で、引き寄せられる魅力を持った像を見ることができました。このダミアン神父像と関連しての話ですが、舟越先生がイメージをふくらませる1つのきっかけになった話があります。

ダミアン神父は、モロカイ島のハンセン病患者のためにミサを捧げたり教えを説いたりしていたわけですが、ダミアン神父が健康だったときには、「あなたたちは」というような呼び掛けをして説教をしたり教えを説いたりしていたそうです。それが、彼自身がハンセン病になり、病を通じて自分も同じ兄弟姉妹になったと感じたときから、「わたしたちは」と話し掛けるようになったそうです。

比べるとはっきり分かりますが、「イエスの呼び掛けに答えて、あなたたちもこのようにしましょう」と話すのと、「イエスの呼び掛けに答えて、わたしたちもこのようにしましょう」と話すのでは、断然「わたしたち」と呼び掛けたほうが親しみがわきます。この境地に、ダミアン神父は病を得て、たどり着いたわけですから。

さて話が長くなりましたが、このダミアン神父の偉大な宣教の足跡は、

今日の福音朗読箇所を味わうのに役に立つと思います。イエスは、「もし片方の手があるあなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい」「もし片方の足があるあなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい」「もし片方の目があるあなたをつまづかせるなら、えぐり出しなさい」と厳しい要求をしています。

ダミアン神父がこのイエスのみことばを頭に置いて行動していたかは分かりません。ですが結果として彼は、ハンセン病の人々により近くいて宣教するために、自らの健康を捨ててしまっ、同じ病気になることも受け入れて、人々の中、その心のいちばん深いところに、飛び込んでいったのだと思います。

健康だったときは、たとえばルカ福音書の「今泣いている人々は、幸いである」「人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである」(6・21,22)というような箇所は、ダミアン神父から語りかけるイエスのみことばであって、ダミアン神父も一緒に味わうイエスのみことばにまで変化していなかったかも知れません。それが、同じ病を与えられたことで、変わるきっかけを得たのでした。

ダミアン神父のような経験はなかなかわたしたちの人生には起こらないかも知れませんが、イエスが招いている幸いな生き方に入るためには、わたしたちもつまづきとなるもの、妨げとなっているものを取り除かなければなりません。

イエスが「切り捨ててしまいなさい」と言ったのは、常識的に考えれば両方あって初めて当たり前機能する身体の一部です。手や足や目は、片方あればまあ何とかなるという代物ではありません。

それほど重大なものでも、場合によっては、わたしたちがイエスの示す幸せにどうしてもたどり着けなくなるのであるなら、未練を残さず、捨てなさいと言っているのです。どんな理解の仕方をすれば、このようなことができるようになるのでしょうか。

わたしたちの暮らしに、もはやなくてはならないものはいくつもあります。水道、電気、ガス。こうした便利なものを、もし手放すことになるとしたら、どんな理解の仕方が役に立つのでしょうか。また、バス、電車、船も、わたしたちの生活を最低限保証するために必要なものです。それらを永久に手放すことになるとしたら、どのように納得させたらよいのでしょうか。

なかなかうまく言い当てることができませんが、イエスの呼び掛けに答える1つの理解の仕方は、「当たり前と思っている、その思いを捨てなさい」ということかなあと思いました。「両手、両足、両目が与えられている。そんなこと当たり前じゃないか。」この思いがあるあなたをつまづきになっている。切り捨ててしまいなさいということです。どんなに当たり前に見えることでも、与えられていることに感謝できるようにしておくべきです。当たり前と思ってしまうと、わたしたちにおごり高ぶりの誘惑が忍び寄ってきます。おごり高ぶりは、差別、偏見のもとになり、人をつまづかせることになるのです。

つまづかせる人に示された罰を思い描いてみましょう。「大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。」(9

・ 42) ついでですが、わたしも一度だけ、この罰を思わせるような怖い経験をしました。朝、目が覚めたとき、首が全く言うことをきかず、起き上がることができなかったことがありました。

もう2度とあのような思いはしたくありませんが、まさに石臼を首に懸けられているような気分でした。どうしても体を起こすことができず、腰から下を何とかベッドからずらして足を床につけ、体をひねって腹ばいになり、ベッドに手をついて床に正座したのです。あの朝は、もう一生起き上がることができないのではないかと思うくらい恐ろしい経験でした。

わたしたちは、偏見や、差別など、つまずきを与える考え方を知らず知らずに抱いている可能性があります。ないとは言い切れません。恐らく動物が挽く「大きな石臼」が実際にどれほどの大きさか、想像してください。その石臼を、イエスはつまずきを与える人の首に懸ける権限を与えられているのです。

ぜひ、わたしが本当に偏見や差別を持たずに人に接しているか、切り捨ててしまわなければならない悪い習慣を持っていないか、考えてみたいと思います。もし先延ばしにすれば、切り捨てる機会を失うかも知れません。

年間第 27 主日 (マルコ 10:2-16)

神が結び合わせてくださったものを守る

わたしは浦上教会時代に、悔やんでも悔やみきれない失敗をしたことが 2 つ 3 つありまして、そのことは今もずっと思い出しますし、わたしが記憶を失うまで、決して忘れないだろうと思います。

今日の福音朗読を考えるきっかけとして、そのうちの 1 つを、話せる範囲で、告白したいと思います。ある親子が、司祭館に相談に来ていました。たまたまわたしが玄関に出て対応しました。

話を聞いて、それは教会法をわたしが理解している範囲で考えると、ゆるされないこと、許可できないことだと伝えました。その方は、表情をこわばらせました。その場面に、たまたま主任神父さまが出くわしました。

「どうしたのかね」と尋ねられましたので、これこれの状態にあって、お願いに来ていることをかなえてもらえるだろうかと言っていますとわたしは伝えました。

すると、主任神父さまが直接、親子の相談に乗ってくださり、「うん、話は今、助任神父から聞いて分かった。その上で今から聞くことに答えてくれんね。こういう予定はあるね、予定はないね」「ありません」「じゃあ問題ない。希望通りにできるよ。」

「じゃあ問題ないよ。」その言葉を聞いたとき、親子は一度に悩みから解放されたのでしょうか、こらえていたものがこみ上げて、涙を流しました。玄関に立ったまま、ハラハラ涙を流したのです。

今思い出しますと、主任神父さまのような経験も場面に応じた適切な判断もできず、教会法という法律だけを物差しにしてその人に判決を下していたわけです。あのときから 15 年以上が経過していますが、同じような場面が何度か巡ってきました。

そして今は、わたしも当時の主任神父さまのように、その人の置かれている事情を総合して、可能な方法を伝えることができるようになりました。できない理由を並べるのではなく、あなたがこうしてくれたら、できるようになりますと言えるようになったのです。

当時のことを思い出すと、今でも申し訳ない気持ちで一杯です。相談に来ているだけでも辛い思いだったでしょうに、わたしはその人のこわばった表情を和らげることすらできませんでした。

もし、あの場面に主任神父さまが出くわしていなかったら、わたしは主任神父さまに相談することなく、おいでになった人をそのまま帰していたかも知れません。「うんうん、大丈夫。心配要らないよ。」と声を掛けられて涙を流していた場面は、今でもはっきり焼き付いています。わたしの理解不足で、目の前にいる親子を神さまから引き離してしまうところでした。わたしの過去の告白は、今週の福音朗読の一節と結びついています。「従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」(10・9) 実際の朗読箇所では、結婚について弟子たちに答えたみことばです。神のご意志として用意された結婚の恵みを、人間が壊してはいけないということです。

わたしは、このイエスのみことばを、もっといろんな状況に当てはめて考えてみました。「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」つまり、神がお望みになっていることを、人間が壊してはいけないということです。

神がお望みになっていることは、今週の福音朗読にあるような結婚生活のことだけではありません。人と人とのあらゆる関わりの中に、神がお望みになっていることがあるわけです。それを、神が望んでいることなんて、そんなの意味がないとか、そんなの古くさいとか言って、人間が壊してはいけないと言いたいのです。

わたしは全体を見渡すヒントとして、十戒を思い描いたらよいのではないかと思います。あの中に示されている掟は、どれも神が人と結んでくださった掟です。神が、人のことを思って結び合わせてくださったものです。それを、人は離してはいけない、つまり、掟なんて気にしていたら何もできないぞとか、そんなの今の時代に意味がないとか言って、神と結び合わせるための大切な掟を、人から引き離してしまう。その絆を壊してしまう。生活の全般にわたって、人を神から引き離すようなことはしてはいけないと、要求しているのだと思うのです。

そう考えてくると、わたしたちは日頃、いろんな場面で、神が結び合わせてくださったものを、人間の都合で引き離しているのだなぁと気づくことが出てきます。教区が決定したことなのでどうこう言える筋合いではないのですが、司祭の叙階式、ここ数年で毎年のようにコロコロ変わっています。

わたしは信徒発見の日に司祭に叙階されましたが、わたしよりも上の先輩たちは、多くが聖ヨセフの祝日に叙階されているはずです。わたしも小さい頃、叙階式は3月19日にあるものだと暗記して理解していました。

それが、やれ日曜日にした方が集まりやすいだの、やれ日本の祝日に合わせたほうが子どもたちも叙階式をその目で見ることが出来るだの、いろんな理由が付いてここ数年は決定したことがくるくる変わっているのです。もう1つ言わせてもらおうと、26 聖人の殉教記念ミサですが、最近日曜日に変更になりました。叙階式は、その年によって実施する日がくるくる変わってもその年に2度行うことはありませんが、26 聖人のミサを日曜日にしても、結局は2月5日にもう一度祝うわけです。西坂の26 聖人記念館で実際にそのようなことが起こっています。

この状況は、わたしの中で「教区が決めたことだから仕方がない」という理解で無理矢理受け止めていますが、26 聖人を、神が2月5日に結び合わせてくださったのですから、それを人が引き離してしまうのは、どういうものかなあという思いがいまだに拭えません。

「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」わたしはこのイエスの思いが、よくよく見渡すといろんな場面で破られているのではないか、守られていないのではないかと心配しています。

もし人が、いろんな都合をつけて、神が結び合わせてくださったものを引き離すようなことをしているとしたら、率直にそれを認めて、修正していきたいと思います。あるべき姿を最大限取り戻すことで、カトリック教会はもう一度日本の社会に対して影響力を持つ神の民になれるのではないのでしょうか。

年間第 28 主日 (マルコ 10:17-30)

年間第 28 主日 (マルコ 10:17-30)

手放したくないものを手放してイエスに従う

今週の福音朗読箇所は、皆さんもよく知っている箇所ではないかなと思います。ある人が「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」(17 節)と尋ねる場面から始まり、その人がどんな結末を迎えるかも、よく記憶しているはずです。

ただ、十分知っている場面であっても、味わってみる部分は残されています。たとえば、わたしたちは、イエスに永遠の命について尋ねた人が、「たくさんの財産を持っていた」(22 節)ことを知っています。

ところが、この人が金持ちであったことは、最後の最後に明らかになった事実です。つまり、前もって、「金持ちの人の質問だ」と決めてかからないほうがよいということです。彼は「何をすればよいでしょうか」と尋ね、イエスが十戒を示したとき、「そういうことはみな、子供の時から守ってきました」(20 節)と答えています。

金持ちであるかどうか、前置きになっていないと分かれば、この人の質問は実はわたしたちの質問なのだと考えることもできます。わたしたちもイエスに、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねたいし、その答えを聞きたいのです。

物語に登場する人の答えに、注目しましょう。「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました。」彼は、あと一言、何かを言いたいのではないでしょうか。「そうなんだあー。十戒を守っていればよいのですね。だったら安心です。」そんな意味でしょうか。

そうではないはずです。彼はイエスの答えを聞いても依然として不安なのです。なぜなら、彼にとって十戒を守ることは当然のことであって、そのレベルであれば、ここに居合わせている皆が、永遠の命にたどり着けるわけです。

同じ場面が、マタイ福音書にも収められています。第 19 章ですが、そこではこれまでの返事に、あと一言、付け加えられています。「まだ何か欠けているのでしょうか。」(マタイ 19・20) これは考えるヒントになるはずです。

「まだ何か欠けているのでしょうか。」この通りに彼が言ったかどうかは分かりません。もしかしたらマタイの追加かも知れません。それはともかく、あと一言付け加えたかったに違いないという考えは、マタイ福音書から十分伺えます。

彼は特別でありたかったのでしょう。あとで分かるように、たくさんの財産を持っていたから、周りの人には決してできない大きな依頼をイエスから託されてそれを成し遂げ、うらやましがられて永遠の命を受け継ぐ者と認められたかったのかも知れません。

あるいは、どんなにあら探しをしても塵一つ見つからない。それほど十戒を忠実に守っていることを、人々の前で讃えてもらいたかったのかも知れません。いずれにしても、イエスはこの人が期待していることに反応しませんでした。代わりに、この人が期待していないことを求めます。イエス

はこの人に、いちばん手放したくないものを手放すようにと求めたのです。わたしはあえて、「いちばん手放したくないもの」と言ったのですが、それにはわけがあります。この物語で登場した人は、たまたまたくさんの財産を持っている人でした。そのためイエスは、「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」(21 節)と求めました。

条件が変われば、イエスの求めるものは変わってくるのではないのでしょうか。旧約聖書を思い出しましょう。神はアブラハムに、イサクをいけにえとしてささげなさいと命令しました(創世記 22 章)。

アブラハムもきっと、たくさんの財産を持っていたことでしょう。けれども神は、財産には目もくれず、愛する一人息子をささげるように要求したのです。もちろん、イサクはアブラハムにとって「いちばん手放したくないもの」です。

また、列王記の中に、ソロモンの知恵を示す物語として、自分たちの間を裁いてほしいとやって来た 2 人の女性の話があります。同じ家に住んでいた 2 人の女性が時期を同じくしてお産をしましたが、一方の母親が眠っている間にうっかり自分の赤ん坊に寄りかかり過ぎて赤ん坊を死なせてしまいました。

母親は赤ん坊を取り替えて、生きている赤ん坊を自分のものにしようとしてくらみまします。当然、本物の母親が黙っているはずがなく、訴えに出たのです。そのとき、ソロモンが試しに「生きている子を 2 つに引き裂き、1 人に半分を、もう 1 人に他の半分を与えよ。」(1 列 3・25)と命じたのです。

赤ん坊をまんまと取り替えようとしていた母親は、それがいいと主張したのですが、生きている子の実の母親が、その子を哀れに思うあまり、「王さま、お願いします。この子を生かしたままこの人にあげてください。この子を絶対に殺さないでください」と言ったのです。ソロモンはすぐに、どちらが生きているこの実の母親かを宣言しました。

列王記のこの物語では、実の母親はわが子の「命」こそが、「いちばん手放したくないもの」でした。体が引き裂かれてしまえば、その子の命は消えてしまいます。そのため、泥棒と呼びたいほどの女性にわが子を託すことさえも辞さなかったのです。人によって、「いちばん手放したくないもの」は、それぞれ違ってくるのではないのでしょうか。

そこで、わたしたちに当てはめて、今日の福音朗読箇所を考えてみましょう。いったい、わたしたちにとって、「いちばん手放したくないもの」とは何なのでしょう。

名誉・名声を手放したくない。それを守るためなら、人をけ落としても構わない。そういう人もいるでしょう。人からどんなに笑われても、自分を見放さなかった親友を選ぶという人もいるでしょう。何か、自分だけの「いちばん手放したくないもの」があるのではないのでしょうか。

先週月曜日から水曜日にかけて、教区の広報委員が全国から集まる年に 1 度の研修会に参加してきました。わたしは一人の人に会い、話を聞いて大変感銘を受けました。その人は、それまで積み上げてきたものをすべて失い、いちばん手放したくないものを手放さなければならなくなりました。当たり前のことですが、「いちばん手放したくないもの」は手放したくな

いのです。けれどもその人は、いったん手放し、まったくの身一つになって、そこから新たに出発することを選びました。その、大切なものを手放し、一からやり直して今に至っている話を聞かせてもらい、偉いなあと思ったのです。心が洗われました。

もし仮に、いちばん手放したくないものを手放したとき、わたしたちには何が残るのでしょうか。きっと、何も残らないのだと思います。けれども、何も残らないはずの、その人の「すべて」を満たしてくださる方がおられるのです。過去も未来も失ったその人に、「今から、わたしに従いなさい」と言って、未来を用意してくださる方が、おられるのです。言うまでもありませんが、イエス・キリストだけが、それを可能にするお方です。

わたしたちは、このイエス・キリストを信じて生きていきましょう。たくさんのお金を持っていた人は、過去も未来も失うことになるかと恐れ、立ち去ってしまいました。

わたしたちは、イエスを信じたいと思います。「いちばん手放したくないもの」を手放して、希望を失ってもなお、イエスはわたしに未来を約束してくださるお方なのです。

年間第 29 主日(マルコ 10:35-45)

年間第29主日 (マルコ10:35-45)

報いとは関係なく、困難を受けて立つ

今週の福音朗読は、ヤコブとヨハネが自分たちの栄誉になるような約束を取り付けようとする場面から始まっています。前後の流れを確認すると、イエスは十二人の弟子を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話した後に、今日の出来事が続いています。

イエスは自分の身に起こる出来事をはっきりお話しになりました。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」(10・33-34)

この時、イエスの死と復活の予告はすでに三度目になっていました。ですから、十二人の弟子たちは、これはもう苦難は避けられないということを理解していたはずですが、どの程度理解していたかは別として、これは師匠であるイエスが苦しんで死ぬことになれば、わたしたちにも影響が及ぶのは必至だなとうすうす感じていたと思われます。

そんな中で、ヤコブとヨハネがイエスに約束を取り付けようとしているのです。何となくの保証が欲しかったのではなく、想像を絶するような苦しみ避けられないのだったら、そのあとの栄誉ぐらいはなければやってられない。そういう気持ちだったかも知れません。

しかも、イエスはご自身の苦しみと死のあとに、復活が用意されていることをはっきり言っています。復活がどんなすばらしい出来事か分からなくても、イエスさまも苦しみの後に輝かしい報いがあるのだから、後に続くわたしたちも苦しみのあとの報いを約束してもらおうではないか。だいたいこういったところがヤコブとヨハネの願いの根拠だったのでしょう。

2人の願いに、イエスはご自分の右に座る栄誉、左に座る栄誉を約束しませんでした。約束しなかったわけは2つあるでしょう。1つは、ご自分の復活の出来事は、苦しみの報いではないからです。もう1つは、苦しみは報いがなければ無意味なのではなくて、苦しみそのものに意味があることを知らせたかったからです。それぞれ、考えてみましょう。まず、イエスは死んで、そののちに復活するお方です。どのような死に方をしたにせよ、イエスは復活するお方です。死に勝利して、永遠の命を持っておられることを宣言するお方だからです。ですからイエスの復活は、苦しんだことの報いではないのです。苦しみは、苦しみそのものに意味と価値を見いだす必要があります。

次に、弟子たちは報いがあるのは当然だと考えています。苦しんだだけで終わるというのは、損をしていると考えているのかも知れません。自分たちにも苦しみが及びそうな予感がしています。苦しんだだけで終わりなのだろうか。師匠であるイエスのために苦しみを受けるのだから、イエスからその報いを受けても悪くないではないか。そう考えての行動だったのかも知れません。

けれども、イエスは右と左の席を約束しませんでした。約束がなかったことで、苦しみは報いとは直接結びつかないのだということが分かってきました。イエスは問いかけます。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。」(38節) 苦しみを苦しみとして、そのまま受け入れることができるか。イエスは知りたかったのです。

ヤコブとヨハネは、「できます」と答えました。これはイエスが期待していた通りの返事ではありません。ヤコブとヨハネは、右と左の席という報いを約束してもらいたかったので、「できません」とは言えなかったのです。引くに引けなくて、「できます」と言ったと考えた方がよいでしょう。

それは例えて言えば、弟子をいっさい取ろうとしない先生に弟子入りしたくて、「どんなことでもやります」と言っているようなものです。その人は、弟子になれるという報いを当てにせず、「どんなことでもやります」と言っているだけなのです。報いとは無関係に、どんなことでもやりますと答えているわけではないのです。

ヤコブとヨハネもそうでした。自分たちも何かしら栄誉を受ける当てがあれば、いくらでも苦しみを受け入れよう。報いのない苦しみは、考えられなかったのです。ごく最近あったことですが、中学生にこんなことを聞いたことがありました。

「なあ。神父さんの説教、聞いていて分かるね？」その中学生はすぐにこう答えました。「いちおう分かりますよ。難しいときもありますけどね。ちゃんと聞いてますから、安心してください。」

涙が出るほど嬉しかったですね。嬉しかったんですが、中学生に、その子は大波止ターミナルで英語の課題をこなしていたのですが、自分の説教のことがついつい心配になって聞くとところが、自分で修行が足りないなあと思ったのです。中学生からの良い返事が聞きたい。そういう報いをちょっぴりだけ当てにしているわけです。

やはり、報いを横に置いて困難に立ち向かおうとしないのが、人間の正直な姿かも知れません。今日は世界宣教の日に当たっていますが、報いを横に置いて、報いのことなどいっさい気にせず、宣教に目を向ける人になりたいと思います。わたしたちキリスト者がいるその場所が、宣教の場所です。

わたしが何かをしたからって、何も変わらないかも知れません。何も変わらなくても、宣教しましょう。報いを気にしないで、報われないことを恐れなくて、困難に立ち向かう力と勇気を、イエスに願いたいと思います。

年間第30主日(マルコ10:46-52)

年間第30主日 (マルコ10:46-52)

イエスは立ち止まり、わたしを呼んでくださる

わたしは大波止に少し早く着いた時に、椅子に座って周りの人を見渡すことがあります。癖なのかも知れませんが。周りの人を見渡して、興味深い人を見つけると、知っている人か、知らない人かは関係なく、次のようなことを思い巡らします。

「あの人は、今、どんなことを考えているのだろうか。」時間があると、よくこんなことを考えています。

わたしが興味を持って、「今この人は何を考えているだろうか」と推理する人はいろいろです。人生の晩年にさしかかっている人、わたしよりもはるかに若い人、わたしと同世代かなあと思える人、男性女性、いろんな人に興味関心を持って、言わば観察しているわけです。おそらくこんなことかなあと思当のつく人々もいますが、中にはどうしても見当つかない人々がいます。

具体的に何がどう分からないかと言うと、ある人々は、座っていてほとんど動きません。全く動かないので、考えていることを予想するきっかけがありません。何かを見ているようなのですが、何を見ているのか分かりません。どうやら、目の前のものを見ているわけではないようです。そこでひとまずこう考えました。

「あの人については、何を考えているのかは分からない。」

けれども、何も分からないというのも悔しいので、なぜ皆目見当がつかないのかを次に考えることにしました。そこで1つのことに思い当たったのです。それは、「その人の考えそうな場所に、一緒に立ってみる必要がある」ということでした。たとえば、わたしが興味深いなあと思った人が、わたしよりも早くから大波止ターミナルに座っていたとします。おそらく、その人が座りに来た時間に座って、立ち上がるまでそこにいなければ、その人のことは何も分からないかも知れません。ちらっと見ただけでは、早くから座り、そこで時間を使っている人の気持ちにはなれないということです。

反対に、大波止ターミナルに長く座っていない人の考えていることは、いろいろ考えつきます。その人のしぐさや、待っている様子を観察していると、あー、今こんな気持ちでここに座っているんだなあ、と何となく分かるわけです。対照的に、大波止ターミナルに30分も前から座って船を待っている人の気持ちは全く分かりませんので、30分前から一緒に座って研究する価値があると思いました。

さて、福音に入りたいと思います。目の不自由な人が登場します。イエスは弟子たちや大勢の群衆と一緒にエリコを出て行こうとしていました。ティマイの子バルティマイとイエスとは、エリコを出て行けば、この先2度と、会うことはないかも知れません。イエスでなければ、深い深い悩みを取り除いてはもらえないと直感した彼は、大声で叫びます。

わたしは、イエスのちょっとした動作に興味を持ちました。「イエスは立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた。」(10・49)という部分です。イエスが立ち止まったということに、特別な興味と関心を持ちました。目の不自由なバルティマイが「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」(47節)

とどれだけ叫んでも、多くの人々は叱りつけて黙らせようとはしましたが、立ち止まることはなかったのです。

弟子たちおよび群衆と、イエスとの違いを見逃さないようにしましょう。弟子たちと群衆は、立ち止まらなかったのです。ところが、イエスは立ち止まり、「あの男を呼んで来なさい」と仰ったのです。イエスは立ち止まることで、目の不自由なバルティマイと同じ場所に立ち、バルティマイの深い深い悩みを、理解しようとしたのです。イエスだけが、「あの大声で叫んでいる人は、今何を思っているのかなあ」と考えてくださったということです。

誰も立ち止まらずに、バルティマイを叱りつけて黙らせ、立ち去る危険性もありました。皆、イエスについて行くので精一杯だったのです。イエスに遅れたら、自分たちは今の時代に取り残される。イエスという流行の最先端に取り残されてしまう。乱暴な言い方かも知れませんが、そういう人々が群がっていたのです。ところがイエスが立ち止まったことで、すべてが一変します。皆が立ち止まらざるを得なくなりました。イエスが先に行かないのですから、イエスとともに立ち止まらざるを得ません。なぜ目の不自由な人1人のために足を止めるのか理解できていませんが、すべての人の目がイエスとバルティマイに注がれます。

バルティマイは、イエスが立ち止まってくださったことを誰よりも早く気づいたはずです。皆、イエスにくっついて動いている人々ですから、イエスが立ち止まったことで、全員が立ち止まり、自分に目が向いていることが手に取るように分かったのです。この時点でバルティマイにはイエスが見えていなかったわけですが、イエスの存在は手に取るように分かっていました。

誰も立ち止まらなかった中で立ち止まってくださったイエスは、目の不自由なバルティマイと顔と顔を合わせて話します。「何をして欲しいのか。」(51節) こんなことを言っているか、確信はありませんが、バルティマイはイエスの「何をして欲しいのか」という声を聞いただけで満足だったのではないのでしょうか。あとの結果がどうであれ、バルティマイは十分満たされていたのではないのでしょうか。

なぜかと言うと、イエスは自分のために立ち止まってくださったからです。日頃バルティマイは、誰かが立ち止まり、憐れんでくれなければ生きていけない存在だということをいやというほど思い知らされていました。今日もイエスと、イエスを取り巻く群衆が通り過ぎました。通り過ぎて終わる危険もありました。その心配を覆して、イエスは立ち止まり、心を配ってくださったのです。

バルティマイは誰にも言ったことのない願いを打ち明けます。「先生、目が見えるようになりたいのです」(51節)。誰にも言ったことがなかったはずです。これまで出会った誰も、目が見えるようにはできないからです。憐れんでくれることはできても、憐れみを受ける状態から解放し、自由にすることはできないからです。

この、生まれて初めて打ち明けた願いに、イエスは応えてくださいました。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」(52節) ここにもすばらしいやりとりがあります。マルコ福音書によれば、イエスは「よろしい。見えるようになりなさい」とは言っていないのです。バルティマイが、自分の不自由な目をいやし

てくださるのはイエスしかいないと信じていたこと、ここに彼の深い信仰を読み取って、「あなたの信仰があなたを救った」と、宣言してくださったのです。最後の最後、今日の福音朗読箇所結びも、今年あらためて読み返すと感動的なあと思いました。「盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」(52節)家に帰ったわけでもなく、自分の行きたいところに自由に出かけることにしたのでもなく、なお道を進まれるイエスに従ったというのです。イエスが先を急いでいる道とはどのような道でしょうか。それは、エルサレムへの道です。3度、ご自分の死と復活を予告なさった運命の場所です。その道に、バルティマイは従ったというのです。それはつまり、バルティマイがこれから残りの人生を使って、わたしを救ってくださったイエスを知るために、同じ場所に立ちたいと決意したということなのです。

今日の説教の最初に言いましたが、誰かのことをより深く知ろうとするためには、その人の立つ場所に立たなければなりません。かなり早くから大波止に来る人を知るためには、それと同じくらい早くから大波止で待ってみる。バルティマイを知るためには、バルティマイの立っている場所に足を止める。そして、イエスがどんな方かを知るためには、イエスが最期を遂げるエルサレムに、一緒に立つ必要があるのです。

バルティマイの行動は、わたしたちにも考えるきっかけを与えてくれます。わたしたちはイエスへの信仰を確かに持っていますが、わたしにとってイエスはどんなに大切なお方であるか、それほど突き詰めては考えてないかも知れません。つまり、イエスが立っている場所まで行って、わたしのことをイエスはどれほど大切に思っているか、確かめるまでは動いていないのです。

わたしたちは自分の置かれた生活の場所があります。それぞれ、違った生活の場所です。しばしばわたしたちは、この自分の置かれた場所からイエスを見つめているのです。イエスが先を急いでいても、イエスが「わたしはエルサレムに行く」と言っても、その場所まで行きますとは言わずに、自分の生活の場所から眺めるだけで終わっているのです。

これは問題です。あの人は何を今考えているだろうか。とことん知ろうとするならついて行くはずですが。同じように、わたしたちはイエスがわたしたちをどれほど愛してくださっているのか本当に知りたければ、イエスが行かれる場所に従うべきではないでしょうか。

ミサの中で、次のような言葉があります。「主よ、あなたは永遠の命の糧。あなたを置いて誰の所に行きましょう。」これは聖体拝領の前の信仰告白です。足を止めて、救いを求める人の心に寄り添ったイエスをもっともっと深く知るために、聖体拝領前のこの信仰告白を思い出しながら、イエスに従う決意を新たにいたしましょう。

諸聖人 (マタイ 5:1-12a)

すでに世にあって変わらない生き方がある

今日、諸聖人の祭日です。そして、馬込教会では 11 月最初の日曜日なので、馬込共同墓地で、追悼ミサを計画しました。典礼上の「死者の日」を記念するのは、明日 2 日が正式な日です。

今年の説教は、諸聖人ということをし少し頭に置いて、話したいと思います。まず、教会が誰かを聖人や福者として尊敬するようになるのは、必ず死者に対してのことです。生きている人を教会が聖人とか福者と認めることはありません。ここに集まっているわたしたちは全員生きておりますので、生きている限り、わたしたちは誰も聖人でも福者でもありません。念のため、聞いておきますが、もし死んでいる人がいたら、手を挙げてください。いませんよね。

もう少し話を進めましょう。教会はすでに亡くなった誰かを、聖人や福者として尊敬します。つまり、墓に眠っている人、すでに眠りについた人たちの中のある人たちが、神によって聖なる人々とされているのです。なぜ、亡くなった人々の中に聖人や福者が存在して、生きているわたしたちは聖人や福者に選ばれないのでしょうか。わたしはこう考えます。生きている人は、今後、置かれている状態が変わる可能性があります。流動的です。一定の生活をしてはいますが、がらっと変わる可能性があるわけです。

飲んでばかりで、朝になると起きられず、前の日にはミサに行く約束していた人が朝になるといつも起きることができなかった。そういう人が、ある時からがらっと変わり、家族の先頭に立ってミサに行くようになった。こういったことが、ないとは言えません。変わることがあります。

これに対し、すでに亡くなった人々は、置かれている状態が変わることはありません。すっかり心を入れ替えたりとか、道を誤ってしまうなどのことは起こらないのです。ですから、亡くなった人々に対して、神ははっきりとその人の状態を宣言することになります。「さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。」 (マタイ 25・34)

わたしたちには、神からのこのような宣言はまだ先のことですが、今わたしたちがミサの中で心に留めている人々、追悼ミサの中で思い出している、すべての亡くなられた人々は、先の話なのではなくて、今の話、今まさに神からの宣言を受けているに違いありません。ですから、わたしたちがミサの中で心に留めている人々は、今、幸いな人々なのです。

福音朗読に入りましょう。イエスはご自分を取り囲んでいる群衆を前にして、山に登り、教えます。「口を開き、教えられた」 (5・1) とあるのですが、教えると言うよりも、すでに幸いなのだと、勇気づけ、喜びを与えようとしているかのようです。

そして、もっと重大なことがあります。生きている人に、イエスは「幸

いである」と呼び掛けているのです。状態が変わるかも知れない、明日どのようになるのか分からない、そうした生身の人間に、イエスは「幸いである」と呼び掛けるのです。この点に、注目したいと思います。

わたしは、亡くなった人々は状態が変わらないので、神は聖人や福者にふさわしい人々にはその幸せを宣言すると、そう言いました。何か、イエスが今週の福音で呼び掛けている人々と、共通する点があるのでしょうか。生きているわたしたちがはっきり「幸いである」と呼び掛けられていることと、天の国での幸いと、何かつながっているのでしょうか。

わたしは、つながっていると思います。このように考えてみました。イエスが仰った「幸いな人々」は、その生き方を変えずに生きていくことができる人々です。すべて、拾い上げてみましょう。「心の貧しい人々は、幸いである。」「悲しむ人々は、幸いである。」「柔和な人々は、幸いである。」「義に飢え渴く人々は、幸いである。」「

「憐れみ深い人々は、幸いである。」「心の清い人々は、幸いである」「平和を実現する人々は、幸いである。」「義のために迫害される人々は、幸いである。」「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられる時、あなたがたは幸いである。」「

世を生きているわたしたちが、ずっと変えないで生きていける道が、ここに示されているのではないのでしょうか。物持ちになっている時期があったり、そうでない時期があったりします。健康に恵まれ、順調そのものである時期もあれば、健康を害したり年齢による衰えを感じたりして今日生きるのが大変だという時期もあります。すべての例を並べてはいませんが、わたしたちの人生にはあらゆる浮き沈みがあるわけです。

それでも、どんなに人生の浮き沈みがあっても、イエスが示した生き方は、ずっと変えないで生きることができるのではないのでしょうか。今生きている時に、イエスが「幸いである」と呼び掛けてくれるのは、この、変わらない生き方を選ぶ人々なのです。浮き沈みの激しい世にあって、変わらず、変えずに保つことのできる生き方は、まさに天の国の生き方の先取りなのではないのでしょうか。

そこで最後に、わたしたちが今日のミサの中で心に留めている人々のことを思い出しましょう。あなたの心にあるその人は、イエスが示した生き方に倣って生きた人々ではないのでしょうか。人生の激動を生き抜いて、どれか1つでもいいから、イエスが示した生き方に沿って歩んでいたなら、その人は天の国の生き方を先取りしていた人です。わたしはその人々に、イエスに倣って「幸いである」と呼び掛けたいと思います。もしさまざまな人生の浮き沈みに振り回されていても、深い海の底の部分では、生き方を変えずに、イエスの呼びかけに応えた人生が流れていたはずです。

わたしはその深い部分での流れを、信じたいと思います。その人を思い返す時、振り回された表面の部分ではなくて、変わらず、変えずに生きたイエスの示す生き方を、神も見てくださいっていると、信じたい

と思います。

わたしたちが心に留めているすべての死者が、諸聖人の列に連なる生き方、すなわち浮き沈みのあるこの世にあっても変えずに生きることのできる生き方を持っていた。小さな事でもいいから、ぜひそのような点を思い起こして、神に感謝しましょう。

そしてわたしたちも、変わりやすい世の中にあっても変わらない生き方ができることを、一人一人の生活の中で体験しましょう。その生き方は尊いのだと、周りの人に自信を持って伝えることができるよう、証しの力を願いましょう。

年間第 32 主日 (マルコ 12:38-44)

年間第 32 主日 (マルコ 12:38-44)

まだすべてを委ねて働いてなかった

今週の福音は、歳を重ねるごとに、難しい呼び掛けに聞こえる箇所だと感じます。「やもめの献金」について取り上げられている箇所ですが、イエスはやもめの態度を高く評価して、「この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」(12・44)と仰っています。

イエスは明らかに、やもめの態度を例に引いて、神に信頼して、すべてを委ねなさいと呼び掛けられているわけですが、わたしたちはおそらく、歳を重ねれば重ねるほど、この呼び掛けに抵抗を感じるのではないのでしょうか。理屈では分かっている、呼び掛けに応じられませんか、こちらの事情を並べてしまうのではないかと思うのです。

きっと、若い時代であれば、自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れるというようなことも、実行可能かも知れません。貯金を全部はたいて、裸一貫でやり直す。それはそれで冒険に満ちた、夢のある話です。けれども、そんな冒険も、歳を取ってからでは無謀に思えるのです。

店を構えたり、会社を興したりするのに、貯金も、家も、土地も、カネになるものは全部売り払って、次の夢にかけてみる。それは、若いからできるのであって、長く愛着のある土地や家を手放すことは、歳を取ってからでは絶対に無理。苦勞もしてきたし、自分たちの歴史が刻まれている。だから、誰にどう促されても手放せない。きっとそうだと思います。

それでも、イエスはやもめの献金に目を向けさせます。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。」(12・43)やもめが入れたお金は、額としてはゼロに近い額です。それでも、どんなお金であったかを考えれば、大変勇気の要る行為でした。

彼女の勇気は、神への信頼から生まれた勇気です。わたしを見守っておられる神は、わたしを決して見捨てたりはしない。わたしが無一文になっても、誰に笑われても、神はわたしを見捨てたりはしない。こうした神への絶対の信頼があったので、彼女は生活費を全部入れることができたのです。生活費を全部入れるということは、明日の運命を全部神に委ねたということです。

さてここまでのことは、わたしたちも子どもではないのですから、理屈は分かっているのです。理屈は分かっているのですが、じゃあわたしも真似してみよう、わたしなりに神に明日を委ねて、持ち物を手放そうと思っても、そう簡単にはいきません。現実はどう簡単ではないのです。手放してしまえば失ってしまう。その恐怖は、そう簡単にはぬぐえないのです。

簡単ではないですが、それでもイエスの呼び掛けに背を向けるべきではないと思います。わたしたちは神に信頼することを優先するために、

失う恐怖と向き合わなければなりません。そこで、身近な所で起こった2つの体験から、何か感じ取っていただけたらと思います。最近の話ですが、わたしが知っているある人のことである情報が耳に入りました。その人が、教会に行かなくなったそうです。わたしはビックリしました。わたしがその教会にいた時、顔を見ない日はないくらいだったのに、教会に行かなくなっているというのです。一体どうしたんだろう。何があったんだろうと思いました。

いろいろ聞こえてくる中で、わたしが1つ心配しているのは、何があったにせよ、教会に行かなくなったら、解決にならないのではないかなということです。その人の中で筋の通らないことがあって、もうついていけないと感じ、教会に行かなくなったのかも知れません。その人にはまだ、何か神さまに委ねることができないものがあったのではないかな。どうしても委ねきれない何かがあったのではないかな。そのことが気に掛かります。

もう1つの話をします。わたしは教区の広報委員長を務めており、その任務も4年が過ぎました。4年過ぎてみるとどこかでわたしの中には油断とか、隙ができてしまい、知らないうちに迷惑を掛けているのではないかなあと感じたのです。たとえば、原稿の依頼も最初の頃のようにていねいに頼まず、頭ごなしに押しつけるようになっていたのではないかなと感じたのです。

最近気になった原稿の依頼があります。わたしは1人の依頼者に、いつものように内容を分かりやすく書いたFAXを送って、原稿の依頼をしたのですが、引き受けてはもらえたのですが広報の事務の人から、「一声掛けてもらいたかったようですよ」と言われたのです。これは失礼なことをしてしまったかも知れないと、あとになって考え込んでしまいました。

時間をさかのぼって、電話で声を掛け、お願いし直すということもできません。実際に引き受けた時の様子を聞いてはいないのですが、やはり、礼を尽くしてなかったかも知れないなあと、事務の方の報告を聞いて申し訳なく思ったのです。

そこで、わたしは何かしなければと思い、行動を起こすことにしました。お願いの仕方が今ひとつ十分でなかったことを、直接行って気持ちを伝えることにしたのです。それこそ、電話を掛けてお詫びを言うこともできましたが、もっと直接気持ちを伝えた方が良いと思い、その人のもとに出向くことにしました。

やはり、行動を起こして良かったと思いました。わたしは、今回原稿を依頼した人のもとへ出かけて気持ちを伝えるまでは、今日の福音朗読の「大勢の金持ちがたくさん金を入れていた」という、そんな態度だったのだと思います。つまり、「毎月の教区報を作るため、ごらんなさい、こんなに努力しているんですよ。協力してくれるのが当然でしょう」そういう気持ちがどこかに隠れていたのではないかなと思ったのです。

けれども、わたしにはまだ自分をすべてさらけ出す勇気が足りなかったのだと思いました。原稿をお願いする人には、ちゃんと依頼の内容が分かるようにお願いしたのだからそれで十分だ。それ以上骨折る必

要はない。自分は正しいんだと言い張ろうとする気持ちが、どこかにあったのだと思います。

わたしのほうは、すべきことをちゃんとやった。これでは金持ちが有り余る中からお金を投げ入れているのと同じです。わたしがどう思われるかよりも、教区報が本当に教区民に喜ばれる広報紙となるように、自分の持っている物をすべて、できる努力を惜しまずいっさいを入れる。その努力が足りなかったと今回感じたのです。

わたしは頼む立場で、相手は引き受ける立場だ。その思いがあったかも知れませんが。いったん広報委員長と呼ばれてしまうと、無心で原稿をお願いしていた純粋な気持ちは失われ、原稿を依頼したのだから書いてくれるのが当たり前だというような気持ちが、どこかで捨てきれなかったのだと思います。

原稿の依頼をした人の自宅に直接出向いて、本当の気持ちに触れることができました。すべきことをすれば、それで十分だという、閉じこもっていた自分の殻を破って、気持ちよく相手に原稿を書いてもらうために、できるすべてをつぎ込む。その必要に、あらためて気付くことができました。

「努力してるでしょ。見て分かるでしょ。」こんな密かな考えが、隠れていたかも知れませんが。すべてを神への信頼に委ねて、残さず全部努力をささげる。十分と思い込んでいた努力をまた一からやり直す。そのための力を、登場したやもめから学び取りたいと思いました。

年間第 33 主日 (マルコ 13:24-32)

だれも知り得ないからこそ、懸命に努力する

今週の説教の準備には苦しみました。苦労したのではなくて、苦しみました。結果的に、原稿を形に残すのは、今日のミサがすべて終わってから、午後からということになりそうです。その辺の事情も含めて、分かち合いたいと思います。

今週、1つの講話を仕上げて、達成感を味わいました。ミサのお知らせで紹介した、「マリア文庫」に関わる講話です。「マリア文庫」は、長崎レデンプトリスチン修道院のシスターが代表を務めているボランティアのグループで、視覚障害者に奉仕するための集まりです。月に1度、テープを作成して、何百名もいるであろう会員に毎月お配りしています。90分のテープには、視覚障害者が必要としている日常の役立つ情報や、話題になっている本の朗読、また中田神父が担当している「宗教コーナー」など盛りだくさんの内容で構成されています。わたしの担当である「宗教コーナー」は、15分と決められていて、その中で毎回違った内容で心に働きかけるような講話をしています。これまで7年以上続けておりますので、もうすでに80回くらいは原稿を作ってそれを録音して、お届けしています。

今月提出分も、無事に作成しました。土台になっている経験は、インターネットの掲示板に、「〇日に伊王島に行きます。昼食をホテルで食べ、温泉につかります。時間があったら、教会にも立ち寄りしたいと思います」という書き込みが入ったことでした。この書き込みから始まった出来事を膨らませて、15分の宗教講話に仕上げます。

訪ねてくるという書き込みをした人は、予想に反し、午前中もおいでにならないし、午後になっても来る気配がありません。ずっと司祭館を離れないように気を付けて一日を過ごしたのですが、とうとうお会いできませんでした。時間が無くなって、教会までは足を延ばせなかったのかな。そんなことを思っていたのです。

その日の晩、インターネットの掲示板を何気なくチェックしてみたら、昼1時の時点で、「今日は風が強いので伊王島行きは中止しました」と当人の書き込みが入っているではありませんか。ちょっと残念な気持ちになりました。

ここから話が少し広がります。その日は確かに風が強くて、五島列島行きの船は、全便欠航していたのです。伊王島行きの船は運航したのですが、あの日船に乗って伊王島においでになっていたら、間違いなく船酔いしていたに違いありません。天気に対する受け止め方が、訪ねてくるその人と、わたしとでは違っていたのだなあとあらためて感じました。

こういうことです。長崎の大波止に、伊王島にお出かけしようと思っている人と、島に帰ろうと思っている人とがいます。伊王島にお出かけしようかなという人は、海上が荒れていると聞けば、船酔いが心配だなあ、延期しようか、そういう気持ちが働くと思います。

今日行かなければ次に行く機会を失ってしまうという人以外は、またの機会でも構わないわけです。

一方、伊王島にいる人は、海上が大荒れであっても、いったん出かけた先からは、何が何でも出てきた伊王島に戻る必要があります。伊王島が、その人が出て来て戻る場所であるか、単に出かける先の場所であるかで、間に横たわる荒れた海をどう受け止めるかは、大きく違ってくるわけです。わたしは、全面的に伊王島に住んでいる人間の立場に立って、何とかして来てくれるのだろうと判断してしまったのです。そこから思い付くことは、行き先が、出かける場所であるか、出て来て戻る場所であるかで、行き先に対する気持ちの強さは違ってくるといことです。伊王島に立ち寄りますと明言したとしても、その人にとって伊王島は出かける場所ではあっても、出て来て戻る場所ではありません。辛い思いまでして行こうとは思わないというのはもったもな話です。

さらに、話を展開します。わたしたちの生活の中にも、似たようなことはたくさんあるのではないのでしょうか。病院に行くのが嫌い。そんな辛い思いまでして病院のお世話にはなりたくない。こんなに辛いのだったらもう家に帰りたい。病院を嫌う理由は探せばいくらでも出てくるでしょう。

けれども、病院が、命をつなぐ場所だとしたらどうでしょう。ある人は、透析を受けていて、週に1回の透析を続けなければ、命を落としてしまいます。こんな人にとって病院は、単に出かける場所ではなくて、命をつなぐために、出て来て戻る場所なのではないのでしょうか。病院が、透析患者の自宅という意味ではありませんが、自宅でもとの生活を取り戻すための、出て来た場所に戻るための、必ず必要な通り道なのです。

もし病院嫌いのすべての人が、本来の健康な生活に戻るために、その通り道に病院があると考えたら、これまでとは違った対応を考えるようになるでしょう。わたしも歯医者は大嫌いですが、本来の健康な歯を取り戻すために、途中立ち寄ってしっかりアドバイスを受ける場所と考えると、やはり嫌い一辺倒ではいられなくなることがよく分かります。

わたしたちにとっては、「出て来て、本来戻る場所」こそが、何より大切な場所だと思うのです。もちろんすべての人に単純に当てはまる話ではないでしょう。施設に暮らしている人に、今いる施設があなたの戻るべき場所だと、そう簡単に言うつもりは決してありません。一人一人が、「出て来た場所に帰る旅路」を生活の中で見つけてほしいのです。

そして話の結論です。「出て来た場所に帰る旅路」は、わたしは一人一人の人生そのものだと思っています。わたしたちは愛深いお方から命をいただいて、命を与えてくださった方のもとに戻るまで、地上の旅をしているのではないのでしょうか。そして、この旅は命を与えてくださった方のもとに帰るためにどうしても必要な旅なのです。命を与えてくださった方がどれほど素晴らしい方か、どれほど愛深いかを、今この旅で知るためです。

こうして、11月分のマリア文庫に依頼されている原稿は出来上がりしました。とても満足しています。じつは今日のミサのための説教も、そうなる予定だったのです。それが、結婚式の仕事を終えてから原稿作成に取りかかった夕方、夜、夜遅くになっても、いっこうに書けそうな気配がしませんでした。

今日の福音朗読箇所最後のみことばの通りです。「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。」

(13・32) 今週の仕事として、マリア文庫の原稿はすらすらと書けたのです。

けれども日曜日のための説教は、今週に限っては、どんなに時間が過ぎても、頭を絞っても、何も出てこなかったのです。「夕方から時間を一杯使えば、何とかなるだろう。」わたしはこの時点で、「その日、その時」を自分で設定していたわけです。

イエスは今週わたしに、苦しみを与えてくださったのだと思います。「その日、その時は、だれも知らない。」そのみことばを前にして、思い上がりを砕いてくださったのだと思います。まあ何とかなるだろう。何ともならない経験をさせて、わたしにみことばへの真摯な態度を要求なされたのだと思いました。

わたしたちは、「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。」そう言われてしまうと、つい、だったら何をしてもしかたない、意味が無いじゃないかと思ってしまいます。そうではなくて、「その日、その時」は確実に救いの日なのだから、わたしたちは今、今を大切に、過ごしていく必要が出てくるのではないのでしょうか。その時がいつかは分かりませんが、救いのその時が来ることは確実なのですから、今を懸命に生きること、今を信仰とうまく結び付けて生きることが、わたしたちに求められていることだと思います。

最後に、わたしたちにとって、いちばん関心のある「その日、その時」はいつでしょうか。おそらく、「わたしはいつまで生かされているだろうか」という「その日、その時」ではないのでしょうか。それについて最後に考えて、今週の説教を終わりたいと思います。

もちろん、わたしの人生はいつ「その時」を迎えるのか、だれにも分かりません。だれにも分からない出来事について、人間は2通りの態度を取ることを考えました。だれにも分からないのだったら、気ままに過ごしていいじゃないか。それも1つの生き方でしょう。

けれども、「だれにも分からない、だからなおさら、今、今を大切に生きる」この生き方もあります。もちろん、どちらを選んで生きるべきかは明らかだと思います。そのことに加えて、今を懸命に生きる1つの心がけとして、「出て来た場所に帰る旅路」と捉えて生きてみてはいかがでしょうか。

愛深いお方から命をいただいて、命を与えてくださった方のもとに戻る「その日、その時」まで、地上の旅をしているのです。今、この時を懸命に生きて、信仰に結び付けながら生きて、命を与えてくださった方がどれほど素晴らしい方か、どれほど愛深いかを、今この旅で知ることとは、賢い人生の選択に違いありません。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)

王であるキリスト (ヨハネ 18:33b-37)

王であるキリストのもとで暮らす

今日は、「王であるキリスト」の祭日です。教会の暦（典礼暦）の考え方では、主の降誕を準備する「待降節」から1年の暦が始まって、今週「王であるキリスト」の週で1年が終わります。今週と、来週は、区切りとなる週です。できれば、覚えておいてほしいと思います。

ちなみに、先週は年間第33週でした。勘の良い方でしたら、「年間第30週あたりになってきたから、そろそろ教会の暦も1年の終わりだなあ」と見当つくようになります。ぜひみなさん、勘の良い人になっていただきたいです。

最近よくたとえに使う話ですが、昔、勘の良い人人を「蛍光灯」と言っておりました。けれども、今の時代の蛍光灯は、スイッチを入れたらパッと点灯するのです。ですから、昔の蛍光灯ではなく、現代の蛍光灯くらいには、パッとひらめいて見当をつける人であってほしいと思います。

今年の教会暦の最後の週に、ヨハネ福音書のイエスの裁判の場面が朗読されました。ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」（18・33b）と尋問しています。「ユダヤ人の王なのか」という呼び掛けには、いろんな意味合いが込められていたことでしょう。「ユダヤの国の支配者」「散り散りになっているユダヤ人を1つにまとめる権力者」「ユダヤ人が信じ、待ち望んでいる王による支配を実現する人物」そういう複雑な意味合いが含まれた質問だったと思います。

今述べたような意味合いで、ピラトが問いただしても、イエスはあまりそれには反応しませんでした。ピラトが聞きたいのは、ピラトの頭の中にある「王のイメージ」で描かれている姿かどうか、という点だったのです。

ピラトにとって、王とは1国の支配者、せいぜい、たくさんの国の支配者で、時の権力者でしょう。時の権力者であれば、権力争いに明け暮れ、ほかの国の王との争いや、内部分裂を避けることや、国民の理想をつねに気して力を示す人物のはずです。それなのに、イエスにはいっさいそのような雰囲気は見られないのです。そのため、「お前がユダヤ人の王なのか」という問いになったのでしょう。

イエスは国王のような王ではありません。ユダヤにはヘロデ王がいました。ましてや、ユダヤ人の力を結集して何かを企む人でもないし、単純な「ローマの支配からユダヤ人を解放するために待ち望まれた王」でもなかったのです。

イエスの次の言葉が、ご自身の考えをよく物語っていると思います。「わたしの国は、この世には属していない。」（18・36）イエスは、尋問したピラトが考えているような、1国の王、またいくつかの国の王ではなく、「人類の王」「すべてのものの王」なのです。今日はこの点を考えてみたいと思います。

イエスの国は、「この世に属していない」と言います。「この世に属し

ている国」は、どんな形をしているのでしょうか。まず、「この世に属している国」は、国境があります。隣の国や、対立する国とつねに領土争いをしています。「その島は、わたしたちの国のものだ」と言い合って、いつまでたっても解決しません。とても面倒で、不安定です。

イエスの御国はどうでしょうか。きっと、領土など全く縁のない国なのだと思います。すべての人が温かく迎えられ、どこまで行っても、どこでもイエスの導きが行き渡っている国です。

また、「この世に属している国」は、その国によってさまざまな法律や習慣があります。自分の国では当たり前の規則でも、別の国に行けばまったく反対の規則だったりします。「この世に属している国」の規則や習慣は、しばしばその国特有のものに過ぎません。

イエスの御国では、規則はどこにいても、どこでも同じです。すなわち、イエスの望みにかなうか、かなわないかが、すべてのものの基準なのです。イエスの声に従うことが、唯一の規則なのです。王であるキリストに従うこと。これだけが、イエスの御国で求められる決まり事です。

もう1つ考えてみましょう。「この世に属している国」では、王は国民から生活の糧を得ています。つまり国民から税を徴収し、国民が王を養っているのです。イエスは次のような問いかけをペトロにしたことがあります。「シモン、あなたはどうか。地上の王は、税や貢ぎ物をだれから取り立てるのか。自分の子供たちからか、それともほかの人々からか。」（マタイ 17・25）

イエスの御国では、誰も税金を取られることはありません。誰からも貢ぎ物を求めません。それどころが、イエスご自身が国民のために命をささげ、国民の命を救うのです。この世に属しているどんな国の王もなし得ない、驚くべきわざを、この世に属していない御国の王であるキリストがなし遂げます。

イエスの御国は、この世に属している国とは明らかに性格が違います。国境のない国、唯一の規則で導かれている国、王が民のために命をささげる国です。そこでわたしたちに問いかけられていることを考えましょう。わたしたちは、王であるキリストから、何を問われているのでしょうか。

わたしはそれを、聖パウロの1つの言葉で説明したいと思います。「主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。」（エフェソ 4・5-6）つまりわたしたちは、パウロの言う「すべてのものの上にあり、すべてのものの内におられるお方」を意識して、生きるようにと求められているのです。人が、わたしたちの暮らしぶりを見て、「誰かがあなたたちの上におられる暮らし方をしている。あなたたちの上におられる方は誰なのか」と感じさせる暮らしが大切です。「誰かがあなたたちの内におられる暮らし方をしている。あなたたちの内におられる方は誰なのか」そう感じさせる暮らしが、わたしたちに求められている暮らしなのです。ひとことで言うとそれは、「王であるキリストのもとで毎日を暮らす」ということです。わたしたちは典礼暦の最後の週を迎えています。こ

の1年、「王であるキリストのもとで日々を暮らしてきたか、思い返しましょう。もし、ふさわしく過ごせてなかったとしても、せめて今週1週間、こうした意識を持って、暮らしを調べてみましょう。

待降節第1主日(マタイ 3:13-17)

待降節第 1 主日 (ヨハネ 6:41-51)

おいでになる主を準備して待つ

もしかしたら、以前、話の例に挙げたかも知れません。浦上教会の助任司祭時代に、長崎原爆病院にいる病人のお見舞いに出かけていました。当時は訪ねていく時間が朝早くて、確か朝の 7 時頃に見舞っていた気がします。

いろんな人を見舞いましたが、その中で 1 人、今でも忘れない人がいます。寝たきりのおばあちゃんでしたが、この人はなぜか、同じ原爆病院内にいるカトリック信者の人を聞きつけては、わたしに連絡してくれていたのです。それも、同じ階の人ばかりではなくて、違う階の、おそらく本人とは会ったこともないのに、どの階に誰それという病人がいて、その人にもご聖体を運んであげてくださいと教えてくれていたのです。今になって考えると、わたしが受け持つ必要のある病人かどうかという問題もありましたが、当時は 20 代でしたので、ただただ感心して、「よくまあこのおばあちゃんは、新しい人を見つけてくるなあ」と思っていたのでした。

わたしには、いまだにこのおばあちゃんが別の病人を探して、教えてくれる謎が解けません。まったく動けないのですから。ベッドで起き上がることもすらできない人なのですから。もしかしたら、看護師にあれこれ尋ねて情報を集めているのかもしれない。

けれども、確認はどうやって取っていたのでしょうか。わたしが、言われるまま訪ねて行ってみると、紹介された人がちゃんとそこにいました。若い人だったり、割合年配の人だったり、男性・女性、いろんな人をこのおばあちゃんから紹介してもらいました。あまりにも見事なので、手品でうまく丸め込まれているのではないかと思ったくらいです。

このおばあちゃんは、新しく紹介してくれた人のことも、どんな様子だったのか次の見舞いの時に聞いてきます。ある時などは、紹介してくれた人が最終的には亡くなられ、亡くなったことが言い出せずに、元気でしたよと嘘をついたこともありました。

わたしは、このおばあちゃんから何かを学んだ気がします。それは、福音宣教ということです。おばあちゃんは、ベッドからまったく起き上がれない人でした。それなのに、原爆病院内を縦横無尽に、宣教活動していたのです。

趣味の合う人を病院内で探しているわけではありません。見ず知らずの、男性女性分け隔て無く、折が良くても悪くても、探してくれていたのです。福音宣教の基本を、すべてわきまえていると思いませんか？わたしは今も、このおばあちゃんの態度が忘れられないのです。

1 つ、このおばあちゃんに謝らないといけなことがあります。いつも通りお見舞いに行ったある日、おばあちゃんはその場にいませんでした。空きベッドになっていました。看護師の人に聞いてみると、おばあちゃんは亡くなっていたのです。いまだに、さようならを言えなかったことが心残りです。

わたしは、このおばあちゃんを活動に駆り立てていたものは何だったの
だろうかと考えました。誰かを見つけてきてわたしに知らせても、彼女
に何の得もないのです。もちろん神さまの前には功德を積み上げている
でしょうが、目に見えるメリットは何もないのです。

それでも、何のメリットもないのに何かをするはずがないのですから、
何かがあったはずで。亡くなるまで、カトリック信者を訪ねて回って
いたのですから。そこで2つ考えました。1つは、自分自身の生きがい
を持つために、できることをしていた可能性があります。もう1つは、
意識していなかったかも知れませんが、深い信仰が、彼女を動かしていた
可能性があります。

自分自身の生きがいのために、病院内の信者を探していたと仮定しまし
ょう。見つけるたびに、わたしに報告すると、わたしは喜んでいました。
それがひいては自分の喜びにもなって、役立っているという気持ちが増
していたかも知れませんが。寝たきりで、何にもできないのではないかと、
迷惑ばかり掛けていたのではないかとという気持ちに、大きな勇気を与え
ていたかも知れませんが。

もう1つ、彼女が知らず知らずのうちに信仰を土台にしてものを考えて
いたと仮定しましょう。彼女にはすでに、医学的なお世話はあるもはや何も
残されていなかったかも知れませんが。ただじっと、生きている。そんな
思いの中で、自分が生かされているのは、神の憐れみによると感じてい
たかも知れませんが。神の憐れみに、そのご恩に、どうにかして報いたい。
そんな気持ちになって、何とかしようとして、思い付いた可能性もあり
ます。

どちらの可能性にしても、彼女は困難をものともせず、福音宣教をな
し遂げたのでした。彼女に約束されているのは、父なる神からの「よく
やった。主人と喜びを共にしてくれ」という慰めだろうと思います。

さて福音に入りたいのですが、朗読箇所はイエスが再びおいでになる時、
「再臨」の時を描いています。不安と、恐怖が渦巻く中で、「人の子が大
いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくる」(21・27)のです。その時、
解放の時が近づいている人々は身を起こして頭を上げることになります。
不安と、恐怖は、すべての人が体験しますが、再臨の時に身を起こして
頭を上げる人々は、再臨の時までに何かを準備していたのです。

同じように、福音朗読後半でも、「その日が不意に罌のようにあなた
がたを襲うことになる」(21・34)とあります。その中でも、「起ころう
としているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことが
できる」(21・36)という人々がいるのです。何かを準備して、「その
日」を迎えることができた人々です。

わたしは、再臨の日に準備ができていた人とは、少なくとも、自分の喜
びのためではなく、周りの人の喜びのために何かをしてきた人だと思
います。できれば、自分が今日を迎えることができるのは神の憐れみのお
かげだから、神にどうにかして自分を使いたいと思って生きてきた人だ
と思います。

もっと短く言うと、再臨の日に準備ができていた人とは、再臨の主を待
っていた人のことです。ただぼやっと待っているのではなく、神の憐れ
みにこうやって応えていこうと、何かを実行して待つことです。それは

そのまま、今日お話ししたおばあちゃんに当てはまることでした。
待降節に入りました。わたしたちは救い主がおいでになることを確信を
持って待ちます。街角ですでにクリスマスに浮かれている人々は、何の
準備もせずにクリスマス気分を味わっています。わたしたちはそうであ
ってははいけません。ぼやっとして待つのではなく、準備をして待ちます。
身を起こして頭を上げる人々、人の子の前に立つ人々でありたいもので
す。

待降節第2主日(マタイ 3:13-17)

待降節第2主日 (ルカ 3:1-6)

谷は埋められ、山は低くされる

土曜日に、大明寺教会でたった1人残っている小学生に声を掛けて、ミサのお手伝い、「侍者」の練習をさせました。もちろん、日曜日のミサで侍者デビューをさせるためです。大明寺教会では、今日のこの日のミサから、侍者をしてイエスさまにお仕えしております。侍者は、見える形では司祭にお仕えしていますが、本質的には目に見えないイエスさまにお仕えしているのだとわたしは思っております。

さてその土曜日の練習ですが、小学1年生ということもあって、最初から全部を教えませんでした。全部教えると全部忘れる可能性がありますので、今回は説教が終わって、パンとぶどう酒、お賽銭などの奉納を受け取る部分まで、要するに前半部分までを教えたのです。わたしの考えとしては、次にもう1度練習の時間を設けて、後半部分を練習して、それで全体を教える予定でございました。

本当に素直な子なので、練習はスムーズに進んだのですが、それでも分からないことを尋ねる時はドキッとする時もありました。こんなことがありました。「神父さまのお話『説教』が終わったら、ちょっとお祈りをしたあとに、ぶどう酒とか、パンとか、献金とかを真ん中に行って受け取るんだよ。お説教の終わった後だけど、『説教』って分かる？」

「わかりません」「神父さまのお話さ」「神父さまって、どんな話をするんですか？易しい話ですか？」「易しくはないねえ。難しいかな～」

「大人の人は話を聞いて笑いますか？」「少し、笑うかなあ」かなり鋭い質問でたじたじでしたが、どうやら一回も話を聞いたことがないらしいなあということにははっきりしました。

もう1つおもしろいなあと思ったのは、奉納を受け取る部分まで終わって、それをさらにもう1度おさらいして、さて今日の練習は終わりだよと小学生に声を掛けますと、その子がこう言ったのです。「えー？鈴を鳴らす練習はないのかなあ。」

これには参りました。「鈴？そうかあ。鈴をどうしてもやりたいか。じゃあ鈴の練習もするか。鈴は6回鳴らすんだよ。」6回鳴らす場面を実演して教えますと、本人は安心したようでした。〇〇君にとって、侍者とは鈴を鳴らすことができる特権を与えられるということなんだなあ、今までやっていた侍者のおじさんの姿を見ていて、鈴を鳴らす場面が、何よりもその子の心を捉えていたんだなあとよく分かりました。

数年ぶりに侍者をする子が与えられて、神さまは何か、その教会に必要なものを与えてくれるんだなあと実感しました。すべての教会共同体に侍者が与えられるという意味ではありませんが、どの教会にも、何かを与えて下さって、「地の塩」「世の光」としての使命を果たしていけるようになさるのだなあと思ったのです。

福音朗読では、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れ、使命を果たす活動が始まりました。ヨハネが現れた時代に限ったことではありませんが、社会には谷があつたり、山があつたりします。社会で光が差さない部分、落ち

込んでいる部分を谷と表現していると考えてみると、明るい話題がないなあとか、この先じりじりと活力がなくなっていきそうだなあとか考えている人々に、希望の光を神は与えるわけです。

そのことを洗礼者ヨハネは、荒れ野で人々に告知させるのです。ただし、ヨハネが与えるのではなく、神が、来るべきお方を通して与えてくださると知らせます。

「山と丘とはみな低くされる」(3・5)とあります。問題が山積み、抱えている課題がいつこうに解決しない。そういう状況は、ため息の出る山のように見えるかも知れません。解決できそうにない現実を、神は解決に導いて低くして下さいます。この場合も、洗礼者ヨハネがそれを果たすのではなくて、あとに来られる方が必ずそうしてくださると、人々に告げるのです。

誰も、このような希望を語ることができなかった時に、神は洗礼者ヨハネを与えて下さって、語り掛けたのでした。「人は皆、神の救いを仰ぎ見る」(3・6)とは、未来を語る人がいなかった時に、洗礼者ヨハネが未来を語り、もうすぐ救い主が来ることを知ったということです。深い谷と、ため息の出るような山を、なだらかにしてくださる救い主が、すぐそこまで来ています。

洗礼者ヨハネの姿は、神がその民に、また時代に応じて何かを与え、力強く導いてくださることのしるしだと思います。わたしたちはどうしても、あれもないこれもないと考えがちですが、きっとどこかで見落としがあるのではないのでしょうか。何も与えてくれず、何も残してくれずに、神がご自分の民を放っておくとは思えません。きっと、何かを与え続けておられるはずです。

わたしは、主の降誕が、見えるしるしだと思います。幼子としておいでになった主は、豊かな場所に降りてきたものではありませんでした。家畜が避難する場所に、お生まれになりました。人が、人として扱われる場所ではなく、動物が世話を受ける場所に置かれたのです。それは、社会の谷底、光の届かない場所に、神は光を届けるというしるしだったのではないのでしょうか。

ぜひ、この待降節に、わたしたちの教会にどんな光が注がれようとしているのか、考えながら御降誕の日を待ちましょう。なかなか光が見えない中で、見落としているものがあるかも知れません。こんな形でわたしたちに「地の塩」「世の光」となれる材料を下さっていた。そんな気づきが与えられて、喜びをもって御降誕を迎えることができるように、聖霊の照らしを願うことにしましょう。

待降節第3主日 (ヨハネ 6:41-51)

ごく普通の準備に、神の偉大なわざが実現する

馬込教会のクリスマスの飾り付けの日になりました。クリスマスの準備を、見える形で表す絶好の機会です。ぜひたくさんの人に参加してもらって、立派に飾り付けてほしいと思います。

クリスマスの準備は、見える形での準備と、見えない準備とがやはり必要だと思います。そこでわたしは、見えない準備について今日少し話してみたいと思います。馬込教会のように、待降節が始まると待降節専用のローソク台を準備する教会があります。待降節第1主日にはローソクが1本灯され、第2主日になると2本灯され、そうやってローソクが増えていきます。今週はローソクが3本灯されて、色鮮やかです。

このローソクは、ある人にとっては心の準備を促すともし火となります。先週、ローソクは2つだったなあ。今週は、また1つ付け足されたなあ。わたしの中で、先週よりも今週と、少しは準備が進んだかなあ。そんなことを考えさせるきっかけのローソクになっているかも知れません。もう1つ、見えない準備の例を挙げると、クリスマスの前のゆるしの秘跡です。ゆるしの秘跡を通して、心の準備をします。これも、見えない準備と言えるでしょう。そこで、思い出に残る、ゆるしの秘跡の話をしたいと思います。

確か、クリスマス前のゆるしの秘跡だったのだと思います。告解場に座っていて、足もとからしんしん冷えて、「あ～、誰も来んやっか（誰も来ないじゃないか）」と思っていた時のことです。1人の男性が告白しに来ました。その男性は、20年ぶりに告白しに来たと言いました。

これ以上は秘密を守る必要がありますので言いませんが、わたしの心にはとても温かいものが伝わってきて、その日の2時間ほどのゆるしの秘跡の間、まったく寒さを感じることなく務めを果たすことができたのを覚えています。もう15年以上前のことなので、懐かしく感じます。

わたしは、当時の主任司祭に、その日に起こったことをどうしても話したくて、ゆるしの秘跡に20年ぶりに来たという人がいましたと話したのです。もちろん誰かも分かりませんし、来たことだけしか話していませんでしたが、主任司祭は「良かったなあ」と言って喜んでくれました。今になって思うと、あれは神さまからのステキなクリスマスプレゼントだったのかなあと思います。

福音朗読に入りたいと思いますが、人々は洗礼者ヨハネのもとに来て「では、わたしたちはどうすればよいのですか」(3・10)と尋ねます。それぞれ、いろんな立場の人々が、ヨハネの促す回心を実行したいと心の底から思っていたのです。

ヨハネの返事は、ごく普通の実践的な指示に留まりました。福音朗読の繰り返しになりますが、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」(3・11)とか、「規定以上のものは取り立てるな」(3・13) また、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せ

よ」(3・14)と勧めます。皆があっと驚くようなことではなく、毎日の生活で、毎日できることが、ヨハネの勧めた回心の実践だったのです。

わたしも、ヨハネのもとに行って、「わたしは、何をしたらよいでしょうか」と問いたい気がします。おそらく、毎日できることをヨハネはわたしに命じるでしょう。ヨハネが命じる回心のわざは、何を言わんとしているのでしょうか。

こう言うことかも知れません。だれもがあっと驚くことを見せびらかすよりも、毎日できること、今日しなさいと言われて今日できることを続けることのほうが、回心のわざとしては価値がある。そういうことなのかも知れません。そして、この当たり前のようなことを当たり前に続けていく中に、神さまのあっと驚く働きがある時降りて来るのではないのでしょうか。

当時の、洗礼者ヨハネが勧めた、ごくごく自然な回心のわざを実践している場所に、イエスがおいでになりました。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

「そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」(3・16-17)人間では決してなし得ないわざが、イエスによってなし遂げられます。それも、あっと驚くような回心を果たしている場所にイエスがおいでになるのではなく、ごく普通の、毎日できることを繰り返しているその場所に、イエスはおいでになるわけです。

このことでわたしは、15年前のクリスマス前のゆるしの秘跡を思い出すのです。「あ～寒い。誰も来んやっか」と文句たらたら告解場に座ったわけですが、神さまは1人の男の人を遣わしてくださいました。毎年、クリスマス前のゆるしの秘跡の時間を設けたことで、その人はやって来ることができたわけです。

いつ来るか分からない人を、いつ来るか分からないからと言って待たないのでは、きっとその人と出会えないのだと思います。20年ぶりにやって来るその人と出会うためには、20年間、毎年毎年、同じことを同じように繰り返して待っていないと、出会えないのかも知れません。20年前と、告白をした神父さんは違っていたかも知れません。けれども、20年前から、毎年変わらずクリスマス前のゆるしの秘跡を続けていたので、その人は告解場に座ったのかも知れないなあと思ったのです。司祭にとって、司祭にできる当たり前のことを、当たり前に果たしているその場所に、神はあっと驚くわざをなし遂げられるのだと思います。

神の独り子の降誕は、神が行うわざの中でも、最上のわざ、あっと驚くわざだと思います。その、神にとってもあっと驚くわざは、人間があっと驚く回心を準備していたから与えられたわけではないのです。救い主を、いつも通りに、いつもの形で準備しているところに、与えられたのです。わたしたちは、この神の不思議ななさり方を、じっくり思い巡らせたいと思います。

待降節第4主日（ルカ 1:39-45）

待降節第4主日 (ヨハネ 6:41-51)

あなたの「挨拶」は聖書的な挨拶ですか

御降誕を直前に控えているこの待降節第4主日に、福音朗読は洗礼者ヨハネの母エリザベトと、イエスの母となるマリアを取り上げています。マリアが、ザカリアの家を訪ねて、エリザベトに挨拶します。今日は、聖書の中に出てくる「挨拶」について考えてみたいと思います。

マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの4つの福音書を通して「挨拶」という言葉が何回出てくるかを調べた所、13箇所見つかりまして、そのうち1箇所は日本語では「挨拶」という訳が入っていますが(ルカ7・45)、英語では挨拶に当たる言葉が見つかりませんでしたので、12箇所が実際には関係していることになります。

12箇所出てくる「挨拶」の場面をもう少しよく見てみると、はっきり2つの種類に区別されます。1つは、日本人がふだん考えている「挨拶」です。たとえば、イエスが弟子を宣教に派遣する場面で、次のような指示を与えて送り出しています。

「財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。」

(ルカ10・4) ここで言う挨拶は、「やあこんにちは。いい天気ですね」というような挨拶で、日本人にもよく分かる種類の挨拶です。この、「日本的な挨拶」が、12箇所のうち7箇所現れます。

あとの5回の挨拶ですが、これは日本語の「挨拶」では括れない場面です。たとえば、マタイが記すイエスによる弟子の派遣の場面で、「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。」(マタイ10・12)と言っています。わたしたち日本人は、「平和があるように」と挨拶しません。つまり聖書に現れる挨拶の中には、日本人の感覚で掴みにくい「聖書の世界の挨拶」という感覚があるということです。この点を、まず押さえておきましょう。

では、「聖書の世界で考えられている挨拶」には、どのような内容が含まれているのでしょうか。先ほど紹介した「『平和があるように』と挨拶しなさい」とのイエスの指示からすると、聖書の世界で交わされる「挨拶」には、「こんにちは。お元気ですか」以上の何かが含まれていることが分かります。

さらに考えを進めるために、マリアに関わる例を拾ってみましょう。

「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」(ルカ1・29) マリアにかけられた挨拶とは、天使ガブリエルの「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」(ルカ1・28) というものです。

これは、日本人の感覚から言うと、「祝辞」に当たります。つまり聖書の世界の挨拶には、「祝辞の意味合い」「相手の祝福を願う意味合い」が含まれるということです。そう考えて福音書に出てくる挨拶を読み返すと、なるほどねと思います。「日本的な挨拶」と区別される挨拶の場面は、すべて「相手の祝福を願う」という意味合いがあるのです。

5つとも、ざっと目を通してみましょう。「その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。」（マタイ 10・12）「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」（ルカ 1・29）「（マリアは）ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。」（同 1・40）「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。」（同 1・41）「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。」（同 1・44）
みごとに当てはまります。まとめると、聖書の世界で「挨拶」は「こんにちは。お元気ですか」に終わらないということです。相手の祝福を願い、相手に祝福を送り届ける。それが聖書の世界で言う「挨拶」の意味合いなのです。

聖書の中の挨拶は今確認できました。ではわたしたちは、この聖書の世界の挨拶とどのような関係にあるのでしょうか。「聖書の世界の挨拶は分かるけれども、ここは日本だから、関係ない」ということでしょうか。わたしは、そうであってはいけないと思います。むしろ、聖書の世界での「挨拶」の役割を積極的に取り込んで、日本における「挨拶」の役割を塗り替えるような気持ちを持ってもいいのではないかと思います。

ということです。日本には、カトリック信者が 40 万人ほどいると言われています。日本の人口がざっと 1 億 2750 万人だとすると、318 人に 1 人の割合になります。この、318 人に 1 人しかいないカトリック信者が、「こんにちは。お元気ですか。神さまの祝福がありますように」と挨拶をすることで、日本的な挨拶が、聖書的な意味合いの挨拶に塗り替えられるのではないのでしょうか。

もちろん、声に出して「神さまの祝福がありますように」と言うのは難しいかも知れません。わたしもたぶん声には出せないと思います。けれども、そんな気持ちを込めて挨拶をすることは、可能なのではないのでしょうか。

わたしが、日本的な挨拶の中に聖書的なものの考え方を取り入れまいと話している理由は、別のところにもあります。この日本では、聖書にしか出てこないはずの言葉がちゃっかり日本語で使われているのに、聖書的、あるいはキリスト教的な意味が完全に抜き取られて、いわば盗作されている言葉があるからです。

すぐに、2 つ思い付きます。「洗礼」と「三位一体」です。プロ野球で初登板のピッチャーがめった打ちに遭い、火だるまになったとしましょう。翌日の新聞には「彼はプロの洗礼を受けた」と書き立てられます。当たり前のように「洗礼」という言葉が使われていますが、意味はまったく違っています。これは聖書の言葉を勝手に使っているいわば「盗作」です。

小泉純一郎さんが総理大臣だった時、「三位一体改革」という言葉が盛んに使われました。意味は横に置いて、言葉だけ借りてきての「盗用」です。日本語はどんな言葉でも探してきて、いつの間にか意味を横に置いて、日本で通用させているのです。本当の意味を、本当の使い方を、日本の中で取り戻すために何か行動を起こす必要があるのではないのでしょうか。

「挨拶」の話に戻りますが、一方で聖書本来の意味、キリスト教本来の意味を持つ言葉が日本で乱用されているので、本来の姿に立ち帰らせるよう行動を起こす必要があるでしょうし、日本人がこれほど、もともと持っていなかった言葉を巧みに取り入れる国民なのであれば、「挨拶」に、わたしたちが積極的に関わって、「聖書的な意味合い」を少しずつ浸透させるなら、ひょっとすると成功するのではないかということなのです。

今は、318 人に 1 人であっても、40 万人全員が「こんにちは。お元気ですか。神さまの祝福がありますように」との思いを込めて挨拶をすれば、日本語の挨拶の意味合いは、いつか塗り替えられるのではないのでしょうか。

マリアは、エリザベトに挨拶します。「マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった」（1・41）のです。マリアの挨拶に込められた祝福が、エリザベトのお腹にいたヨハネを喜び踊らせたのです。

わたしたちも、挨拶を交わす相手に、「祝福」を願いましょう。まずは、ミサの中での「平和の挨拶」からです。「主の平和」という挨拶は、「主のこんにちは」という意味ではありません。「主の平和が、あなたの上にありますように」という意味のはずです。

日本語の挨拶ですが、聖書的な意味合いを心に留めて挨拶し合うことで、この日本にキリスト教的な価値観、福音の種蒔きをしていくことができるように、機会あるごとに実践してみましょう。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

民全体に、救い主は与えられた

主の降誕、おめでとうございます。今年も無事に、降誕の喜びを迎えることができました。イエスの誕生を記すルカ福音書の朗読箇所から、今年の降誕のメッセージとして2つの点を示したいと思います。1つは、「羊飼いが、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つける」という点です。もう1つは、幼子の誕生が、「民全体に与えられる大きな喜び」であるという点です。

ヨセフとマリアは、皇帝の勅令に従って住民登録をしにベツレヘムに向かっていたのですが、その途中でマリアは月が満ちて、初めての子を産みます。ヨセフとマリアは、幼子イエスを布にくるんで飼い葉桶に寝かせます。宿屋を見つけることもできず、家畜小屋のような場所で留まっていたのでしょう。

この幼子を最初に訪問したのが、羊飼いでした。羊飼いは、なぜお生まれになった救い主を最初に訪ねることができたのでしょう。確かに、天使が「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」と予告してくれましたが、それだけで見つけることができるものなのでしょうか。

わたしはこんなことを考えました。羊飼いは、家畜である羊の番をしながら夜を過ごします。羊飼いのために、村のはずれのあちこちに家畜小屋があったのかも知れませんが、彼らは心当たりのある家畜小屋を訪ね回っているうちに、救い主にたどり着いたのではないのでしょうか。いくつもの家畜小屋があったとしても、彼らが日頃からそれらを利用していたとすれば、たやすく見つけることができたでしょう。

羊飼いが布にくるまっている乳飲み子を見つけた様子には、もっと大切な意味があります。出来事が、人間の歴史の中心ではなく、外れた場所で起こったということです。人間的な歴史を考えれば、今話題の中心は住民登録です。支配されている領土で、全住民を対象に、人口調査が行われているのです。実際、ヨセフとマリアも、登録のためにベツレヘムに上って行ったのです。マリアのお産のために、ベツレヘムに向かったではありませんでした。

ところが、神の計画の中心は、人間的な計画の中心部にはなかったのです。人間が今一番関心を持っている場所ではなく、外れていると思われる場所で、神さまの計画の中心が、動き始めたのです。

これは、よく考える必要があります。わたしたちもふだんの振る舞いを考えると、どうしても人間的な計画が暮らしの中心になっています。仕事が入ると、ミサに平均的に参加している人でも、仕事に行かざるを得ません。考えの中心は、やはり生きるために働かなければならない、仕事や家庭のことを中心に考えざるを得ないと思っています。

その思いは、おそらくどうにも変えられないでしょう。わたしもそのことを、間違っていると言う勇氣はありません。ただ、神の計画の中心は、人間が考えている中心とは少し違う場所にあることを知ってほしいので

す。この特徴は、救いの歴史という大きな枠組みだけではなくて、あなたの救いという枠の中でも同じです。あなたを救おうとしている神の計画の中心は、あなたが中心に考えていることとはちょっと外れた場所にある。そのことに気づく必要があると思います。

次に、幼子の誕生は、「民全体に与えられる大きな喜び」です。「民」と言いましたが、人類全体と言ってもよいでしょう。クリスマスという名で祝っているこの日が、人類全体にとって、大きな喜びをもたらす出来事なのです。

そこで、すべての人が今日をどのように迎えたのか考えてみましょう。ある人は、幸せいっぱいこの日を迎えたことでしょう。当面の心配事もない中で、無事に今日を迎えることができました。素直に、今日を祝う気持ちが与えられていると思います。

違う人たちもいます。今日を、悲しみの中で迎えている人々もいるはずです。わたしは12年前、12月16日に自分の主任司祭が肺炎で亡くなって、10日も経たないうちにクリスマスを迎え、お祝いの気持ちになれなかった年がありました。どうやってクリスマスのメッセージをミサの時に伝えればよいのか、途方に暮れていました。

けれども、そんな沈んだ気持ちの中でも、何かが与えられたのです。わたしが、クリスマスの希望のメッセージをその教会で語らなければ、誰が希望を語ることができるのでしょうか。わたししかいないのだと思った時、何かが与えられました。わたしはその年、1997年に、次のような説教をしています。

（ですから）すべての「恐れ」から解き放たれて、今わたしたちは幼子の誕生を喜び祝うのです。「（主任司祭が今年も生きていて、）去年と同じクリスマスのはずだったのに」という恐れ、「こんな時にクリスマスどころではない」という恐れ、（一部省略）それらすべてから解放されて、今こそ、おおいに喜び合いましょう。幼子は来たのです。この〇〇教会に来たのです。誰もが、一筋の光を探し求めているところに来たのです。

希望が見いだせない人にも、幼子イエスは希望としておいで下さいます。誰にも慰めてもらえない、それほどの深い闇の中にある人にも、幼子は喜びとして与えられるのです。神が、その御子を、民全体にお与えくださったからです。すでに幸せを感じている人だけではありません。深い淵にある人にも、救い主は与えられたのです。だからこそ、互いに今日この日を喜び合いましょう。

巡回教会のここ大明寺教会では、説教のあとに幼子の洗礼式が控えています。ある保護者は言います。「子どもが自分で判断できるようになってから洗礼を受ければよいではないか。」これは、人間的な計画を中心に据えて考えた結果です。自分の判断で決めればよいではないかと言っているのですが、しばしば神の計画の中心は、それとは少し外れた場所で始まるのです。そして、この神のなさり方を受け入れる人こそが、神の計画に育てられて育つのです。

今日ここにおいでになっているご家族は、人間の思いを超えて働く神の思いに、わが子を委ねようとおいでになっています。大いに歓迎いたします。そして、今日すでに人間の思いを超えて働く神のわざを受

け入れることで、いつか、困難や理解に苦しむ出来事を乗り越えなければならない時に、神がいつもそばにいて、神がわたしたちにも働いてくださることを実感できるようになるでしょう。
それでは、洗礼式に移ります。共同体全体で、見守り、見届けることにしましょう。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

人は、神が語り掛けることのできる唯一の存在です

クリスマスの朝、主の降誕の日中のミサは、福音朗読がヨハネ福音書になっています。朗読を聞いて、皆さんも感じたかも知れませんが、とても抽象的で、救い主が幼子となってお生まれになったことを祝う御降誕には、ちょっと扱いが難しい箇所だと感じます。その思いが、これまでずっとぬぐえませんでした。

けれども、今年はちょっと違います。わたしの中に、何か、語るべき内容が降りてきまして、選ばれたヨハネ福音書の朗読箇所が、御降誕を黙想するためのすぐれた材料を与えてくれることが見えてきました。この点を、皆さんと分かち合いたいと思います。

与えられた朗読箇所は、ヨハネ福音書の始まりの部分です。聖書は読みやすくするためにまとまりごとにタイトルが付けられています。今日朗読されているヨハネ福音書の冒頭部分には、「言（ことば）が肉となった」というタイトルが付けられています。ここから、今日の物語全体の中で、「言（ことば）」が大切なのだということが伝わってきます。

さらに、「言（ことば）」に工夫が加えられています。人間が使う言葉と区別するために、「言う」という漢字に「ことば」というふりがなを付けて読ませています。この表現で、「神のことば」「御言葉」ということを表しているのです。「神のことば」が「肉」となったというのです。「肉となった」という表現も、「人間となった」とは言わず、「この世」に属するものという意味を強調して言っています。

「神のことば」が、「肉」となりました。このことで、何が言いたいのでしょうか。わたしは、長いこと勘違いして理解していたかも知れませんが、神が、わざわざ、人間となってくれたんだなあ、有り難いなあという理解を、長く持っていたのです。

けれども、今年は、違った考え方を示したいと思います。わたしはこれまで、「神のことばが、なぜ人間となったのか」ということを考えてなかったと気がついたのです。なぜ、神のことばは人間となったのだろうか。それは、神のことばを曲がりなりにも理解できるのは、この世にあって人間しかないからなのです。ご自分が造られた生き物の中で、人間だけが、神のことばを理解できるので、人間となって、語り掛けに来たのです。

人間は、神のことばを理解できると言いました。ところが実際は、今日の朗読箇所にあるように、「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」（1・11）のです。理解できるはずなのに、理解しようとしなかったのです。

このことを、イエスの御生涯と具体的に重ねていきましょう。神のことばが、人間に語り掛けるために、肉となってくださいました。人となった神のことば、イエス・キリストは、人間が神のことばを受け入れてどのように人生を歩むべきかをご自身の生き方をお示しになります。

たとえば、少年時代に、イエスは神殿に留まっておられたことがありました。父なる神と、少年時代から親しく過ごす。その姿を学ぶことができると思います。さらに宣教活動に入られてからは、しばしば静かな時間を選んで、騒々しい場所を離れて、父なる神と親しく祈る時間を持ちました。

そして最後まで、父なる神のみ心に適う道を選び、危険を避けようとするれば避けることもできたのに、十字架上で命をささげたのです。これらは、「神のことばを理解できる人間」に、神がその独り子を通してしめされた生き方の模範、歩むべき道だったわけです。

その結果はどうだったのでしょうか。「世は言を認めなかった」（1・10）「民は受け入れなかった」（1・11）というさんざんな結果だったのです。それでも、受け入れた人々もありました。「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」（1・12）この受け入れない人と、受け入れる人に別れていく姿は、今の現実でもあると思います。神のことばを理解できるはずなのに、理解しようとしらない人々が、実際にはたくさんいるのです。

では、この現実の中で、わたしたちには何が求められているのでしょうか。わたしは、本来の姿に立ち帰るように、働きかけることが求められているのだと思います。あなたも、あなたも、神のことばに真剣に耳を傾けるなら、神のことばが理解できるのです。

人間が、どのように人生を生きるべきかが分かるはずですが、神の望みを探し求めながら生きていくべきだと、理解できるはずですが、こうした本来の姿に、1人でも多くの人が立ち帰るように、働きかけてください。このメッセージを、「肉となった言」は、語り掛けているのではないのでしょうか。

そこであらためて、静かに眠る幼子をおの目に焼き付けましょう。ここに眠る救い主は、「言が肉となった」お方です。今は語らなくとも、わたしたちに人間の本来あるべき姿を語り掛けるお方なのです。

人間だけが、神のことばを理解できる存在です。あなたが出かけて行って、神のことばを理解して生きる人間本来の生き方を生活の中で示してくださいと、幼子イエスは存在そのもので訴えかけているのです。

「言」は「肉」となりました。わたしたちは、神のことばを理解できる唯一の存在です。もっともっと、理解できてなかったことにも目を開いていただけるよう、幼子イエスに恵みを願うことにしましょう。

聖家族 (ルカ 2:41-52)

イエスがいてくださる家族を目指そう

今年最後の日曜日になりました。教会の典礼としては、すでに暦は新しくなっているわけですが、わたしたちの感覚はやはり年末という感覚があります。福音朗読箇所から、聖家族のお手本をわたしたちも写し取ることにはしましょう。

考えるきっかけとして、ヨセフとマリアが「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」

(2・48) と声をかけた時の、少年イエスの答えを取り上げたいと思います。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」 (2・49)

イエスの答えは、2通りの受け止め方が考えられます。「本当に、わからないのですか」と、両親を問い詰めている可能性と、「ご存じのはずです」と、確認を求めている場合です。ここでは、少年イエスに両親を問い詰めるつもりは全くないでしょうから、あえて言葉を補うと「どうしてお捜しになったのですか。(あなたがたもご存じのように) わたしが自分の父の家にいるのは当たり前でしょう」という意味に取るべきです。

「あなたがたもご存じです」「わたしは自分の父の家にいる」ヨセフとマリアは少年イエスの答えに面食らったことでしょう。ヨセフがどのような受け止め方をしたのかは分かりませんが、マリアはいつか分かる日が来るまでずっと思い巡らしたようです。「母はこれらのことをすべて心に納めていた。」 (2・51)

わたしも、少年イエスの神殿での出来事を機会あるたびに思い巡らしています。少年イエスが、神殿に留まっておられる。少年イエスは、そのことを「当たり前だということを、知らなかったのか」と返している。どういう事なのだろうかとずっと考えています。

そうして、わたしの中で1つの考えがまとまりました。ヨセフとマリアは、少年イエスを捜し回っています。きっと、他のことはすべて横に置いて、捜し回ったのでしょう。なぜなら、少年イエスは、ヨセフとマリアにとって何よりも大切な宝だからです。家族として、何よりも大切なものを見失って、見つけ出そうと必死に捜して、ついに神殿で少年イエスを見つけました。

現代人にとって、また現代の家族にあって、イエスはどんな存在でしょうか。ヨセフとマリアのように、何よりも大切な宝でしょうか。他のことはすべて横に置いて、捜すべき相手と考えているのでしょうか。もし、そう考えているとしたら、あらゆる場面に、あらゆる出来事に、まずイエスを捜し求めるはずで

今年1年の生活を振り返ってみました。生活の中で、イエスを何よりもまず捜し求める生活だったでしょうか。その時々で、果たしている務めはいろいろですが、その務めの中で、人に気に入られたいとか、人から感謝されたいとか、誰かを納得させたいとか、自己中心的な目的を第一に

捜し求めていたのではないだろうか。そんなことを考えました。
そこへ、イエスは答えを示すのです。「なぜそれほど大切でもないものを捜し求めているのか。（ご存じのように）捜し求めるものはわたしである。」何よりも大切なものを捜して毎日を過ごしているつもりですが、実際にはずいぶん遠回りをしていたかも知れません。求められているものを日々こなしていますが、その中心は、イエス・キリストでないときがたくさんあった。反省することばかりです。

お一人お一人、生活に重ねて考えてみましょう。ヨセフとマリアのように、何よりも大切なものを捜し求めて毎日を暮らしています。必死になって捜していますが、見つからずに、あきらめかけて教会に行ってみると、そこにいちばん大切なものを見つけるわけです。イエスは皆さんにこう言っています。「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」

教会に行ってみると、いちばん大切なものが分かるようになります。いちばん大切なもの。それは、目の前のものではなく、イエス・キリストがそばにいます。しばしば、1週間働いて、大切なものを手に掴もうとしているけれども、掴んだものはどれも消えて無くなる物、本当に大切なものではなかったりします。

家族皆が、いちばん大切なものを身近で捜そうとしているのですが、見つかりません。そして教会に来てみて、あー、いちばん大切なものは、イエス・キリストだったのではないかと気づきます。

実はわたしたちは、どこへ行っても、どこにいても、イエスがそばにいてくれたのではないのでしょうか。わたしたちを、何よりも大切に思っているイエスがそばにいて、ある時は忙しさに気付かなくなってしまう、仕事を中心だ、給料を中心だ、家族を中心だと思っています。

けれども、仕事の中にも、家族の中にも、イエスはそばにいたのではないのでしょうか。忙しさのために、気付かなくなっていたのではないのでしょうか。忙しい中でも、捜し求め、ついにイエスにたどり着くのはここ教会です。

個人で、また家族で、現代の神殿である教会に来て、ようやく気がつくのです。「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前でしょう。」捜しても捜しても見つからないと思っていたのに、いつもそばにいたのです。いつもそばにいます。このことに気付くまで、長い長い回り道をしているのかも知れません。

生活のいちばん深い所で流れているイエスの照らし、導き。なかなか生活の中で気付かずいます。生活の中で気付くことができれば幸いです。遠回りのようにいて、教会に足を運ぶことが、イエスという何よりも大切な宝に気付く近道なのです。

ぜひ、いちばん大切なはずのイエスの姿を、教会の中で見いだしてください。「わたしがいつもあなたのそばにいて、当たり前だということを、知らなかったのですか。」この言葉に励まされて、また新たな年に向かう力を願い求めましょう。

あなたの中に、あなたの家族の中に、いつもイエスがそばにいて、イエスと共に家族は成長し続けます。

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）